
Soul Spirit?閃光少女?

弥生雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Soul Spirit? 閃光少女?

【Nコード】

N4136U

【作者名】

弥生雨

【あらすじ】

精霊執行官である学生・神山鍵一と相棒の精霊スピリットは、ある日、男子学生が謎の通り魔に会い、一人の女生徒が行方不明になったことを知る。

この事件に精霊が関わっているのではないかと睨んだ二人は、調査を開始するが。

バトルあり、恋愛要素ありの学園ライトノベル。

自サイトからの転載です。

序章

不意に激しい衝撃が背中を撃った。

「っ!？」

とたんに昏寝から飛び起きた神山鍵一は、

「……………」

何が起こったのだろう そんな表情を浮かべていた。

そのうちに湧き出してきた欠伸の後、辺りを見回すことでようやく頭が追いついてきた。

隣には赤いベンチ。いつも鍵一が昏寝に使っているベンチだ。鍵一はこの上で、先ほどまで惰眠を貪っていた。そして寝返りを打ったときにベンチから滑り落ちたのだ。

もう一度欠伸をして、鍵一は立ち上がる。しりを二度ほど叩いて、ズボンについた土を落とした。背中の方も、手が届く範囲で叩いておく。

そしてぐつと背伸びをして、大きく息を吸い込む。

ようやく落ち着いたところで、三度目の欠伸。合わせて、腹の虫が鳴いた。

「腹、減ったな……………」

腹をさすりながら、鍵一がぼつりと呟く。

昼食はきちんと食べたはずだが、この時分になると、きっちり腹が空く。

鍵一の腹時計はどんな時計よりも正確だ。

足元に目を走らせて、ふと違和感に気がつく。

「スピリット？」

鍵一は愛猫の名を呼んだ。

寝る前に腹の上に乗ってきたのだけは記憶しているが、それからのことはさっぱり分からない。

愛猫も腹を空かせる時間だ。

自分の元を離れて、そんなに遠くへ行くことはないはずだ。
何かあったのだろうか。心配になってくる。

「スピリット？ どこだ？」

もう一度呼びかけると、どこからか鳴き声が聞こえた。

鈴を転がすような綺麗な声。間違いないくスピリットのものだ。

視線だけで彼女を探すと、近くの草むらから、子猫がひょっこりと顔を出した。

小さい前足で地面を擦り、這いずり出てきたスピリットが鍵一の足元に駆け寄り、幾度も鳴いた。よしよし、と言いながら鍵一が彼女を抱き上げる。

「お前、どこ行ってたんだ？」

スピリットは何も答えず、ただ大きな瞳で鍵一を見つめ返すだけだった。

「……、まあ、いいけどよ」

みい、みいみい。スピリットが幾度も鳴く。

「はいはい、腹へったんだよな。俺だつてへってるよ」

じゃれついてくるスピリットを抱き上げて片腕で抱えたまま、鍵一は空いている手で鞆を掴み、歩き始める。下駄箱の方へと向かい、靴を履き替え、すぐさま引き返してゆく。

校門を出る前に、学校の大時計へ目をやると、すでに午後六時を回っていた。

ホームルームは五時前には終わるので一時間と少し、寝ていたことになる。

校外へ出たところでスピリットを下ろした。

買い物してから帰ろうと鍵一は思った。

一人暮らしなので、家事はすべて自分でやらなければならない。

数年間、その生活を続けているので、おさんどんくらいはお手のものだ。

冷蔵庫に幾つか料理を作り置きしていた覚えがある。

米は昨日から炊きっぱなしだから大丈夫、なはず。

作るのに時間をかかる料理は空腹具合からNG。
とすると、サラダならばすぐ作ることができる。

スピリットには生魚を買うとして……。鍵一は財布を取り出し、
中身をあらためた。

手持ちは二千元と数百円ほど。

これだけあれば十分だろう。野菜も魚も商店街で買えばいい。

「スピリット、買い物してくけど良いよな……？」

不意に後ろの方から突き抜ける悪寒。

「ぶげっ!？」

直後、後頭部に激痛が走り、脳内で衝撃が大爆発。

思わず悲鳴を上げる鍵一。

意識が、次元の彼方へと吹き飛ばされそうになる。

痛む後頭部を手で押さえ、眼尻に涙を浮かべながら鍵一が恐る恐る
振り向くと、そこに一人の少女の姿があった。細身の美人である。

「ひ、陽菜……」

恨めしげな声を出すと、朝生陽菜あそつ・ひなは満面の笑みで鍵一を出迎えた。

「こんにちは、鍵一」

「いや、こんにちはっつうか……俺に何か言うことはない？」

「え？ 何が？」

「……………いや、なんでもないっす」

鍵一はやれやれ、といった調子でため息をついた。

叩かれたときに落としてしまった鞆を拾おうとして、スピリット
が大口を開けて欠伸をしているのが目に入る。

鍵一は呆れ顔をした。

そして鍵一をどついた本人は、悪びれた様子もなく鍵一の肩を叩
いてくる。

「何？」

鍵一が尋ねると、陽菜は笑顔で言い放つ。

「お腹すいた」

「……………」

知らんがな、という言葉が思わず出そうになるが、危ういところで引つ込める。

「ひよつとしなくてもあれか？ たかりなのか？」

「人聞き悪いなあ。ただ、神山家のエンゲル係数上昇のために一役買って出ようかな、って思ってるだけだよ。ホントにそれだけ」

「エンゲル係数って上昇すると家計的に問題が生じちゃう危険な数値なんだけど？」

「やだなあ、エンゲル係数は食卓の賑やかさに比例するって公式があるじゃない。こついうのをなんて言うんだっけ？ 一石二鳥？」

「そりゃあ、お前は一石二鳥かもしれんが、こつちは百害あつて一利なしだ」

「難しい言葉知ってるね」

そう言ったところで、陽菜の腹の虫が鳴った。すぐに顔を赤らめてエへへと笑い、

「頭使ったらもつとお腹すいちゃった。ね、鍵一、ご飯食べたい」
なんてことを言うてくる。

どうやら彼女の中で、夕食を御馳走になるということは確定しているらしい。

鍵一に拒否権は……おそらく与えられていないだろう。

手のかからないものを作るつもりだったが、陽菜が加わるとなるとそうはいかなくなる。

メニューを考えなおす必要があるそうだ。

「じゃあないな。いいよ、お前の分も作るから、貪り食ってけ」

「やった！ お言葉に甘えて、ゴチになります」

声を弾ませて、足取りも軽く陽菜がスピリットと共に駆け出してゆく。

鍵一は苦笑しながら、すぐさま後を追いかけた。

その後ろで、小さな影が一つ、妖しく揺らめいた。

間もなく、閃光少女事件 が幕を開く。

第一章

地方都市から山を一つ越えた場所に、風見町はひっそりと存在している。

田舎というほど田舎ではなく、都会というほど都会でもない。風見はそんな町だった。

大きな一本杉を頂きに称える小さな山を、町の人は風見ヶ丘と呼んでいる。

その風見ヶ丘を背に据えた場所に、私立風見学園がある。

風見学園は、風見の地に存在する数少ない高校の一つである。

神山鍵一は、この風見学園に通っている。

春が過ぎ、夏の陽気が顔を出し始める頃……。

風見学園は文化祭を四日後に控え、熱気に満ち溢れていた。

町で催される学業機関の文化祭は基本、町を上げての一大イベントとなる。

風見学園の文化祭は二日間開催され、準備には一週間を費やし、その間には授業が一切行われない、というほどの気合の入りようである。

鍵一のクラスの出し物は喫茶店、らしい。

詳しいことは一切分からない。

クラスの出し物などに気合いを注ぎこむつもりは最初からなかった。

鍵一にとって文化祭は新曲発表の場にすぎない。

文化祭と言えば、学生バンドのはばかりところだ。鍵一も一年上の先輩とともに、>ミラオレンジビスケット<という名のバンドグループを結成している。

鍵一は現在二年生。去年の文化祭にもライブを行い、なかなかの評判をおさめていた。

演奏予定の曲は全部で五つ。その内の四つが女性の先輩をボーカ

ルに据えた楽曲だ。

やはり先輩の顔を立てる、ということもあり、後輩の鍵一はたった一曲だけ、ボーカルを務める曲を自分で作り上げる。作詞、作曲、すべて自分だけで行うのだ。

今回発表する新曲は、二か月前から気合を入れて作り込んだこともあり、なかなかのできであると自負している。最近はその練習にずっと追われている鍵一であった。

今日も数年前から使いこんでいるギターを携え、登校するのである。

学園へと連なる勾配を、欠伸を連発しながら鍵一は登ってゆく。その後ろをスピリットがしっぽを振りながら、ゆったりとついてくる。

中ほどまで上ったところで、後ろから鍵一を呼ぶ声がした。振り向かなくても、誰なのか分かる。

昨日、倒れるほど夕飯をかつ食らっていった陽菜である。

「おはよ、鍵一」

足取りも軽く近寄ってきた陽菜が挨拶をする。鍵一は軽く会釈してそれに答えた。

「昨日はごちそうさまでした」

「なんかそれだけ聞くとすごくイヤラし……いや、ゲフンゲフン。なんでもない」

言葉を濁して、鍵一は咳払いをする。

「ま、それはそれとして……どういたしまして」

四合は炊いていた米がものの十数分で陽菜の胃袋に消えてゆく様は、なかなか圧巻だった。

それほど飯を平らげても、陽菜のボディラインは細さと色っぽさを完璧なまでに維持している。

いったい食べたものはどの胃袋に消えていることやら。

彼女のような人間が世界にあふれているから、食糧不足が世界的問題として取り上げられる世の中になるのだろう。

「鍵一さ、今日もバンドの練習？ 出し物の手伝いはしなくていいの？」

「あー、いいだろ別に。どうせクラス委員も俺を頭数に入れてないと思うし」

鍵一のように使えない人間に時間を割くくらいなら、仕事のできる面々で着実に物事を進めてゆくほうが、遥かに効率がいい。それをクラス委員は理解しているだろう。

担任も鍵一には初めから期待していないようで、何も言ってこない。

文化祭準備日三日目。作業も中盤に差し掛かり、忙しくなってくる頃だ。

同じクラスの人には、是非とも頑張ってもらいたい限りである。

鍵一は鍵一で、バンドの練習に全身全霊を打ち込むことにしている。

「ふーん……」

陽菜はどこかうらやましそうな瞳で、鍵一を見つめてくる。

「いいよね、管理職についてないやつは。私なんて、学校内を飛び回って大変なのに」

陽菜はAクラスのクラス委員を務めている。仕事のできる女らしく、クラスメイトからの信頼も厚いようで、なによりである。

「まあまあ、いいじゃん。期待されてるってことだろ。頼れる姉御は大変だな」

「もう、他人事なんだから。男らしく、何かあったらいつでも手を貸すぜ！ とか言ってくれてもいいんじゃない？ 白い歯をこっ、キラリと光らせたりしながらさ」

「クラス企画自体ぶっつぶれてもいいんじゃないくらいでも手を貸すけど」

「うー、遠慮しとく……」

陽菜が小さなため息をつく。

その様子からして、陽菜のクラスは猫の手も借りたいくらい忙し

いようだ。

いったいどんな出し物をするのやら……当日の楽しみにとっておくことにしよう。

鍵一は密かに決め、内容について尋ねないことにした。

「文化祭って楽しいけどさ、準備ってなると憂鬱だなあ」

頭の後ろで両手を組み、陽菜が呟いた。

「どうやら、あちらこちらをかけずり回ってかなり疲れているようだ。」

それがあと四日も続くとなると、憂鬱になるのも分かる。

「じゃあさ、準備日の間はさ、夕食、ウチに食いに来いよ。それでいいだろ？」

そう言うと、陽菜の顔に天使の笑みが咲いた。

「うん。だったら頑張る！ おいしい夕食のために！」

一人ガッツポーズをとり、決意を新たにする陽菜。

鍵一はそんな陽菜に思わず頬を緩めそうになり、すぐさま引き締める。

下手にだらしない顔を見せると、陽菜にどんな弄られ方をするかわかったものじゃない。

小走りで鍵一の前に出た陽菜が振り返り、「ところでさ、鍵一」と話を切り出す。

「ん？」

「今朝のニュース、見た？」

「いんや。毎朝、テレビをつける暇がないくらいの時間に起床するもんでね」

「そっか……」

言おうか、言うまいか……そんな表情を浮かべる陽菜。

「なんだよ……。なんかあったのか？」

「なんていうか、大変なこと、みたいなんだけど、うーん、でも……」

「まどろっこしいな。はっきり言えよ」

「……なんかね、よその町でひんぱんに神隠しがおきてるんだって
「神隠し？ そりやまた……」

「あ！ その目！ 鍵一ってば信じてないでしょ」

「いや、だってその……ねえ？」

逃げ道を探して愛猫に目をやる。しかしスピリットはすぐさまそ
つぽを向いて尻尾を立てた。

彼女をほったらかしにしたまま陽菜とずっと話していたのがまず
かつたらしい。

「そりゃあ、私だって根っから信じてるわけじゃないよ。でもさ、
なんか……これはヘンだな、って思って」

「失踪ひとつとって神隠しなんてほざく今のメディアの方が十分へ
ンだと思うけど」

「それはまあ、そうだろうけど……。でもさ、九年前にもあったで
しょ？ 同じような事件」

鍵一は頷く。今は亡き叔父から、その事件の話は聞いている。

叔父が鍵一を養子に迎える一年前、今からちょうど九年前に、全
国で神隠しが横行するという事件が起こった。

大多数の人間が失踪し、誰一人として戻ってくることはなかった
らしい。

ただ一人を、除いては。

「また九年前と同じようなことになるのかなって……。そう思ったの
「なるほどな……」

納得した様子で、やがて懐かしむように目を細める鍵一。

「そっか。もう九年か……」

しみじみとした口調で呟いた鍵一の、初雪のように白い髪を風が
揺らした。

叔父曰く、鍵一の白い髪と心を奪うほど深く透き通った翡翠色の
瞳、そして左手の甲に広がっている幾何学的な模様をした痣は、神
隠しに遭ったことを示す証拠、であるらしい。

鍵一も、九年前に起こった神隠し事件の被害者なのだ、と。

そして 事件の、唯一の生存者。

事件に遭ったときのことを、鍵一はほとんど覚えていない。覚えていてるのは、白い病室で目を覚ました時、のちに自分を養子として迎え入れてくれた叔父、源三げんぞうとその妻、月子つきこの優しく穏やかな笑顔だけだ。

そしてその源三と月子は三年前、事故でこの世を去っている。

「鍵一？」

「ん？ ああ、大丈夫。ちょっと考えてただけ」

陽菜に心配かけまいと、鍵一は軽口を叩く。陽菜は渋々了解したように、唇を尖らせた。

「なら、いいけど……」

「なんにせよ、九年前みたいな大事件にならないことを祈るのみだな」

「ん、まあ、そう、だよね……」

そう言って、陽菜はつまらなそうな表情をする。

「もしかしたら九年前の事件と何か関係があるかも知れないのに、興味ないんだ？」

つまらねーの、と陽菜がぼやく。

「つまらん男で悪かったな。厄介事はできるだけ避けて通りたい夕チなんだよ」

そうでございますですか、と陽菜が欠伸混じりに返した。

そして、眼尻に浮かんだ涙を拭って、一言。

「さあて、今日も頑張るつと」

ちょうど、校門までさしかかかってきたところだった。陽菜がスカートの裾をはためかせ、小走りで駆けてゆく。陽菜の白く、健康的な美脚に思わず鍵一は目を取られそうになり、すぐさま視線を彼方へと逸らした。

(そりゃあ、クラスで人気にもなるよなあ……)

ちらりと陽菜の方を眺めながら、鍵一はつくづく思った。

おもに男子からの人気が爆発的だ。

彼女と一緒にいる頻度が高い鍵一は、いったい何人の男の恨みを
買っているのやら……。

陽菜が一足先に校門をくぐってゆく。鍵一とスピリットがゆっく
り後に続く、先んじた陽菜が振り返り、小さく手を振ってきた。

「じゃ、放課後に中庭でね！」

陽菜は下駄箱のほうへ駆けてゆく。

彼女の背中を視線で追ってから、鍵一は足元へと視線を落とす。
スピリットがかまってほしげな様子で足元にすり寄ってきていた。
「お前、へそ曲げてたんじゃねえの？」

抱き上げながら尋ねると、スピリットは恨めしそうな瞳をして、
ぷいと顔を逸らした。

「あー、悪かったよ。ごめん。もうほったらかしにしないから、機
嫌なおしてよ」

ゆっくりとスピリットが顔を正面に戻す。そして、小さな口を開
いた。

『お弁当食べさせてくれなきゃだ。絶対ヤだ』

「……………、了解。つつか、お前が俺の弁当食わなかったためし、
ねえだろ……………」

鍵一はため息をついて、スピリットを下ろした。

少しは機嫌が直ったようで、彼女の足取りは軽やかだ。

欠伸とともに後頭部を掻き、鍵一も自分のクラスの下駄箱へと向
かった。

去り際に、「じゃ、スピリット、昼休みに中庭で」と言い残して。

練習は昼休みが終わったのち、とのことである。

それを聞いた鍵一は拍子抜けした。

バンドのメンバーである二人の先輩が、出し物の準備に忙殺され
ているのが理由である。

そうになると、鍵一は昼休みまですることがない。

いまさら自クラスの準備を手伝う気にもなれない。
どうしようかと無意味に廊下を行ったり来たりしながら考えていたが、何も思いつかない。

その内、Bクラスの面々が木の板を幾つも運んでゆくのを見て、ここにいると邪魔かな、と思い、移動することにした。

屋上にも行っていれば、誰の邪魔にもならないだろう。
さすがに中庭に出るのは気が引ける。屋上で時間をつぶすとしてしよう。

鍵一はそう決めて、移動を開始する。

屋上へ向かう途中でも、忙しそうな学生たちとすれ違つ。その慌ただしいこと……。

(皆、勤勉なんだな……)

鍵一は感心する。疲れるだろうから、あまり見習いたくはない。

働く人たちをよそに、鍵一は何食わぬ顔で階段を上がり、屋上を目指す。

外に出るための扉が見えてきた。

取手に手をかけて押してみると、開かない。引いても開かない。鍵がかかっている。

「参つたな……」

呟いてみても、事態は好転しない。何かないかな、と思って辺りに目を走らせる。すると、足元に細い針金が二、三本落ちているのに気づいた。

顎に手を当て、思考を巡らせる。針金を手に取り、閃いた。

こいつで鍵をこじ開ければいいのだろう。

しかし錠破りの技術を鍵一は持ち合わせていない。

とりあえずやってみようと決め、試してみる。

手ごたえがあるようでないようで……続けること十五分。
がちやり、といかにも鍵が外れたような音が聞こえた。

(おっ?)

取手を回して、扉を押す。ゆっくりとそれは開いた。

差し込む太陽の光が鍵一の目を貫く。少しだけ目を閉じてから、外に出た。

穏やかな風が、純白の髪をなびかせた。鍵一は深呼吸をして、外の空気を堪能する。

校舎裏の風見ヶ丘に茂る木々の匂いが心地いい。

呼吸をするように欠伸を漏らして、鍵一は転落防止用のフェンスに歩み寄る。

フェンスを背もたれにして座り、もう一度欠伸をかく。昼寝をするには絶好の陽気だ。

眠気が思考を侵食し始めるのを鍵一は感じていた。

毎日寝坊をするほど寝ているというのに、いつの間にか、昼寝をする悪い習慣が身につけてしまった。

いつもダラけたダメな大人になりそうだな、と思いながらも、押し寄せる眠気には逆らえない。

鍵一の顔がだんだん、前へ後ろへ傾き始める。

数分の間うつらうつらした後、鍵一の意識は夢の世界へと旅立った。

乾いた空気を肌を感じながら、少年はひたすら走り続けている。

終わりを迎えたような色彩を放つ空。

太く聳える木々に囲まれた山道。

どことも知れない場所。

後ろからは言い知れない恐怖がどこだ、どこだと叫びながら追いかけてくる。

捕まったら、命はない。それだけは理解していた。

立ち止まることはできない。

力の続く限り、どこまでも逃げることにしか少年にはできなかった。

恐怖に立ち向かう術を、彼は持ち合わせていない。

皆、死んでしまった。共に連れてこられた仲間は一人居らず殺さ

れた。

生き残ったのは少年、ただ一人。しかし少年の逃走劇も、終わりを迎えたつある。

だらりと下がった左腕や、重そうに引きずる右足の傷口から零れる血が、点々と跡を残してゆく。

体力はすでに限界を超えていた。

そんな少年を突き動かす衝動はただ一つ。

死にたくない。

その思いだけが少年の意識を肉体に繋ぎ止めていた。

助けを呼ぼうにも、この世界には自分を助けてくれる者はいない。

絶対の孤独に、少年は身を震わせる。

着実に忍び寄ってくる死の足音。

時を増すごとに膨らんで行き、心を蝕んでゆく。

心細さ……恐怖……死……。

ありとあらゆる感情が渦を巻く。

涙と鼻水が溢れて、止めることができない。

滂沱しながら、必死に少年は前に進む。

その先に行けば助かる。きっと、助かる。

そう信じ、己と戦いながら、走り続ける……。

顔を強打した衝撃で、鍵一の意識は急激に覚醒した。

鼻に強い痛みが差し込んでくる。

鼻血が出ていないか何度も確認しながら、鍵一はのっそりと身を起こした。

腕時計を見ると、針は十二時二十二分を指していた。

寝過ぎたようで、頭の中にはまだ薄い靄がかかっていた。

大欠伸をかき、伸びをすると体の節々が軋んだ。

もうすぐ昼休みに入る時間だ。昼休みの後にはバンドの練習が待っている。

小腹も空いているし、スピリットに弁当を食べさせる約束もしている。

そろそろ降りて、中庭に行かなければならない。重たい体を引きずり、鍵一は扉のほうへ歩いてゆく。

取手に手をかけ、力任せに扉を開いた、そのとき、

「おぶっ!？」

何者かの強烈な体当たりを受け、鍵一は思いがけず声を上げた。とっさのことに反応できず、勢いそのまま、何者かに押し倒される。

重い、というほどではない加重を、鍵一は感じた。

同時にしたたかに後頭部を打ちつけてしまい、視界で真紅の閃光が踊り回る。

飛びそうになった意識をなんとか引き戻し、顔だけを上げる。

「痛い……」

胸の中の人物が、小さく呟いた。濡れ羽色のショートヘアがよく似合う、美人がそこにいた。

おしとやかな顔立ち、おっとりとした雰囲気は陽菜と対照的で、魅力的である。

鍵一は呆けそうになって、すぐに顔を引き締めた。

(男って悲しい!)と心の中で叫ぶ。

「あ、あの……」

おずおずと声をかけると、女生徒も顔を上げた。

二人の視線がばちりと合う。

とたんに、少女が顔を朱に染めた。

「あ、わ、ご、ごめ、ごめんなさいっ!」

女生徒が急に慌てだし、ばたばたしはじめた。

「ち、ちよ、待って、おち、落ち着いて!」

つられて鍵一も慌て始めてしまう。胸の上で少女がばたつき、それに合わせて鍵一の息が詰まる。

なんとか少女を落ち着けるために声をかけて、三言ほど言い放つ

たところで、ようやく少女が落ち着きを取り戻し、鍵一から飛び退くように離れた。

細い手を頬に当て、恥ずかしそうに俯いた彼女の顔は、薔薇のように紅く染まっていた。

少女が申し訳なさそうに鍵一をちらり、ちらりと見る。

思わず鍵一も恥ずかしくなってしまう。不思議な子だな、と鍵一は思った。

「えーと……」

なんて切り出そう。鍵一は考えながら口を開いた。

「ケガはない？」

「だ……だい、じょうぶです」

女生徒が声をとどころ裏返ししながら、吃りがちに答える。

「あの！ご、ごめんなさい……」

俯いたまま鍵一の方に向きなおり、謝ってくる。恥ずかしそうな様子は相変わらずだ。

「あ、ああ……別に大丈夫なんだけど、まあ……とにかく、ケガがなくて良かった」

「……ごめんなさい。あの、ありがとう、ございました……」

「ん？なにが？」

「その……、助けて、いただいて……」

「いや、あー……、うん、どういたしまして」

助けるつもりで助けたわけではないので、弱り果てる鍵一である。後頭部を力なく掻き、何かないか、と話題を探す。

「……………あ」

と、そこで鍵一はふと気がついた。少女の顔に見覚えがあったのだ。

「輝立きりたつだっけ？」

思い出した苗字を口にすると、女生徒が驚いたように目を見開いた。

「間違ってたらごめん。確か、輝立……だったよな？」

「は、はい……。輝立きりつ都みやこです。Cクラスの」

「だよな。俺、神山。神山鍵一。同じクラスの」

鍵一が名乗ると、輝立は一瞬考えてから、すぐ閃いたように顔を上げた。

「あの神山さん……ですか？」

語尾が申し訳なさそうに滲んで消える。

どの神山さんが自分なのか鍵一は知らないが、あえて深く追求しない方が良さだろう。

きつと藪蛇にしかならない。

「うん。たぶんその神山さん。でも気軽に？鍵一？って呼んでくれると……」

さらに軽口を叩こうとして、すぐさま鍵一は口を噤んだ。

初対面ではないにしろ、初めて会話するのとそう変わらない人にいきなり名前の方を呼んでいい、となんて、気を遣わせてしまうだけではないか。

「あ、ごめん。そんなこと言われても、あれだよな」

鍵一が謝ると、輝立はとんでもない、と首を激しく横に振った。

そして、また少しだけ、顔を赤くして、何かをぼつりと呟いた。それは、あまりにも小さすぎて鍵一の耳には届かなかった。

「あー、ええと……ところでさ、輝立。ここに何か用でもあったの？」

話題を切り替えてそう尋ねると、輝立の顔色がさつと変わった。

わずかに青ざめ、所在なさに視線を泳がし始める。

鍵一は眉を顰めた。

「たいしたことじゃないんです。それに、神山さんには関係ありませんし……」

慌てて手を振るが、ただ事じゃないのは震える声が明確に示していた。

「そつか……？」

「ええ……。私が、悪いから……。どんくさくて、なにやっても駄

目で……、だから……」

輝立はゆつくりと目を伏せた。

憂いを帯びた顔色を見てみると、鍵一の中で、彼女を放っておけない気持ちかどんだん、どんだん大きくなっていく。

「あのさ、お節介かも知れないけど……なんか困ったことがあったら、いつでも相談にのるぜ？ どうせ年がら年じゅう暇を持て余してる身だからさ」

おずおずと輝立が顔を上げる。その瞳には、期待と戸惑いの光が宿っている。

この人を信じてもいいの？ と、そう言わんばかりの感情を、鍵一は感じ取る。

「力になれるかどうかは分かんないけどさ、一人で困るよりはずつといいと思うし……」

輝立は何かを言い出そうとして、止めた。

どこかもの悲しそうに微笑み、消え入りそうな声で言う。

「……ありがとうございます。でも……大丈夫です」

彼女が無理をして笑っているように、鍵一には思えた。

しかし、それ以上は何も言えない。

「そうか……。まあ……、何かあったら、いつでも声かけてよ。話聞くからさ」

はい、と輝立は顔をあげて笑った。こんどは、嬉しそうな微笑みだった。

鍵一も笑い返した。そして、それじゃ、と行って、その場をあとにした。

優しい風は悪夢の予兆。風にまぎれ、ひと筋の悪寒が風見の地を吹き抜ける。

それは瞬く間に町を駆け抜け、風見ヶ丘へと登ってゆく。

(?)

突然感じた違和感に、鍵一は思わず振り向いた。

(……………何だ?)

険しい瞳で周囲を睥睨する。

気色の悪い気配が、どこからともなく漂ってきている。

昔、どこかで感じたことのある気配だ。

懐かしくて、忌まわしい悪寒。

透き通る空気にまぎれた悪意を、鍵一は嗅ぎ逃さなかった。

それは巧妙に姿を隠してゆき、やがて消えた。

(……………消えたか)

鍵一は小さく舌打ちする。

あの小さな悪意を通して、とんでもない片鱗を垣間見た気がしたからだ。

洒落にならないほど強大な存在が根に繋がっている予感がする。

(俺が気づいたのを察知しやがったのか……………?)

相手は、馬鹿ではないらしい。尻尾を掴まれる前に撤退する慎重さを持ち合わせている。

(厄介なことにならなけりゃいいが……………)

目を伏せてため息をつく鍵一。

嵐の前の予兆は、いつも同じように訪れる。

だが、今回は妙だ。具体的に何が、と言い切ることはできない。

ただ、どうにも腑に落ちない感覚が心の中に蟠る。形のない不安が渦を巻き続けている。

鍵一は首を振った。

今、考えたところでどうにかなることではない。

向こうがどう出るかを待つしかないだろう。

その上で、自分が何をすれば良いのかを判断する。それが一番手っ取り早い。

中庭へ降りてゆく。そこは昼食をとる学生たちで賑わっていた。

愛用のベンチには誰も座っていない。鍵一がベンチに腰を下ろし、弁当を取り出すと、ベンチの下から這い出てきたスピリットが、隣

に飛び乗ってきた。

「遅い！ お腹すいた！」

第一声がそれかよ、と鍵一は愛猫の素直すぎる主張に呆れ顔を浮かべる。

肩を竦めて弁当を取り出し、蓋を開いた。

白米に塩鯖、ウインナー、玉子焼き、肉じゃが。すべて夕飯の残りだ。いつも寝坊するほど寝ているので、まともなおかずを作る暇などない。

弁当の中身はたいてい、前日の夕飯で残ったものをそのまま適当に詰めている。

ふたを皿にして塩鯖を乗せてやると、スピリットが嬉しそうに食いついた。

よっほど腹が空いていたのだろう。その勢いはなかなかのものだ。鍵一も箸を取り、玉子焼きを口に運んだ。玉子焼きの味はままずだった。

「なあ、スピリット」

食べながら、鍵一が呟く。

「何か感じなかったか？」

「何が？ いつ？ どこで？」

「いや、何がってのは具体的に言えないんだけどさ」
「うーん……、とスピリットが首を捻る。」

「別に変なカンジはしなかったけど」

「そっか……」

「じゃあ、俺の気のせいかな、と鍵一は思う。」

しかし、もしも気のせいではなかったら……取り返しがつかなくなるような気がする。

用心しておくに越したことはないだろう。

「ヤバいことでも起こりそうなの？」

「そこらへんがさっぱり。なんか起こりそうなんだけど、そうでもないような気もするんだよな。なんつうか、嵐の前の静けさ？ み

「たいな」

「嵐の静けさ、ねえ……？」

スピリットが呑気に欠伸をする。

（こいつはいつもいつも……）

思わず毒づきそうになって止めた。

この精霊ケット・シンのお気楽思考は今に始まったことではない。

「鍵一さ、左手は反応してる？」

「……いや、全然」

「なら大丈夫っしょ。何か起こるとしても、きっと、たいしたことないわよ」

「その自信はどっから湧いて出るんだよ……」

左手が反応しない。だからたいしたことはない。

そんな簡単なものならば苦労はしないのだが。

「全く心配症だわね、鍵一は。あんま悩んでるとき、ハゲるわよ」

「恐ろしいことを言うな」

「冗談じゃない、と鍵一は頭に手をやった。ハゲるくらいなら死んだ方がマシだ。」

「だって、あんたが変な気配感じるときって必ず左手反応してたんでしょ？」

「そりゃ、まあ……」

「反応してないってことは、何もなかったことよ」

「そうかあ……？ だったら心配しなくてもいいんだろっけどさ……」

なんか、そんなんじゃないんだよなあ、と鍵一は内心で呟いた。

そんな単純なものでは決してなくて、たとえば、鍵一の左手の反応圏を掻い潜っているような。

（俺に気配だけを感じさせといて、それでいて決定的な証拠は絶対に掴ませない……）

そんなとんでもない相手のような気がするのである。

「あたしは心配しすぎなだけだと思うなあ」

「……、はあ、そうかい」

ならば、鍵一も心配するのはやめよう、と決めた。
病は気から、と言うし、気にしたところで疲れるだけだ。

スピリットのようにお気楽思考に行くでしょう。

何事もなければそれでいい。そう、陽菜に危険が及ばなければ、それで。

「近頃、不穏な空気が流れだしてるみたい」

「それを今言ってたんだろ。何を聞いてたんだよ、お前」

「違うわよボケ。精霊界で、よ」

「誰がボケじゃ。それに、精霊界だつて？」

「ええ、アドに聞いたんだけど、あまりいい雰囲気じゃないらしいわ、あっちも」

「アドに？ だったら信憑性は高いな」

アド、ことアドネルシアは風見ヶ丘の頂に立つ、樹齢幾千年の御神木……に宿る聖霊だ。

世界が創生された頃より、この風見の地を見守ってきた偉大な彼女は、それでも人間に換算するとまだ若輩の年頃だという。精霊界にも通じ、スピリットや鍵一にとっては姉のような存在だ。

スピリット曰く、こちら側に來たての頃はよく世話をしてもらったらしい。

「そっか。精霊界がヤバそうってことは、やっぱり俺が感じた気配ってあながち気のせいじゃねえかもな……」

「どーかしらね？」

欠伸をかけた後、スピリットはニヤついた顔を鍵一に向ける。

「ニヤけんよ。気味悪いなあ」

「あたしみたいなかわいこちゃんつかまえて、ずいぶん失礼ぶつこいてくれるわね」

「どこの誰がかわいこちゃんだ、コラ。そんな素敵な存在がこの場にいるのなら是非とも紹介してほしいぞ、マジ、でっ!？」

皆まで言わせず、飛び込んできたスピリットの頭突きが鍵一の腹

部に炸裂！

言葉を詰まらせて蹲る鍵一。スピリットがひよいと飛びのき、ふふんと笑う。

「き、きさ、ま……弁当の恩も忘れて……………っ！」

「天罰観面よ」

「よ、よくも……………！」

飛び出してきそうな昼飯を必死に飲み込む。

そして、スピリットがおちよくるように尻尾を振るのを見て、鍵一はあからさまに舌打ちした。

「あら？ どうかしたかしら？ 少年」

「覚えてるよ、穀潰し……………」

恨めしそうにスピリットを睨む鍵一。しかし、それも一瞬で、すぐさま昼食に戻る。

五分とたたずに弁当を平らげ、背伸びを一つすると、欠伸が呼吸をするように溢れた。

もうひとつ大欠伸をして、鍵一はベンチに寝転ぶ。そして目を閉じて深く息を吐いた。

腹の上に何かが乗ってくる。スピリットだ。

食べた後にすぐ横になるのは体に悪い、とよく聞くが、これが鍵一の日課でもある。

さぞや体に悪いだろうが、鍵一の体型は細身を維持したままだ。

太りにくい体質のようで、よく陽菜に羨まれる。

将来、そのツケを払わされることになるかもしれない、と鍵一は予測している。

腹の皮が張ると目の皮がたるむ、とは誰が言った言葉だろう。

鍵一はその言葉を地で行く生活を、もう何年も続けている。言いだした人も嬉しい限りだろう。

昼休みの後にはバンドの練習もある。今のうちに英気を養っておくのがいい。

打ち寄せてくる眠気に、鍵一は包まれて沈んだ。

かと思ったとたんに浮上する意識。鍵一はかっと目を見開き、顔を上げた。

腹から滑り落ちそうになったスピリットを抱き止め、上半身を起こす。

「……………」

何故目を覚ましたのか、本人ですらも分かっていない様子である。

そしてふと、違和感を覚えた。

何かがかみ合っていない、だから気持ち悪い……そんな違和感を。

この気配が何を意味するのか、鍵一はよく知っている。これは、よくない予兆だ。

「きえんいつい？」

寝惚けた声でスピリットが呟く。けんいち、と言っているらしい。

「起きろチビ、仕事だ」

「誰がチビよ！　って、仕事？　何が？」

「いいから行くぞ。この感じだと……風見ヶ丘のあたりだな」

鍵一は起き上がり、スピリットを肩に抱いたまま走った。

靴を履き替えずに向かった先は、校舎裏から丘の頂までうねうねと続く山道だ。

青臭い匂いが漂う山道。そこを駆け上がってゆく。幾度も幾度も来たことのある道。何度も通ったことがある道。丘へと続く近道は、選ばない。

鍵一が目指している場所はそこではなかった。もっと深く暗い場所へと、鍵一は走ってゆく。

「……………」

ようやくスピリットが感づき、そう言った。鍵一は何も言い返さずに彼女を下ろした。

すでに鍵一の顔から、眠気にゆるんだ表情は消え去っている。

鷹のように陰しく鋭い眼光　それだけが際立っている。

この表情を、鍵一は普段は絶対にしない。そう、普段は絶対に。

ぱち、ぱちぱちぱち。すぐ傍で火花の散るような音。炎の香り。小さく黄色い閃光が弾けまわり、周囲を旋回する。鍵一は足を止めた。

「おいでなすったか……」

薄く呟く。足元のスピリットが全身の毛を逆立て、火花に威嚇する。

火花が大きくなる。それに合わせて、周囲の気温が上がってゆく。ぱち、ぱちぱち。火花が燃える音、そして電気が弾けるような音。両者が混ざり合い、二人を取り囲む。

「ザコのくせに、味なマネしてくれるわね」

「気にすることあねえ。流れ雲からの三手で詰みだ」

「あいよ」

火花と電撃が猛りを上げる。今にも襲いかからんばかりだ。

先に動いたのは、鍵一たちだった。

スピリットが跳躍し、鍵一の手と交差。

瞬間、閃光が爆発。同時に跳躍した鍵一が錐もみ回転。

独楽のように舞った鍵一の回転蹴り、？流れ雲？が火花の姿を取る火蜥蜴サラマンダーに炸裂し、地面へと叩き落とす。

土くれを飛ばして這いつくばった火蜥蜴へ、さらに落下しながらの踵落とし！

その一撃は吸い込まれるように決まり、悶絶する火蜥蜴。

着地した鍵一は両手を使い回転しながら器用に体重移動、電撃へと振り返る。

電撃を解いた雷霊ヴォルトが、大鬼の姿を現した。

鍵一よりも一回りも大きな巨体が、眼にも止まらぬ速度で拳を打ち出す。鍵一は真っ向から手のひらで受け止める。かと思いきや、接触する瞬間にぐん、と手と身体を引いて攻撃をいなした。

そのまま続く二手、三手目を軽々といなす姿は、まさに余裕綽綽だ。

踏み込みが甘い、軌道が丸見え、力が足りない。そして何より遅

い。遅すぎる。

目を瞑っていても、鍵一は攻撃を躲す自信がある。四手目を弾いて防御を崩す。もともとこれが狙い。

鍵一は間髪置かず、ひざ蹴りを放つ。

それを、もろに浴びた雷霊がぐらぐらと巨体を揺らした。とどめだ。

呼吸を合わせたの、渾身の正拳突き。

それで、終わりだった。

鍵一の電光のごとき突きを受け、吹き飛んだ雷霊は巨体を痙攣させ、沈黙した。

流れ雲から三手で詰み。まさしく宣言通りだった。

雷霊は話が分からないやつだ。

だから、鍵一は悶絶し続けている火蜥蜴へ寄って行き、力任せに引き上げた。

火蜥蜴は蛇のような瞳で鍵一をにらみ返してくる。

「そう睨むなよ。こっちに干渉してきたお前らが悪い」

苦笑いする鍵一の拳から、言葉が響く。

「みそつかすのくせにあたしらのテリトリーに踏み込んだのが運のツキよ」

声の主はスピリットだった。彼女は今、鍵一の拳を包むグローブと化している。

「えーっと、こういう場合、どういうんだったけ？」

「精霊執行官、ソウルスピリットの名の下に貴様らを執行する、じやなかったかしら」

ぐるぐる、と火蜥蜴が唸る。

うるせえ、黙れと毒づきながら、鍵一が頭突きを見舞うと、火蜥蜴はのけぞって身体を痙攣させる。

「つたく、昨今の精霊は打たれ弱くていけねえな。人間の俺だってそんなに貧弱じゃねえぞ」

「あんたは精霊執行官でしょうが。それにあんたの場合はちょっと

特殊」

「そうか？ あんなクソ強い叔父さん持ったら誰だって俺みたいになるぞ」

「だから、それが特殊だっつってんの」

「ああ……なるほどね」

くだらない会話を繰り返す二人。鍵一の腕の先で、火蜥蜴が泡を吹いていた。

何も知らない。どれだけ問いただしても、その一点張りだった。本当に何も知らないようだ、と二人が断定するのに時間はかからなかった。

それ以上尋問しても仕方がなかったので、両者に一撃加えておいて、「二度と干渉してくるな」と釘をさし、火蜥蜴と雷霊は精霊界に叩き返してやった。

手ごたえのない連中だったわね、とスピリットが愚痴を漏らした。全くだな、と鍵一も同意した。

この辺で不穏なことが起きそうなんだ。小さいことでもいい。何か知らないか。

そう尋ねたら、答えは先ほどの通りだ。

(使えねえ奴らだな……)

鍵一はため息をつく。

せつかく何か手掛かりが掴めるかと思ったのに、空振りだ。

胸に渦巻くもやもやは全く晴れていない。

久々に精霊をぶちのめした。収穫はそれだけだ。何の足しにもなっていない。

肩を落として、鍵一とスピリットは校舎へ戻る。

これからバンドの練習だ。気合いを入れなければならぬ。

先輩たちに迷惑をかけるわけにはいかない。気分はあまり乗らないが、頑張るしかない。

スピリットとは中庭で別れた。

特例が出ているとは言え、校舎の中にまでは彼女を入れることはできない。

少し寂しいが、こればかりは仕方がない。

ギターを取るためにいったん自分のクラスの教室に寄る。

クラスメイトが悲鳴をあげながらも、企画成功のために走り回っていた。

鍵一は心の中で応援する。

(俺は別の畑で頑張るよ。だから、みんなはこっちを頑張ってくれ……)

ギターを取り、早々に引きあげる。

駆け足で南校舎を目指す。階段を上り、三階の音楽室に入る。

先客がいた。おそらく別のバンドグループだろう。

練習が終わったようで、楽器を片づけていた。ちょうどいいタイミングのようだ。

鍵一は端の方に歩いて行き、ギターを下ろした。

胡坐をかき、チューニングする。

ギターの弦はためにチューニングしなければ、すぐに音程を狂わせてしまう。

幾度もやってきた調律を、丁寧に進める。

楽器には命が宿るといふ。そんな話をどこかで聞いたことがある。

よく、魂を込めた演奏、などという言葉を聞くが、なるほど、演奏にも命が宿るのなら、楽器にだって命が宿ったところで不思議ではない。

世の中には精霊なんてけつたいなものがあるが確かに存在しているのだ。それぐらい、不思議だとも何とも思わない。

楽器には命が宿る。良いじゃないか。素晴らしいことだと鍵一は思う。

先客が引き上げていった。

入れ替わりで、三年生の岩清水浩丞いわしみず・こうすけと綾小路聖園あやのこうじ・みそのが入ってくる。

二人は鍵一を見つけると、手をあげて挨拶をした。鍵一も顔を上げて挨拶を返す。

浩丞がドラムをセッティングする。彼はドラム担当だ。

聖園が優雅にマイクを準備し、ベースを肩から下げる。

彼女がメンバーのベースとボーカルを担当。

聖園は良家のお嬢様で、貴族の嗜みで鍛えられた伸びやかな歌声は、天使の歌声くと称され、学園中の人気をかつさらうほどだ。

聖園は良い歌い手だ。鍵一は彼女を尊敬している。

彼女と浩丞は、鍵一にとっての良き先輩だった。両者ともどこか高貴なイメージを持っており、近寄りがたい雰囲気醸してはいるが、話してみると二人とも気さくな人物だ。

「鍵一君、調子よさそうだね」

ドラムを適当に叩きながら、浩丞が言う。

「ええ。おかげ様で」

チューニングを終え、鍵一は立ち上がりながら返す。

「神山さんの新曲、楽しみにしているんですよ。私も、浩丞さんも」

聖園が女神のように微笑む。鍵一は顔を赤らめた。褒められると恥ずかしくなる。

「よしてくださいよ。楽しみなんて、そんな……」

「いやいや、事実だよ。僕たちだって、伊達に音楽を嗜んでるわけじゃない。何が良いもので、何が悪いものなのかくらいの判別はできる」

浩丞はドラムを叩く手を止めた。

いつの間にか、聖園も彼のそばにいた。二人は顔を合わせてから、鍵一を見る。

「私たちは、神山さんの作る曲が大好きなの」

「君の歌は心に刺さる。とてもいい歌だ。期待しているよ」

浩丞はにこやかに告げた。

鍵一は、恥ずかしくて、とてもじゃないが顔を上げることができなかつた。

聖園がそんな鍵一を見て、何故か満足気な表情を浮かべる。心に刺さる、と言われた。いい歌だ、とも言われた。

尊敬すべき先輩からそう言われて、鍵一は感無量だった。いよいよ気合が入る。

同時に、果たして新曲が二人の期待にそぐえる出来栄えなのだろうか、と不安になる。

だが、音楽はそういう不安を抱いてはいけない。

迷いは必ず歌声と演奏に出てしまう。

自分の思うまま、表現するのが音楽だ。

深く深呼吸をして、気持ちを落ち着ける。

慌てる心配はない。先輩たちの取り計らいで、練習するのは曲だけだ。

実際に歌詞 歌を入れるのは、本番当日。ぶっつけ本番という状況が、鍵一にとっては一番なのである。

去年もその形だったので、今年もそれで と気を遣ってくれた二人に、鍵一は感謝している。

それに今日は、聖園がボーカルを担当する曲の練習だ。集中しよう。

ギターを下げたまま、ギターケースから楽譜を取り出す。

演奏曲は基本、作曲を浩丞が担当し、作詞を聖園が担当する。

浩丞はドラムのみならず、あらゆる楽器を演奏できる。

その才能たるや目を見張るほどだが、浩丞自身はあくまで趣味の域で嗜んでいるらしい。

一方、聖園の紡ぐ詞は実に幻想的である。

懐かしい童話を思い出させる歌詞の不思議な感覚は、彼女の歌声と調和し独特の世界を生み出す。

二人から学ぶものは多い。鍵一は彼らの良い部分を吸収し、自分の音楽に還元している。

(今日も勉強だな……)

こういう勉強なら大好きだ。鍵一は気を引き締め、ギターの絃に

指をかけた。

第二章

ようやく一段落ついたので、朝生陽菜は自クラスの教室を抜け出した。

朝食を抜いていたので、お腹と背中がくっつきそうだった。

陽菜は時計に目をやった。

昼休みは五分前に終わっている。鍵一の弁当をたかりに行こうかと思っていたのだから、もう、バンドの練習に行っているだろう。

食堂はもう閉まっているので売店に行くしかない。

売店は単価が高いので、できれば避けたいところだったが、それも言ってもらえないほどお腹が空いている。

財布を持ち、陽菜は一階へ降りる。

南校舎へ足を運ぶ。学生食堂と売店はその一階に場所にある。

パンを二つほど買って、戻る。

渡り廊下を歩いていると、音楽室の方から軽快なギター音が響いてきた。

鍵一かな、と思い、陽菜は顔を上げた。

音楽室は三階だ。ここから見上げたところで、中の様子は分からない。だが、

(調子、よさそうだなあ……)

と思った。陽菜は鍵一の演奏を飽きるほど聞いているから、その音色で鍵一のコンディションが分かる。

指が弦上を踊り狂う様子が目に浮かぶ。

合わせて、女性の歌声が聞こえてくる。綾小路聖園のものだ。

天使の歌声、と称されるだけあって、その音色は美しい。思わずうっとりとなってしまう。

ぐっぐ、とお腹が鳴った。

陽菜は顔を赤らめた。食い気の強い自分が恥ずかしくなった。ふと、鍵一に囁かされたらなくて良かった、と陽菜は思った。

あいつは朴念仁で、おまけに乙女心を理解しない馬鹿だ。

あいつのことを考えると、頬が熱くなって、胸が苦しくなるのは何故だろう……。

陽菜は小さくため息を漏らした。

あの手この手を使ってアプローチをかけても、あいつはまるで気がつかない。

もう十年近くも傍にいらつというのに、何とも思わないのだろうか。よく、幼馴染は、長く一緒にいるから友達というよりは兄妹みたいな存在で、好意を持つなんてことはありえないと聞く。

だが、陽菜にはその法則は当てはまらない。

十年も傍にいて、好きにならないなんて嘘だ。

それにあいつは忘れていようだが、陽菜はこの風見町に越してくる前からあいつを知っている。

あいつがそのことを忘れているのは、神隠しに遭つたせいだ。

まだ髪も目も黒かつたころのあいつを陽菜は覚えていてる。

そのころから、陽菜は鍵一に好意を抱いていた。

昔のあいつはいじめられていた陽菜を何度も何度も助けてくれた。恥ずかしい話だが、将来、あいつのお嫁さんになる、なんて約束をしたことだつてある。

だが、それを全て、あいつは忘れていた。神隠しのせいだ。

陽菜は悲しくなった。

自分の好意をまるつきり忘れられていたことに。

それから、押しても引いても鍵一は自分の好意に気が付いてくれない。

ひょっとして、女の子として見られていないのだろうか。

そうだとしたら、それほど悲しいことはない。

だって、胸が張り裂けるくらい、鍵一のことを好きなのに………

鍵一は自分をどう思っているのだろう。それを考えると、もやもやして眠れなくなる。

ただの幼馴染だったら寂しい。

せめて、気になる存在ではあってほしい。

少しでもいい。彼の中で特別な存在であってほしい。好いてくれたなら、それに越したことはないけれど。

陽菜は最近、鍵一のことばかり考える。

彼が何かを隠しているような気がするのだ。

それはきつと、今すぐ話せることじゃないのだろう。

彼が話してくれるのを待つことしか陽菜はできない。

無理やり聞いて、悲しい思いをしたくない。

いつだって私はカヤの外だ。

誰が言ったわけでもないのに、陽菜はそう思った。

鍵一が何を探しているのか、陽菜には分からない。

彼の力になりたい。力を貸してほしい時には、手を差し伸べてあげたい。

でも、言い出すことはできない。そんな勇氣は持っていない。

そんな勇氣があるのなら、とっくに告白している。

告白……………したい。

でも、いざ口に出そうとすると、体の奥底に引っこんでしまう。

自分は根性無しだ。臆病者だ。陽菜はそんな自分のことが、少しだけ嫌いだ。

パンの袋を開けて、ちよっと齧った。レーズンの甘酸っぱい味が口の中に広がる。

(甘酸っぱいなあ、私……………)

命短し、恋せよ乙女、か……………。

陽菜は小さく呟いて、胸を張った。

いつまでもくよくよしているのは自分らしくない。

大きく息を吸い込む。よし、頑張ろう。

パンをもう一口齧る。異変に気がついたのはその時だった。

「外が」

不意に手を止めて、浩丞が呟いた。

「騒がしいね」

聖園がすつと顔を上げる。そして、窓の方へ眼をやり、頷く。

「そうですね……」

鍵一も手を止めて、窓へ近寄る。下の方がざわついていた。

窓を開けて顔を出す。中庭に、生徒が数十人集まっていた。

何かがあったようで、全員が顔を見合わせている。

そこに陽菜が駆け寄っていくのが見えた。秀囲気からして、ただ事ではなさそうだ。

「俺、ちよつと見てきますね」

言い置き、ギターをおいて音楽室を飛び出す。

階段を二段飛ばして駆けおり、身をひるがえして中庭へ向かう。

どよめき声が聞こえる。

数人がある場所を囲って集まっていた。

その後ろから、陽菜が人中の様子を覗きこもつと飛び跳ねたりしていた。

「陽菜」

鍵一が呼びかけると、陽菜はすぐさま振り返った。

「あ、鍵一」

「何かあったのか？」

「うん、らしいんだけど……」

口ぶりからして、陽菜は詳しい状況を理解してはいないらしい。

彼女から色々聞き出そうと思っていたのだが、残念である。鍵一は小さく嘆息する。

「……まあ、お前に何かなくて良かったよ」

「え？」

「あ。……いや、何でもない」

鍵一は即座に首を振る。呼吸をするようにクサイ言葉が口からもれてしまった。

そろそろと陽菜を見ると、頬を僅かに上気させていた。鍵一も頬が熱くなってくる。

「ぷっ、ぷび、ぺ……」

何かを言おうとして、陽菜が噛んだ。意味の分からない言葉を発する。

「えーと、あーと……、と、とにかく！」

鍵一は気恥ずかしさを吹き飛ばして、顔を上げる。

「何があったのか……」

言いかけたところで、人ごみから飛び出してきた男子生徒が、「救急車！ 救急車！」と叫びながら走り去ってゆく。その隙間に飛び込み、鍵一は人を掻き分けながら奥へ進んだ。

陽菜がすぐさま続く。やっとの思いで抜け出し、人だまりの中心へ出た。

男が倒れていた。知った顔である。

「白木！」

鍵一が叫んだ。

クラスメイトの白木幸彦しらかべ・ゆきひこだった。

白木はひどく顔を腫らして、倒れ伏している。呼吸も絶え絶えだ。

鍵一は白木に駆け寄り、抱き起こす。

「白木、お前……」

「う、あ……」

白木が呻く。

酷い。ぎたぎたにやられている。どこのどいつがこんな酷いことを……。

隣で、陽菜が息を飲んだ。見ると、顔を青くしていた。

「おい、何があった」

鍵一は尋ねる。気を失わせないように声をかけ続ける。

白木は小さく首を振る。呻きながら、ある一点を指さす。

指先を眼で追うと、女生徒の靴が一つ、寂しげに転がっていた。

鍵一は困惑した表情を浮かべて、白木を見る。

「せ、んごう……しょう、じょ……」

掠れた声でそう紡ぎ、白木は気を失った。

「おい！ おい！ しっかりしろ！ おい！」

鍵一は呼びかける。救急車の音が急激に近づいてくる。

そして、先生たちが駆けつけてきた。担架を持ってきていた。救急隊員も一緒だった。

白木を担架に乗せると、隊員たちが担架を担ぎ、白木を運んでゆく。

少しの間をおいてから、サイレンの音が鳴り響き、そして徐々に遠ざかっていった。

陽菜と鍵一は、その場に呆然と佇んだ。

鍵一が小さく息を吐いて、転がっていた女生徒の靴を取った。

ゆきひら・ますみ
雪平涼美と名前が書いてあった。

それを陽菜に見せると、息を詰まらせて呟いた。

「涼美……！」

「知ってるのか？」

「うん。クラスメイトよ」

「そうか……」

「鍵一、どういうことなの……？」

「……分からない」

靴を見つめる。当然だが、靴は物を言わない。泥のように沈黙している。

(せんごうしょうじょ……?)

白木が口走った言葉を、頭のなかで繰り返す。

せんごうしょうじょ。

どんな字で書くのだろう……。

まるで思いつかなかった。雪平涼美の靴は沈黙を守り続けている。

雪平涼美が消えた。

そんな話を鍵一が聞いたのは、放課後のことだった。

陽菜の口から、それを聞いた。学校中を探し回ったが、見つけれなかったらしい。

一瞬だけ、神隠し、という言葉が脳裏に浮かんで、すぐに沈んだ。そんな馬鹿なこと、あるわけがない。

陽菜の顔色は悪い。雪平とは友人同士で、よく話す仲らしい。

鍵一は何も言わなかった。こんなとき、どう声をかければいいのか、まるで分からない。

陽菜は、それでもまだ雪平を探してみるから、一緒に帰れないと言った。鍵一は黙って了承した。

陽菜と別れ、中庭へ足を運ぶ。スピリットを迎えに行くのだ。

中庭には誰もいなかった。

しんと静まりかえっていた。学園祭の準備期間だというのに、静寂を抱きこんでいる。

愛用のベンチに、一人の少女がちょこんと座っていた。

フリルがたくさんついたドレスを着た、十四歳ほどの少女だ。

彼女は鍵一の姿を見つけると、手を挙げて彼を呼んだ。

鍵一は少女の隣に腰をおろして、深くため息をついた。少女が顔を悲しそうに歪めた。

「……………やれやれ」

ようやく、それだけを口にした。そして髪をめちゃくちゃに掻きまわす。

「なーんか、……………腑に落ちないんだよなあ……………」

「何が？」

「いや、それが分かんないんだけどさ、どうもしっくりこなくて」

「うん……………なんかヘン、ってカンジなんだよね？」

鍵一は視線を泳がせた後、小さく頷いた。苦々しい表情をする。

「うーん、と少女が首をかしげた。顎に手をやって、頭を前に後ろに揺らす。

彼女がものを考えるときの癖である。

「お前、何が起こったか、もちろん知ってるよな？」

「一応、こつから見えたよ」

猫の姿でね、と少女は付け足した。

「せんこうしようじょ……つたよな、白木のやつ」

鍵一は記憶を反芻する。白木幸彦は確かにこう言った。>せんこうしようじょ<と。

少女が人差し指で頬を撫でながら、顔を上げた。

「心当たり、ないこともないんだけど……」

「へ？」

鍵一は少女を凝視した。少女は眼を合わせずに、考え込む。

「でも、そんなことあり得るかしら？ だってあいつは……」

鍵一を無視したまま、少女が呟き続ける。鍵一はもどかしい気分になった。

「おい、俺を置いてけぼりにすんなよ。きつちり説明してくれ」

少女が顔をあげて、鍵一を見つめた。小さくため息を落としてから、口を開く。

「せんこうしようじょ、って名前じゃないんだけどさ、それから連想できる奴が一人だけいるんだよね。精霊界に」

「……能力的な意味合いでってことで？」

「うん。たぶん、せんこうしようじょって、閃く光の少女って書くと思う。閃光少女」

「閃光、少女……？」

鍵一は頭の中で漢字を連想する。閃光少女。歌のタイトルみたいだな、と思った。

「そんな奴がいるってのか？ 精霊界に」

「そう。能力が危険ってことで、>協会<の監察下にある精霊よ。

確か、フラッシュ・レイアとか言ったかしら……」

「ふうん……？ で、そいつはどんな能力を持ってるんだ？ 名前からして、光を操るとか？」

「惜しい。正解は、閃光みたいに加速することができる能力よ」

「超高速移動、つてわけか……。とんでもねえな」
できれば戦いは避けたいところである。

鍵一だって精霊執行官とはいえ、あくまで人間だ。
目にも止まらぬ速さで動きまわられると敵わない。

「確かに危険だ。シンプルだけど、強力だもんな」
そうね、と少女が同意する。

「でも、なんとか執行できたらこっちのもんよね」
意地の悪い笑みを少女が浮かべた。鍵一はとんでもない、と身震いさせる。

「そりやしめたもんだけどさ、お前、考えてみるよ。速きこと光の如しだぞ？ 執行する前にこっちがブツ殺されちまう」

ちえ、と舌打ちする少女。

鍵一は、こいつは何を考えているんだ、という目で彼女を見る。

取らぬ狸のなんとか、ではないが、それにしたって少女のお気楽思考は本当にどうかしていると思う。鍵一は深く息をはいた。

「交戦しないにこしたこたあねえよ」

こちらとて、好き好んで痛い目を見たくはない。

フラッシュ・レイアとやらの能力は聞くところ、怪物じみている。
わざわざ相手にして死ぬ思いをするのはまっぴらだ。

「つまんなーい。欲がないよね、鍵一は」

「欲に目をくらませて命を落とすのはごめんだからな」

臆病者、と少女は言った。どうせ臆病者だよ、と鍵一は返した。

どんな勝負事でも、最終的には生き残った方が勝ちだ。

臆病者と罵られようと、生きていれば勝ち。それが真理だ。格好をつけて拳句死んでしまう奴は、勇敢でも何でもない。ただの馬鹿だ。鍵一は叔父にそう教えられてきた。

戦いの世界では、生き残らなければ意味がない。

生きて、その先にあるものを掴まなければ……。と。

昔は、何のことやらさっぱり分からなかったが、今ならば、何となく分かる気がする。

精霊執行官　　精霊と戦い、執行する世界に身を置く今ならば…

…。

「しかしさ、スピリット」

「ん？」

「その、フラッシュ・レイア、だっけか？　その精霊が、白木をぎたぎたにした可能性があるってことだよな？」

「まあ……、一応、そういうことになるかしら」

「だったらよ、俺の左手、何で反応しねえんだろ？」

「知らないわよ。あたしはあんたの左手じゃないんだから」

「……ずいぶん冷たい言い方してくれるね。ご主人様が困ってるつてのに」

「だって、考えたところで分かんないんだもん。どうせバカですよーだ」

何も言っただろと心の中で思い、鍵一は視線を宙へ漂わせて、すぐに引き戻した。

自分の左手に視線を落とす。

晒しの巻かれた手。怪我をしているわけではない。人目を引くような濃い痣を隠すためだ。

こいつは、神隠しの副産物、らしい。

この風見町で妙な事件が起こった時には、左手が頼りになる。

危険の接近を教えてくれるのだが、今回はまるで反応しない。こんなことは初めてである。

拳を開いて、閉じてみる。

痛みはない。調子は決して悪くない。

自分の手だ。変な痣があるとはいえ、間違いなく生身の手。

悪い兆候があるときには、いつもこいつが教えてくれた。

今回は、反応してくれないが、それでも鍵一はこいつを信じている。

自分を信じない奴はいつか手痛いしっぺ返しをくらう。叔父の教えだ。

「左手は反応しねーわ、神隠しは起こるわ、妙な精霊が関わってるわ……まったく、どうしたもんかね……」

「虎の子の左手が反応しないんじゃ、さすがのソウルスピリットもお手上げだわ……」

言って、二人同時に肩を落とした。鉛色のため息がこぼれる。

「情けないな」

「情けないわね」

呟いてみると、悲しくなってくる。

「あたしらの時代も終わりってことかしら……」

「かもな。活躍らしい活躍はしてねえけど……。ところで、スピリット君」

改めて、鍵一がスピリットに向きなおる。スピリットは小首を傾げた。

「学校ではその姿になるなって、鍵一おじさん、言わなかったっけ？」

「うー、だってえ……。誰もいないからいいと思ったんだもん。それに昨日は陽菜ちゃんが来てたせいでずっと猫じゃなきやいけなかつたし」

頬を膨らませる。その子供らしさに呆れ、鍵一は頭を抱えた。

かわいくないぞ、と呟くと、うっさいバカ、と返された。

まったく口の悪いこと……口をへの字に曲げる鍵一。

「気持ちい分からもないけどな……お前、もうちょっと自分がさ、精霊だってこと自覚して謹めよ……。ジャツカルを見習ってみるよ」

「やだ。あいつ、頭カタいし。何よりあいつのマスターが嫌い」
スピリットがぶん、とそっぽを向く。

鍵一もジャツカルを使役する、とある精霊執行官のことは大嫌いだ。

そいつは性根が崩壊してどうにもウマが合わない。

顔を合わす度に殺気を向けてくるので、甚だ迷惑している。

同じクラスではないことだけが幸いだ。

「まー、でも、今回ばかりはあの腐れ執行官に丸投げしてもいいんじゃないね？」

鍵一は手を頭の後ろで組み、大欠伸をかく。眼尻から小さな涙が浮かんでくる。

スピリットが鍵一をきつ、と睨みつける。口元には不満の色。

「ちょっと鍵一、あいつに手柄かつさらわれでもいいっての？」

「かつさらわれるもクソも、まだ始まってすらねえぞ……。そんなに嫌か？」

「嫌。絶対に嫌。あいつにデカいツラさせるくらいならくたばった方がマシよ」

「ふうん……。そうかい」

「むっ！」

スピリットが手を一閃させる。それを鍵一は小指で耳を穿りながら身を引いて回避。

「鍵一は悔しくないの？ あの馬鹿に威張られて！」

「悔しくないことはないけどさ、どうも気が進まないんだよな」

「……このヤマに手を出すことが？」

鍵一は頷いた。顎に手をかけ、指で頬を搔く。

「ヤマつつー程のことまで発展してねえからまだいいけどさ……。

「なーんか臭うんだよな。ヤバそうなおいが、うっすらと……」

「うっすらと……？」

足を投げ出して、なるほどねと呟くスピリット。

「奥にとんでもねえもんが潜んでるような気がするんだわ。深く関わったら……。ちょっと後戻りできそうにねえぞ」

「いまさら何を言うかと思ったら……。そもそも、精霊執行官になった時点でさ、逃げ道なんてないようなもんでしょ？」

「……ま、そりゃそうだ」

鍵一は肩を竦めて苦笑した。立ち上がり、ぐぐつと背筋を伸ばす。「じゃ、かわいいスピリットちゃんの為にひと肌脱ぎますかねえ。」

……気は進まないけど」

「最後の一言は余計！」

スピリットの蹴りを躲して、鍵一は欠伸をかく。腹の虫が鳴き始める。そろそろいい時間になった証拠だ。すきつ腹の具合によると……五時十五分あたり。

腕時計を見ると、ぴったり五時十五分だった。相変わらず正確無比なことである。

「腹も減ったし、そろそろ帰ろうぜ」

「……そうね」

小さく息を吐いて、スピリットが蹲る。

閃光。

鍵一は眼を瞑る。開いたとき、そこに少女の姿はなく、ロシアンブルーの子猫がちよこんと座っているのみだった。

教室に置いてきたギターを取りに戻り、五分とかけずに行つて戻ってくる。

下履きに履き替えていたので、帰る準備は万端だ。帰りにまた買い物をしなければならない。

一緒には帰れなかったが、陽菜はおそらく、夕食をせびりにくることだろう。

今日は凝つたものを作るつもりである。そのとき、
とくん。

小さく、しかし熱く強い鼓動が鍵一を叩いた。

びくりとなる。即座に左手に視線を落とした。見つめる。穴があくほど見つめる。

何も起こらない。

(……………?)

左手が、一瞬だけ反応したように思えた。果たして気のせいだったのだろうか。

もう、何かを発する気配がない。握ってみても、開いてみても、まるで反応しない。

「鍵一？」

先を歩いていたスピリットが呼びかけてくる。鍵一は「すぐ行く」と答えた。

顔を振って、疑問を振り払う。

今回はずつとこんな調子だ。考えたって仕方がない。なるようにしかならないのだ。

もう考えないようにしよう。深く息をついて、スピリットの後を追った。

輝立都ははつと我に返った。そして辺りを見回し、頬を真っ赤にした。

(私……どうしたのかしら?)

頬に手を当てると、とても熱くなっていた。恥ずかしいあまりそうなったのだ。

何をばやっとしていたのだろう。自分でも分からなかった。

壁の時計に目をやると、五時二十分を回っていた。

いつから惚けていたのかさっぱり分からない。

だが、ぼうつとしている間に随分時間が経ったような気がする。

ふと、神山鍵一の顔が思い浮かんだ。

彼の言った言葉を思い出し、都はさらに顔を赤くする。

何か困ったことがあったら、いつでも相談してくれと、彼はそう言った。

男の人にそんなことを言われたのは初めてだった。

とても優しい人なんだな、と思った。

神山鍵一の前評判はあまりよろしくない。人柄が悪い　　というわけではない。

ただ、髪と瞳の色が常人離れしていることから、変人として位置づけられているのだ。

そんな人と、初めて顔を突き合わせて話した。

都はおどおどした。

男の人からはいつも悪態を突かれる。ネクラだの、オタクだの好き放題言われてしまう。

本当は言い返したい。けれど、そんな勇氣は湧いてこない。

うつむいて、悪口に耐えるしか都にはできない。

女の人からも、直接ではないが陰口を叩かれる。

いじめられているのだ、という事実には気づいていた。それを黙って受け入れていた。

どうせ私は、役立たずだ。 。 何度もそう思った。だからいじめられるんだ。

皆、私を役に立たないと思っている。私を、のろまで嫌な奴だと思っっているんだ。

いじめてくる人を恨んだ。そんな自分が嫌な子に思えて、いつからか、自分のことはあまり好きになれなかった。都は本当に暗く地味な女の子になっていった。

誰も優しくしてくれないんだ……。

そう思っていた。鍵一は違った。都の失敗を笑って許し、とても優しくしてくれた。

初めて味わう人の好意に都は戸惑った。

反面、すごく嬉しかった。

暖かい、と思った。

鍵一は決して変な人ではなかった。

少し冴えない感じだけれど、自分を親身になって心配してくれる、とても良い人だ。

頼りなさそうでいて、本当は頼れる人なんだ。都はそう感じた。いいなあ、と思った。

この人ともう少し早く出会っていたら……。

もしかしたら、自分ももっと明るい女の子になっていたのかもしれない。

勇氣をもって、いじめに立ち向かえたかもしれない。

自分のことを、好きになれたのかもかもしれない……。

都は夢げにため息をつく。

考えると、想像はどんどん膨らんでゆく。

でも、それはしよせん幻。事実とは違う。

しかし、そんな夢を思わせてくれるくらい、鍵一は都の中で大きな存在となっていた。

昼に話したばかりなのに……。

あの人は……不思議な人だ。

顔がどんどん熱くなってくる。

ぼうつとしてしまう。

本当にどうしてしまったんだろう。

都は顔を俯げる。顔が真っ赤になっていることは、鏡を見なくても分かる。

きつと……恋患いだ。

そうに違いない。

誰かを好きになる気持ちがどういうものか、よく分からない。

けれど、多分これがそうなんだ。

鍵一のことを考えると、顔が熱くなって、胸の奥がじんわり痺れてくる。

心地良い気分……。頑張ろう、という気持ちになる。

また会いたい……。そんなことを思った。

近いうちに、と彼は言った。

同じ学校なのだ。

話す機会が全くないわけではない。彼ともっとたくさん話して、仲良くなりたい。

あの人のことを、もっと知りたい……。

そうだ。もっと話そう。

あの人を見つけて、いっぱいお話しよう。

世間話に花を咲かせよう。

そうして、少しずつ、あの人のことを知っていく……。

考えるだけで胸が躍る。

自分にそれができるのか……少し怖いけれど、でも、今度は踏み出せそうな気がする。

どうにも踏み出せなかった、その一步を。どきどきする。

もしかしたら、今までのネクラな自分とはさよならができるかもしれない。

あの人と、一緒なら……。

期待がどんどん膨らんでゆく。

顔を赤くしたまま、都は顔を綻ばせた。

やってみよう。

勇気を出して、自分から一步を踏み出してみよう。

この機会を逃してしまったら、もう二度とないかもしれない。

逃すわけにはいかない。

自分を変えるんだ……！

都は決心し、大きく息を吸い込む。

「よし、頑張ろう！」

胸を張り、決意を新たにす。

時計に目をやると、五時四十七分だった。

もうじき六時だ。校門が閉められてしまう。早く帰らねば。

帰り支度を済ませる。

教室を出ようと、扉に手をやった。開こうとして、ずきり、と右手が傷んだ。

「あつ………！」

思わず声を上げる。

よく見ると、すりむいたのか、僅かに血が滲んでいた。

いつこんな怪我をしたのだろう……。

都には分からなかった。

ぼうつとしているときに転んだのかも知れない。よく覚えてはいないけれど……。

家に帰ったら、絆創膏を貼っておこう。
ため息をついて、扉を開き教室を出た。靴を履き替えて外に出る。
校庭はがらんとしていた。

期待を込めて、中庭を覗きに行く。

鍵一が真ん中の赤いベンチで昼寝をしているところを時々、眼に
していたからだ。

だが、彼の姿はない。

時間が時間なので、当然といえば、当然である。

肩を落としながら、都は校門の方へと戻った。

カラスがさびしそくに鳴いて、空を飛び回っている。

都は眼を細めて、空を見上げた。

夕焼けが眩しい。深呼吸をして、都は帰路へついた。

「むづ……」

鍵一は渋い顔をして唸った。原因は、陽菜だった。

彼女はいつの間にか、合鍵を使って鍵一の自宅に上がりこんでい
た。

ソファに座って、テレビを見ていたのである。

そして鍵一とスピリットが返ってくるや、顔を振り向かせて、

「おかえり。ごはんまだ？」

と言った。鍵一は思わず買い物袋を取り落してしまいそうになっ
た。

「お前……ダチはいいのかよ」

「よくはないんだけど……でも、見つかなかったし、何よりお腹
すいたし。合鍵も持ってたしさ、丁度いいかな、って思って」

かく語る陽菜は満面の笑みである。

（こいつは俺を自動食事製造機か何かだと思ってるな……）

人を疑うのはよくないことだが、こればかりは仕方ないだろう。

鍵一は肩を竦めて台所へ向かった。

袋を開き、すぐに使う食材と使わない食材を分ける。使わない方は冷蔵庫にしまっておく。

後ろへ眼をやると、スピリットは陽菜の膝の上で丸くなっていた。鍵一の傍にいる女性はどうしてこう、家事にまるで手をつけない人ばかりなのだろう。

女性の本分が家庭を守ることであった時代が存在したなど、まるで嘘のようだ。

男が家事をする時代は当たり前になりつつある。男女差別をするわけではないが、これはある意味、由々しき事態の一つなのではないだろうか……と鍵一は思う。

料理のできる女性を好きになる男の気持ちだが、鍵一には何となく分かる。

本気でこだわりだすと自分でやらなければ気が済まないのだろうが、できれば好きな人の手料理を食べたいのが恋人の心情というやつだろう。

もっとも、それは女性も同じなのかも知れないが……。さて、始めるとしますかね……。

使う調理具を棚から取り出して、袖を捲り上げる。石鹸で手を綺麗に洗い、準備は万端だ。

水を注いだ鍋を火にかける。沸騰するまで時間がかかるので、この間に下拵えを済ませる。

料理は手際よく作っていくのがいい。

空腹の状態で調理するときの苦痛と言ったら、それはそれは……。地獄とはまさにこのことか、と思えるほどだ。

「ねえ、まだあ？」

陽菜が催促してくる。ちっとは働けよ、と思わず言いたくなる。

「しばし待て」
手を休めず鍵一は答えた。

予め砂抜きしてあったあさをボールに移し、よく洗っておく。ジャガイモの皮を剥き、適当に切る。玉ねぎをあっという間にみ

じん切りにする。

空いているコンロにフライパンを置き、火をかけて、オリーブオイルを少々取る。

温まってきたところで大蒜と玉ねぎを入れ、焦がさないように炒める。

調理酒、ブイヨン、胡椒、塩、ローリエ、真鱈とジャガイモ、炒めた玉ねぎ、しめじをそれぞれ適量、鍋に投入。しばらく煮立てておく。

浮かんできた灰汁を丁寧にとってゆく。

いい具合になってきた。あさを加えてさらに煮込む。もうじき完成だ。

深めの皿を二つと、餌皿を用意し、完成したブイヤベースをそれぞれに装う。

冷蔵庫から、作り置きしてあった麻婆茄子を取り出し、レンジで温めた。

これで十分だろう。

ブイヤベースと麻婆茄子を先に持ってゆく。それをテーブルに並べる。

台所に戻り、茶碗を二つ、食器棚から出してご飯を盛りつけて、引き返してゆく。

茶碗を自分と、陽菜の前に置いて、箸を陽菜に手渡した。

「ありがとう」

陽菜は嬉しそうに言った。どういたしましてと返して、鍵一もソファに腰を下ろす。

「それじゃあ、いただきます、と」

「いただきます」

陽菜と鍵一は律儀に両手を合わせて言った。陽菜が茶碗を持ち上げて、白米をががつ食べ始める。清々しいくらいの食べっぷりだ。友人の行方が分からず、沈んでいるのかなと少し心配していたが、それは杞憂だったらしい。

あるいは、陽菜は元気を装っているだけなのか……ありえない話ではない。

陽菜は頑張り屋で、自分がしゅんとなっている姿を見せることを良しとしない。

彼女がふさぎこんでいるところを鍵一はまるで見たことがない。その姿を想像しようとしたって、思いつきやしない……。

陽菜と言えば元気、自分でも、それだけが取り柄だと言っている。鍵一は眼を伏せて、息を落とした。

本人がそれでいいなら、それでいいじゃないか……。
ブイヤベースを口にする。美味しい。なかなかの出来だ。

「ねえ、鍵一さ……」
麻婆茄子に箸を伸ばしながら、陽菜が訪ねてくる。
言葉を探すように、ためらいがちだ。

「こんなこと、聞いていいのかわからないけど……」
「……………」

怪訝な表情を浮かべる鍵一。思わず箸を止めてしまう。

「神隠しって……信じる？」

「何だよ、やぶからぼつに」

「いいから、信じる？ 信じない？」

「……改めてそう聞かれると、どうかな……」

語尾は自分への問いかけになっていた。陽菜が鍵一の顔をそろそろと覗く。

「どうかな、って？」

「いや、本当はどうなんだろ、って思ってたさ」

「分からない？ その……神隠しに、遭ったのに……？」

「遭った、つってもさ、叔父さんから聞いた話だし……。何より、覚えてねえもんなあ……」

鍵一が神隠しに遭ったとされている九年前の記憶　それは今もどこかで眠り続けている。

以降九年　当時の記憶は、蘇ることはなかった。

探そうと思っても、何をどこから探し出せばいいのか、まったく分からない。

それでもいいと鍵一は思っていた。思い出せないのは、きっと…思い出したくないからだろう。

だったら、無理に思い出さないでいい。

このままでいいんだ、俺は……。

どうなるか分からないのなら、いつそ忘れたままで生きてゆく。

変わらないままで　　ずっと。

(ずっと?)

「ずっと……?」

脳裏に、ふと疑問が浮かぶ。知らず知らず口にしていた。ずっと、という言葉を。

「……………ずっと?」

陽菜が目を丸くして、呟く。いや、尋ねかけている。

鍵一は彼女を見ていない。自分が言葉を発したことに気付いていない。

(どうして……………ずっとなんて……………)

「……………ねえ、鍵一。何がずっとなの?」

「え?」

「え?　じゃないよ。鍵一がずっと、なんていきなり言い出したんじゃない?」

「俺、今、そんなこと言ってた?」

「自分で言ってる、覚えてないの?」

「いや、全然……………、覚えてない……………」

「もう、その歳でボケの前兆なんてやめてよね」

いくら私でも、面倒見切れないよ　　陽菜は口を尖らせてつんと上を向いた。

肩を落として、ため息をついている。そして、苦笑していた。

(ずっと……………?)

同じ言葉がぐるぐると廻る。廻る。廻る。

俺は、変わらないままで、ずっと……。

ずっと、そのままにいる？

(それでいいのか?)

いいはずがない。

いや、いいとか悪いとか、そういう問題じゃない。

人間、変化せずに生き続けることなんてできない。

社会的な抑圧、問題、自身の成長……さまざまな要因が重なり、いやがおうでも変わらざるを得ない。

だというのに、鍵一は、

(俺は、変わらなくていいと思ってる……? 変わりたくないと思ってる……?)

今のままで、このままで、満足している?

本当に?

(本当に?)

本当に……。

そんなことを、本気で、思っているのだろうか……。

考えれば考えるほど、自分が分からなくなる。

自分のことなのに、まるで他人のように思えてくる。

だめだ。こうなると、どれだけ考えても答えが見えてこなくなる。

心が、ただひたすらに迷走して止まらない。

鍵一は自分が分からない。誰よりも、自分のことが一番分からない。

自分のことを、深く知らない。

昔も、今も、自分が本当はどのような人間なのか、まったく、理解できない。

大切な部分がすっぽ抜けているからだ。

己の過去　　今まで、自分を積み立ててきた歴史……それを失っているから、だから、自分がひどく浮ついた存在に思えてたまらない。

何をもって、自分が自分だと　　神山鍵一であると断定すればい

いのか。

自分はどうしたって自分でしかありえないのだから、小難しいことを考えるだけムダだと、陽菜ならば言うだろう。

彼女はそういう人間だ。自分と折り合いをつけて、歩んでいるからそういうことが言えるのだ。

鍵一は彼女をうらやましく思う。

我ながら、下らないことを考えていると思う。

だが、そんなことを考えているときだけ、自分は自分であるような感覚を得る。

「我思う、故に我あり」ではないが、自分のことに思いをはせているときだけ、鍵一は自分と本当の意味で向き合っているように思える。

考えることに意味がある。

答えは出ない。出すことはできない。答えを、鍵一は重要視していない。

考えることで自分と向き合う　その瞬間が好きなのだ。

答えを出すことは、すなわちその時間との別れを意味する。答えを出さないことで、答えを出す過程を　考えることを、続けることができる。

そんなことを続けて　変わらないままで、今まで来て、それでいいのか？

と、何かが自身に問いかけてくる。

幾度となく、その問いかけは鍵一の前に立ちふさがった。

そのたびに鍵一は立ち止まり、悩み、そして結局は立ち止まったままで終わる。

いいわけがない。

だが、悪いわけでもない。

そういう次元の話ではない。話ではないからこそ、分からない。どうすれば一番よいのか、それが全く分からない……。

疑問が疑問を生み、心の内を巡り、巡り、巡り、巡り、いつまで

も巡り続けて、疲れて、思考を止める。

いつもそれで終わる。

進まず、退かず、立ち止まったまま終わる。何年立ち止まったまま
までいるのだろうか……。

果たして、未来の自分は一体、どのような決断を下すつもりなの
だろうか。

その時にならなければ、分からない。

気づくと、箸がとてつもなく重く感じられた。体も、ぐったりし
だしている。

もう止めよう。

ない知恵を絞りすぎた。鍵一は重金属のような溜息をつく。

「鍵一……」

陽菜の声で、顔を上げた。彼女を見た。

「考えてた？」

「あ、ああ……少しだけ」

「やらしいことじゃないでしょうね」

「あのなあ……これが、そんなこと考えてるような面に見える？」

鍵一は自分の顔を指さして言った。

「見える」

間髪入れずに陽菜が答えた。鍵一は大きく肩をすくめて「そうか
い」と納得の表情。

陽菜に真面目さを求めるのは間違いだ。彼女はすぐに茶化してく
る。

おかげで、自分の悩みが、やはり下らないものだったのだと再確
認させられる。

いつだって自分に問いかける疑問は、下らないものだど相場が決
まっている……。

考えるだけ、無駄なのだわかっていても、考えることで己と向
き合っているだから、やめることはできない。ようは、それだけの
ことなのだろう。

「ところで、急に変なことを言い出した原因は何？」

「変なことって？」

「だから、神隠しを信じるとか、信じないとか、そういう話」

「ああ……」

陽菜は視線を下に落として、浮かない表情をした。話の内容を思い出したのだ。

「もしかしたら……もしかしたら涼美は、神隠しに遭ったんじゃないのかなって……ふと、そう思ったから。でも、そんなことありえないよね……。きつと、どっかに遊びに行ったただけだね……。あいつ、結構夜遊びするようなやつだから……」

「……、そういや、何ごとにもありえない、ということは絶対にありえない、っていう、よくわかんねえ理屈を語ってた小説を読んだことがあるよ」

「それって、どういうこと？」

「……たぶん、絶対にそんなことはあり得ない、と思えることがあっても、常に何パーセントかはありえる、という可能性が付きまわっている、ってことじゃねえのかな。まあ、とっつきやすく言うと、この世に絶対なんて事柄は存在しない、みたいな感じだろ」

鍵一は馬鹿だが、趣味は意外にも読書である。

叔父が生前、多くの書物を購入し書齋に残していった。

小説に論文、専門書など、そのジャンルは多数である。

叔父と叔母が急逝してからというもの、鍵一は一人でいる寂しさを紛らわせるために、その本を片っ端から読み漁っている。

意味が理解できない本も数多いが、気になったフレーズは何度も何度も読み返すので、自然と覚えてしまうのである。

「絶対はない、ねえ……？」

陽菜は首をかしげて考える。

「うーん、哲学的で、よくわかんないや」

「哲学的かどーかは知んねえけど……まあ、俺もよくわかってねえしなあ……」

鍵一は自信なさげに頭を掻いた。

「神隠しを信じるにしろ信じないにしろ、あるにしろないにしろ……、それに遭ったつう可能性は、決してゼロじゃないってことかな」

「神隠しが、本当は存在しないかもしれないのに？」

「でもさ、本当に存在しないってことを、証明できる奴が果たしてこの世にいるかね……？」

「もう、わけわかんない！　つまりどういうことなの？」

「その……俺らの認識ってやつはさ、大まかに言ってしまうと曖昧なんだよ……多分。これが本当だ、これが嘘だと口では言っても、実際のところ、全ての事柄は真実と虚実の間を行ったり来たりしているだけで、誰もそれを確実だ、本当に存在するのだ、存在しないのだと断定して、なおかつそれを確実な手段でもって証明することはできないってこと、かな」

言っていて、自分でわけが分からなくなってくるのを、鍵一は感じた。

陽菜が難しい顔をして、口先を尖らせる。

「意味がわかんない。難しすぎるよ」

その意見には鍵一も賛成であった。知らないうちに口が勝手に動いていたのだが、思い返してみると、ようは何が言いたかったのか……それがまるではつきりしない。

色々な参考書を読んで、多分、こうじゃないかな？　ということを書いてのつただけなので、まず要点がまとまっていない。結局、簡潔に答えを示してはいない。

陽菜が不機嫌に唇を尖らせるのも無理はない。

鍵一だって同じ話を聞かされたら、きつとそうなるだろう。

「要は、この世は曖昧なことばで満ち溢れてるって……そういうこと、だと思っ所存」

考えるのも面倒になったので、鍵一はそうまとめた。

「ふうん……？　でさ、結局、さっきのわたしの質問に対する、鍵

「一の答えは？」

「へ？」

「へ、じゃないわよ。へ、じゃ。神隠しを信じるか、信じないかの話。何だかんだ言っつて、結局わたしの質問には答えてないじゃない。わたしは何かの小説で読んだような小難しい話を聞きたいんじゃない。鍵一自身の答えを聞きたいの」

あ、ああ……そういうことか。鍵一は頷いた。

無駄話をしてしまっただけで、肝心要のことに返答していなかったのである。

答えを模索しながら、小さく唸る。

信じる、と言えば嘘になる。信じてない、と言つと、これまた嘘になる。

先ほど、長々と語つた鍵一の言葉通り、自らを襲つた神隠しに対する認識は、どちらにも決めつけることができない程度に曖昧なのだ。

まず実感が無い。それが大きい要因だ。

いくら親しい人 自分を養子に迎え入れてくれた、優しい叔父さんが、「君は神隠しに遭つた」と口で言つたところで、何も覚えていない鍵一は、それが本当に正しいのか、間違つているのか、判断しようがない。

遭つたにしろ遭つてないにしろ、実感のないものをおいそれとは信じることはできない。

信じようとしたつて無理だ。どうしても腑に落ちないところは必ず出てくるのだから。

だから 鍵一の出せる答えと言つたら、

「よく、わからん」

という具合に曖昧になつてしまつのである。

陽菜が渋い顔をした。

「やっぱり、それなんだ……」

「仕方ねえだろ。わかんねえもんはどうしたつてわかんねえよ」

そもそも、何も覚えてねえんだから……。

言いそうになって、鍵一は止めた。

この一言は、いわゆる逃げ口上だ。

記憶喪失者にとつて、鉄板の逃げ口上。

これを言えば、大抵は仕方がないで済ますことができる。

散々使ってきた言葉だけに、使っている自分が嫌になつてくる。

記憶をなくしていなければ、確実に質問に答えられるという、そんな保障は どこにもないのだ。

陽菜もそれを察しての表情なのだろう。鍵一のパターンは完全に読まれている。

「……まあ、強いて言つと、あるんじゃないかな」

「その根拠は？」

「さつきも言つただろ。なくて不思議じゃないなら、あつて不思議でもない。両方の可能性は、常に何パーセントかは存在してるんだからな。だつたら、ないつて決めつけるよりも、あるつて思う方がいい。ないならそれで終わりだけど、あるなら、あるつていう、そういう視点から物を見ることができから、判断基準の幅が広がる」

言つと、陽菜は納得したように頷いた。

「そつか……そう考えると、色々考えることができるもんね……。

零よりは一の方が遥かにいい、つていうことだよな？」

そうだよ、と鍵一は肯定した。そして密かに胸を撫で下ろした。

明確な 鍵一自身の答えは口にせず、それらしいことを言つて煙にまくことができた。

陽菜は難しいことを難しく考えない思考回路をしている。

だから、理解できるかできないかのぎりぎりのラインで、話を収束させるのが最も効率的だ。

気になったことはとことん追求する彼女だから、鍵一がある、ない、どちらを答えても、その真意を徹底的に尋ねてくる。そして、鍵一はそれらに答えられない。

陽菜は答えを強要し、鍵一は押し黙るしかできない。

それがずっと続くのだ。考えるだけでうんざりしてしまう。そんな鍵一の思惑など知ることもなく、陽菜は何度も何度も頷いで、考えに耽り始める。

鍵一は茄子を箸でつまみあげ、口に運んだ。冷めかかっている、少し苦かった。

少ししてから、陽菜が顔を上げた。口を真横に引き結んでいる。

「んなシケた顔して、どうした？」

「どうもしないけど……。やっぱり分かんないよ、神隠しがあるって考えたところで！」

確かに、と思った。鍵一だって分かっていない。

「……そもそも、雪平……。だっけか？ どういう状況なんだ？」

雪平涼美とやらが消えた、とは陽菜の口から聞いただけで、実際、どういうことになっているのかを鍵一は知らない。

消えた、と言われただけでは、おおかた、さぼりだろうとしか見当をつけられない。

誰だって、魔がさすときくらいはあるはずだ。

「それが、はつきりしないの。一つだけ言えるのは、いなくなったっていうこと」

「いなくなった？ それだけか？」

「それだから問題なんですよ。連絡つかないし、どこに行ったのかも分からない。誘拐されたのか、さぼりなのか、どっちとも言えないから……」

行方が杳として知れない……。それは問題である。

消えた本人の気持ちはさておくとして、残されたものは、どうしたのだろう、どうしたのだろうと気をもませることしかできない。

陽菜が困った顔をするのも、よくわかる。

「なるほどな。行方をつかめないってことか……」

それでは、どうしようもない。鍵一が何か助言したところで、屁にもならない。

「ほら、鍵一に話したでしょ？ よその町でさ、神隠しがあつた、つて」

それは確かに今朝、間違いなく陽菜の口から聞いた。

「それで、ひよっとしたら神隠しにあつたかも知れない、なんて思つたんだな」

鍵一は視線を左上にもつていきながら呟いた。

古来より土着の神話が数多く息づく風見の地、しかも靈験あらたかな御神木を背に構える風見学園で行方不明者が出れば、神隠しなどと言い出したところで、あまり不思議ではないのかもしれない。

もっとも、その御神木に宿る聖霊は善良極まったもので、決して神隠しなど起こすような存在ではない。

そして、雪平当人と連絡がつかないし、向こうも連絡をよこさないのでは、どうしようもないではないか。

放っておいてもいいんじゃないのか、という言葉を出しそうになつてこらえた。

無責任というよりも、人格を疑われてしまう。

「……今は何とも言えないな。それに、消えたってのも今日の昼の話なんだし、心配なのはわかるけど、明日を待ってみるしかねえと思つ」

明日になれば、何か変化があるのかも知れない。

消えて数時間たって、どうだこうだと言って騒いだところで何も始まらない。

相手の動きを待つのが一番だ。

陽菜は渋々納得したように頷いた。彼女は友人思いの、いい人だ。鍵一はそう思う。

自分も友達思いではないというわけではない。ただ、そんな仲の友達がそういないだけだ。

鍵一の友人と言えば、陽菜とスピリット、アドネルシアくらいだ。尊敬する浩丞と聖園は友人というには高嶺すぎるし、近い友人が先に挙げた三人のみだとしても、うち二人は人外存在である。

そういう点で考えると、まともな友人は陽菜くらいのものだ。

友人が少ない原因は、やはり鍵一の毛色にある。

それは痛いほどわかっている。

人工物ではないこの白い髪と緑色の瞳が、どれだけ人に誤解を与えているか……。

そう愚痴を叩いたところでどうにもならないし、少ない友人にはとつくに慣れている。

鍵一だって、スピリットや陽菜、あるいはアドネルシアが突然姿を消そうものなら、かつてないほどうるたえるだろう。今の陽菜は、それと同じような状態だ。

「何事もないって、そう信じようぜ。もし無事に帰ってきたときにはさ、お前が沈んだまんまじゃ、笑顔で再会、なんてのもできないだろう?」

元気出せよ、と鍵一は箸を置いて、陽菜の肩に手をやった。

陽菜は唇をとがらせたまま、うん、と答えた。

何故かほんのりと頬が朱に染まっていたことに、鍵一はまるで気がつかなかった。朴念仁なのである。

よし、と顔を上げて、陽菜は食事に戻った。元気を出す気になつたらしい。

鍵一も再び箸を取った。足元で、スピリットが大きな欠伸をした。

翌日。鍵一はいつものようにスピリットを伴い、登校した。

昨日の放課後　その静寂が嘘のように、風見学園は活気を取り戻していた。

文化祭まで残り三日。

今が追い上げ時だ。一人が消え、一人が大げがをするという事件に見舞われたが、それでも手を止めることはできないということだろう。

町をあげての一大イベントだ。それも仕方がないと思う。鍵一は

それを悪いとは思わない。

登校途中に、陽菜とは会わなかった。これは珍しいことである。いつも遅刻するかしないかのラインでゆったり登校する鍵一を待ち受けるかのように、陽菜が登場するのがお決まりだが、今日は違った。

陽菜は現れなかった。

何かあったのかも知れない。大変なことだったら、協力を惜しまないつもりである。

登校して、ホームルームを済ませてから、先輩に練習時間を確認しにいった。

練習は昼から、とのことである。昨日と同じだった。昼まで暇になっただけだ。

さて、どうするかな……。鍵一は大欠伸をかいて途方に暮れた。

ここ二日間、暇をもてあまし続けている。本当にダメになっしまいそうだ。

このままでは絶対に良くないだろうが、不思議と何かをする気になれない。

なので、屋上に出て昼寝をしようか、図書室で読書でもしながら暇をつぶすかと考えた。

いつでもどこでも眠れるのが鍵一の自慢だが、今はそれほど眠くはない。

だから、図書室に行こうと決めた。図書室は南校舎にある。

ちょうど、音楽室の真下である。そこへ向かう前に、ちよつと陽菜のクラスを覗いておこうと思った。

陽菜の所属する二年Aクラスは、北校舎の三階、二年Cクラス教室の真上にある。

中央階段を上って、すぐの教室がそれだ。

ギターを携え、鍵一は階段を二段飛ばしに上り、教室の前までくる。

賑やかなようで、騒がしい声が開いた窓を通して聞こえてくる。

鍵一が邪魔にならない程度にひよいと覗き込むと、そこに陽菜の姿はなかった。

(……………?)

教室から目を離して、鍵一は首をかしげた。

陽菜は、風邪でも引いて学校を休んでいるのだろうか……。

いや、それはないはずだ。あの超健康優良児が、風邪をこじらすことなんてありえない。

彼女は、小、中、そして高校二年生となった今まで、一日も学校を休まなかったことが自慢だという。

ずる休みなんてこともありえない。

鍵一ではないのだから、さぼりということもないだろう。とする
と、心配である。

窓のすぐそばにいた男子生徒をつかまえて、陽菜のことを尋ねた。

男子生徒は、陽菜は学校には来ているのだと言った。ひとまず、

鍵一は胸をなでおろした。

きっと用事か何かがあつて、学校内を飛び回っているのだろう。

クラス委員の特権というやつだ。忙しいなら、無理に探して話す
こともない。

鍵一は男子生徒に礼を言って、教室を後にした。

図書室は薄暗く、とてもかび臭い。

埃もところどころに積もっているので、ハウスダストに弱い人は
たまつたものじゃないが、蔵書は眼を見張るものがある。

当然ながら、鍵一宅の書齋に眠る書物達とは、数がケタ違いだ。
時間が無限に与えられるなら、この場所で延々と古本を読みふけ
るのもいいだろう。

鍵一は部屋に入るなり、大きな咳を一つした。

喉が、いがいがする。

空気が乾燥して喉が傷んでいる時

真冬にここを訪れたのなら、

ひとたまりもないだろう。

幸い、今は春と夏の境目だ。まだ梅雨入りはしてないが、これからじめじめしだす。

夏も冬も、さぞここは居心地が悪いことだろう……。

だが、本を読めるのなら、鍵一はどこだっておかまいなしである。

読書に熱中すると、他のことが見えなくなるからだ。

さて……。適当な場所にギターを下ろして、鍵一は近くの書棚を物色した。

あまり面白くなさそうな、数十年前の文学本が並べられている。題名からして、読む気を失せさせてしまう、すさまじい魔力をもった書物達である。

鍵一は顔を顰めて別の書棚の方へ歩いて行った。歴史小説を並べてある棚だ。

聞いたことのある名前の作家が書いた本を一冊抜き取る。

そしてギターを下ろした場所まで戻り、椅子に腰かけた。

浅くため息をついて、表紙の埃をそつと払う。

ずいぶんぞんざいな管理を受けているらしく、本はだいぶ痛んでいた。

鍵一は図書室の管理を担当する人に、自分の家の書齋をみせてやりたくなった。

叔父は物を大切にする人で、書齋に蓄えられた本はどれも新品同様の美しさを保っている。

鍵一もそれをもとのまま、大切に扱っている。

ページを開く。文章に視線を落とし、鍵一は小説の世界に意識を飛びこませる。

読みふける。黙々と……。

図書室はとても静かだ。壁時計の針が秒を刻む音　それだけが、世界を支配している。

鍵一はどンドン小説にのめり込んでゆく。

どれくらい経っただろう　不意に、チャイムが鳴り響いた。はっと我にかえって、鍵一は時計を見た。三時限目が終わった時間である。

昼休みが始まるのは、四時限目の終わりからだ。練習や昼食までにはまだ時間があつた。

鍵一は琴を挟んで本を閉じる。立ちあがって、大きく伸びをする。流れるように欠伸をかく。

さて　と言わんばかりに図書室内を見渡す。

鍵一と書土の人が一人。それぐらいだ。

当然だろう。今は文化祭の準備期間である。

皆、図書室で本を読みふける暇など持ち合わせていない。

鍵一ぐらいのものだ。ほぼ、公認のさぼりである。

自分だけが仲間外れにされたような気は　まるでしないわけではないが、鍵一はもう、そういうものだと言っている。

毛色がおかしい時点で、関わりを持つとする人間はある程度に絞られる。

もの好き、という名の人種だ。

普通の感性の持ち主は、鍵一に関わりを持つとうなんてしないだろう。

仕方のないことだ。そういう宿命の下に生まれたのだと思えば、いいかげん諦めもつくというものである。

もう九年もそんな自分と向き合ってきているのだから。

いや、果たして本当の意味で、鍵一は自分と向き合って生きてきたか……。

そう思っているだけで、実際は目を逸らしているのかも知れない。いずれにせよ、そういう小難しいことを考えると気が滅入ってくるので、鍵一は頭の中を切り替えた。

腰の骨を鳴らして、もう一度椅子に腰かける。

そして、読書を再開しようとしたとき、鍵一はその声を聞いた。

鈴のようにきれいで、しかし芯のないか細い声が、「神山君？」

と呼ぶ。

思わず振り返る。

そして、自分呼んだ人物の姿を認めると、大袈裟にならないようにため息をついて、小さく肩を落とした。

意外な人物、というわけではなかった。

「ああ、輝立か」

輝立都だった。

失礼なことに、どこの幽霊に名前を呼ばれたのかと思ってしまった。

幽霊が怖いというわけではないが、鍵一は安堵の息をつく。

「どうした？」

「どうしたってことは、ないんですけど……」

輝立はどこか恥ずかしそうに、体を右へ、左へ揺らす。

「ただ、ちよつと立ち寄る用があったから……」

「何か資料が必要になったの？ 良かったら探すの手伝っけど」

「い、いえ！ そんな……」

輝立は驚いて、大袈裟に手を振る。

「何だか、悪いです……」

「気にすんなって。どんなの探してんの？」

鍵一は何も考えずに言葉を続ける。

輝立はおどおどしながら何かを言おうとして止め、小さく「ありがとございます」と言った。

そして、必要な資料の詳細を鍵一に伝えた。

「ああ、それは……」

鍵一は踵を返して、奥の方の書棚へ歩んでゆく。輝立が後に続いた。

「あの……」

恐る恐る、輝立が口を開いた。

「聞きました。昨日、ひどいことがあったんですね……？」

「ああ、白木のことだろ？ 居合わせたつつうか、一応、介抱した

「ただけだな……」

それはひどい状態であったことを語ると、彼女はわずかに顔を青くした。

ふと、彼女が手の甲に絆創膏を貼っているのに気がついたが、きつと怪我でもしたのだろうか……そう思っつて、深くは聞かないことにした。

「あ、そうそう、輝立はさ、雪平涼美つて人、分かる？」

「ゆきひら　　すずみさん、ですか？」

輝立は少し考え込んでから、首を横に振つた。

「そつか……。なんかさ、陽菜　　まあ、ダチから、その、雪平つて人が消えた、みたいなことを聞いて、ちよつと気になつてるんだよな……」

聞いても無駄だろうとは予測していた。

しかし万が一ということもあるから念のために聞いてみたのだが、どうやらまるつきり知らないらしい。

もともと雪平は鍵一たちとは違うクラスの人だ。知らないのが当たり前だろう。

「何もなければいいですね」

輝立の不安げな言葉に、そうだなと鍵一は答えた。

そうしている内に、鍵一は輝立が探している資料を探し当てた。

書棚から抜き取り、きちんと確認してから輝立に手渡す。

輝立はありがとございます、と微笑んだ。

「ところで、その後はどう？」

「え　　？」

「いじめられたりはしてない？」

「ええ……大丈夫です」

輝立は笑いながら答えたが、鍵一にはやはり、どこか無理をしているように見えた。

「ごめんな、出し物の準備の力になれなくて。ほら、俺、こんな感じだろ？　先生からも期待されてなくてさ、たぶん、俺が手伝つて

も事態を悪化させるだけだろうから……」

「いえ、あの、そんなに気にしなくても、大丈夫だと思います。切羽つまつてる、っていうわけでもないですから」

そもそも、クラスの出し物の詳細をまるで知らないのが大問題である。

「確か、喫茶店、だったよな？ 出し物って」

「……正確には、戦国喫茶店、らしいです」

戦国喫茶店、とは何だろうと鍵一は考えた。

戦国時代の茶屋の様相でも再現するつもりなのだろうか。

あるいは、最近はやりの、戦国武将をデフォルメしたゲームのキラクターが闊歩するような、いわゆるコスプレ喫茶なのだろうか。それならば輝立が戦国時代の資料を探しに来たのも頷けるが、しかし歴史書を見たところで茶屋の様子などを知りえることはできないと思つたのは、果たして鍵一だけだろうか……。

もしたただのコスプレ喫茶なら、ゲームの攻略本を見れば一発で終了だというのに。

輝立の少々困惑したような顔を見ると、彼女も腑に落ちてはいない様子だ。

企画者は一体、誰なのだろう。そいつの正気を疑いたくなる。

ネタ作りは非常に大切だろうが、方向性を間違えると大迷惑も甚だしい。

輝立……いや、C組の面々は全員被害者だ。

かといって、何も行動を起こすことができないのが、神山鍵一という男なのだが。

「戦国、ねえ……」。 大変そうだな。色々と

「ええ、大変ですよ、色々と……」

輝立が苦笑交じりに呟く。

「でも……楽しいです」

なによりだ、と鍵一は思った。 楽しめる余裕があるのなら大丈夫だろう。

「神山さんも、その、バンドの練習があるんですよね？」

「一応。昼からだけどね……」

「楽しいですか？」

「そりゃもう。生きがいみたいなものだし」

「じゃあ、同じですね」

「何が？」

「私も、何だかんだ言って、楽しんでますから……だから、同じです」

「……そうだな」

鍵一は微笑んだ。その時、

とくん、と左手が脈打った。

「っ!?!?」

声を上げそうになって、危ないところで何とか堪える。

左手に走る脈拍は、どんどん強くなる。

いきなり、何だ。

鍵一は混乱しそうになる。

どくん、どくんどくんどくんどくんどくん。

痺れだす 左手が。

激しく。

電撃が奔る。

頭の前へと。

一瞬で。

意識を。

奪い去ろうとして。

探していたものは 目の前にあって
けれど 気付くことができなくて
同じ場所をなんども なんども探していた
見つかるはずなんて、なかったのに

脳裏に、新曲のフレーズが。不意に浮かび上がって。鍵一は目を見開いた。

呼吸は 乱れない。乱れさせない。

どくん、どくん、どくん。

左手は脈拍を刻んでいる。

どくん、どくん。

速さをなくしてゆく。

どくん

止まる。反応が……止まった。

冷汗が、額から一筋流れ落ちる。

「神山さん……？」

輝立の声に、顔を上げた。

そして、心配をかけないように、平気な表情をする。

「ん？」

あくまで平静を装う。

輝立は鍵一の顔を恐る恐る眺めてから、小首をかしげて「いえ、何でもありません」と答えた。

取り乱しかけたのが、ばれただろうか……。

鍵一は冷や汗をかいた。

普段は冴えない男で通っているのに、少しでも変な動きを見せれば、必然的に注目を浴びてしまうことうけあいだ。気をつけなければならぬ。

あくまで、空気のように周囲に溶け込んでいなければ……。

たとえ、毛色が違って、それだけで注目を浴びてしまうのだとしても。

左手は、もう完全に落ち着いていた。

どうしたことだろうか。昨日と言いつつ今日と言いつつ、これは明らかにおかしい。

不可思議なことが起きているというのにまるで反応しなかったのかと思いきや、この二日間は突然目覚めたように反応したのだ。

あとで、包帯を取ってみて、調べてみた方がいいのかも知れないふと、輝立が鍵一の左手に気づいて、申し訳なさそうな顔をする。

「あの、左手、どうされたんですか？」

「あ、これ？ あまり見られたくない傷痕があるからさ。だから包帯巻いてるんだ」

鍵一は己の左手に触れながら、そう言った。

嘘ではなかった。

この痣は、できることなら誰にも見られたくない。

自分だって、見ていると嫌な気分になってくるのだから。

「そう、ですか……」

輝立が顔を歪めた。きつと、鍵一の痛みを想像しているのだろう。

その時、再びチャイムの音が鳴り響いた。休憩時間が終わり、四時限目の始まりを告げる鐘だ。

「あ、大変……!!」

輝立が声を上げた。

「ごめんなさい。私、もう行かないと……」

またあとで、と言い残こして、輝立は走り去ってしまった。

あ、ああ……と返したときには、彼女の姿は鍵一の前にはない。

ほっとしたような、残念なような、そんな気持ちがあった。

変な空気が自分の周りに漂い続けている。

鍵一は胃の当たりが重くなってくるのを感じながら、自分の左手をさすった。

（お前……どうしたんだよ？）

心の中で語りかける。

意思を持たない左手は、当たり前だが返事をしない。

今まで、まるで反応しなかった左手。

そして、急に反応しだした 左手。

何かないはずがない。

これは絶対に、良くないことの前触れだ。

今まで鍵一が体験したことのないものが差し迫っている証拠なのだろう。

そう考えると、もう止まらない。

不安が掻き立てられ、胸の奥で黒い渦を巻き、それは一瞬ごとにどんどん膨らんでゆくのである。

この気持ちを、鍵一はよく知っている。

だから、動き出さずにはいられなかった。

(アドなら、何か知っているかもしれない……)

鍵一は、数少ない友人である御神木の聖霊を思い出した。

風見町のこと、彼女が知らないことは何一つとしてない。

よい話を聞ければ、この状況が変わる可能性もある。

先ほどまで読んでいた本を書棚に戻し、ギターケースを持って、

図書室を出る。

中庭でスピリットと合流しよう。まだ授業時間中だが、幸い、文化祭準備期間中だ。

鍵一が学校を抜け出したところで、誰も気がつかないだろうし、気にもしないだろう……。

机の上に投げ出していた小説をもとの場所に戻して、鍵一は図書室を出た。

階段を降りて行き、下駄箱で靴を履き替えて外に出る。

正面玄関の影から、ひよっこりとスピリットが顔を出した。

スピリットは、鍵一の顔を見て無言で頷いた。

鍵一も頷き返した。それだけで、二人の意志疎通は終わった。

二人の間には、言葉を発しなくても通じる鋼鉄の信頼がある。

鍵一は風見ヶ丘へと歩を進める。スピリットがその後を、厳かな様子で追った。

ため息をついてみても、胸に留まる濃霧を全て吐き出すことはで

きなかった。

陽菜は鍵一が愛用している赤いベンチに寝そべって、自分の腕で顔を隠していた。

体も心もぐったりしている。

何もする気になれなくて、だから陽菜はちよつとした時間ができた瞬間に校舎を飛び出して、中庭に向かった。

このベンチをよく使う本人は、ここにはいなかった。

彼がいることを、陽菜は少しだけ期待していた。彼に膝枕でもしてもらったら、少しばかりは元気を出せるかも知れないと思っただというのに、その期待は儂く散ってしまった。

おかげでやる気が根こそぎなくなってしまったではないか。

鍵一の奴は、いったいどう責任をとってくれるのだろう。

そう考えて、陽菜は息をつく。

我ながら、なんてバカなんだろうと思う。

あいつに何も責任はないというのに。

でも、助けてほしい時に助けてくれることを、少しは期待したっていいものではないだろうか。

昔の鍵一は、陽菜が助けてほしい時、そばにいてほしいと思っいるとき、必ずそばにいて、助けてくれていた。

それも、昔の話だ。

今はどうだろう。

最近も、やはりずっと一緒にいることは変わっていないけれど、どこか小さなところですれ違いを感じている。

それは恐ろしいことだった。

陽菜にとって、何よりも恐ろしいことだ。

そのすれ違いが二人の間に溝を生んでしまったらどうしよう。

そんなこと、考えたくもない。

鍵一がそばにいたことが当たり前だった。

これからも、ずっとそうなるのだと、信じて疑わなかった。

けれども、彼が神隠しにあつてからの数年、陽菜と鍵一の関係は

どうなっただろう。

近くにいるようで、遠くにいる。

つきもせず、はなれることもしない、とても浮ついた感じ。

それでもいいと思ったこともある。

けれど、それじゃ嫌だと思っ自分が、心の底から顔を出しているのも事実だ。

立ち止まって、恋い焦がれる時にさよならをして、踏み出さなければならぬ。

でも、どうしてもうまくいかない。

(まるで)

(そう、まるで)

(神様が、わたしと鍵一を結ばせないようにしているみたい)

「嘘だよ……」

顔を蔽い隠したまま、弱々しい声で呟く。

「そんなの嘘だ……」

そんなこと、絶対に赦されない。絶対に赦さない。

そんな神様がいるのなら、殴り飛ばしてやる。

それくらい、陽菜は本気だった。鍵一に抱く恋心は、本物なのだ。

(……鍵一)

(鍵一、あなたは……)

(どう思ってるの……?)

空に、手を伸ばしてみた。

掴みたいものは、空じゃない。

太陽でもない。

ひらひらと舞い落ちてきた、木の葉でもない。

この手を握り返してくれる、あの人の手。

あの人の心。あの人自身。

ずっとずっとそばにいて、ずっとずっと想い続けていた、あの人。

粉雪のように儂いたため息について、陽菜は手を下げた。

不意に泣きだしたくなった。

けれど、そんなことはできない。

自分の弱いところを、人には見せたくない。

元気で、男まさりで、親しみやすい陽菜が、実はこんなに脆い存在なのだと呼ばれるのは我慢できない。

陽菜はむっくりと身を起こした。

最近の自分はどうかしている。

涼美が消えたことが影響しているのだろうか、悪いことばかり考えてしまう。気持ちが沈みこんでしまって、どんどん深みにはまってゆく。

暗い考えが脳裏を取り巻いて、離してくれなくなる。

こんな泥沼の思考から、早く抜け出さなければ……。

ふと、鍵一に呼ばれたような気がして、陽菜は少しの間をにおいて振り返った。

けれど、鍵一はいない。

そんなことは、心のどこかで分かっていた。

気のせいだろうと思っていた。

そしてやはり、気のせいだった。

ため息もつかずに、陽菜は前に向き直る。

目を閉じて、息を大きく吸い込んで、吐き出した。

少しだけ、心が落ち着いた気がした。

やらなければならぬことはたくさんある。

いつまでもこうして、考えているわけにはいかない。

動かなければ何も始まらないのだ。

まず、目の前にあることから、一つずつ片付けよう。

鍵一の幻聴を聞いている暇なんか、本当ならば陽菜にはないのだ。陽菜は立ち上がって、背伸びをした。

(着実に踏み出していけば、きっとすぐに追いつけるよね……)
そう信じて、校舎の方へと駆けて行った。

第三章

第三章

(ここに来るのは、何度目だろうか……)

思い返しながら、幾度も来たことのある道をたどってゆく。

何か辛いことがあったときにはすぐにここをたずねてしまう。

スピリットと、鍵一の親友が、その場所から風見の町を優しく見守っているのだ。

鍵一は額に滲んだ汗を拭って、顔を上げた。

目指す場所へとたどり着いたのである。

風見町を一望できる風見ヶ丘の頂上。そこに、樹齡幾千年の御神木が、実に厳かな様子で鎮座している。

御神木を見ているだけで、二人は心を洗われているような気分になる。

スピリットが鍵一の足元で、「アド、こんにちは」と挨拶する。

御神木の枝が、ざわざわと揺れた。そして、半拍遅れて、

「こんにちは、スピリット。それに鍵一も久しぶり」

どこからか、静まり返った水面を思わせる女性の声が響いてきた。まだ、枝はざわざわとゆれている。

鍵一も、「暫くぶりだね」と言葉を返す。

蜃気楼が立つように、ゆらりと 気が付いたときには、それが当然のように、彼女は大木の腹に浮き出していた。

まるで大木に繋ぎとめられているかのように、手と足の先だけが埋まっている。

頬を緩ませたアドネルシアが、そこにいた。

鍵一は彼女の前で胡坐をかいて座った。スピリットが膝の上に乗る。

「今日はまた、厄介なことに巻き込まれかけているようね」

それを聞いて、鍵一は所在なさげに後頭部を掻いた。

「やっぱり分かるか……」

「ええ。顔にそう書いてある」

彼女が言うと、本当にそう思えてしまう。

「実はね、アド、ちよつとばかり困ったことになってるの」

「霧でも掴んでるみたいでさ……もう、お手上げ！ って感じ」

「目に浮かぶわ」

アドは聖母のように微笑んだ。

「そうね……今回は、ちよつと複雑かな。単体で見るとね、本当に小さな事件なの。でもね、それが別のもう一つと絡まっているせいで、話をややこしくしているの」

「もう一つ……っていうと？」

「それはね、鍵一……あなたが一番よく知っている事件よ」

「……俺？」

鍵一は自分を指さす。

「そう、あなた。これは いうなれば、あなたの物語。今回の事件を辿ってゆくと、最後にはあなたに行きつくの。神山鍵一という存在に」

「……ごめん、アド。意味が分かんない」

「今はね。でも、すぐに分かるわ。いえ、思い出す、っていった方が正しいかな」

「思い出す………？」

鍵一は首を捻った。

思い出すというのは、どういう意味だろう。

言葉通りなのだろうが、鍵一にはさっぱり分らない。

「大丈夫。不安になる必要はないわ。今はただ、自分でもそれをどこに置いたのか、分からなくなっているだけ。でもね、答えは確かにあなたの中にあるの。それを忘れないで」

「……相変わらず、アドって詩的な言い方するのね」
スピリットが顔を振ってため息をついた。

アドは微笑みを崩さず、「ごめんなさいね」と悪びれた様子もない。

難しい顔をして、鍵一は押し黙る。

探していたものは 目の前にあって
けれど 気付くことができなくて……………。

脳裏に浮かび上がるのは、新曲の歌詞。

ずっと探していた大切なものが、実は、すぐに目の前にあった。
でも、彼はそれに気がつかない。

だから、違う場所を、何度も何度も探しているのだ。

まるで そう、まるで、自分みたいだ。

鍵一は思った。詞は、心の叫び。自分からこぼれてくる言葉の雫だ。

今回の事件は、そういうことなのだろうか。

自分でも分からない でも、ずっと探していた何かが、見つかるというのか。

それは、鍵一の中にある。

どこに置いたのか、分からないだけ。

記憶の底に埋めてしまつて、ただ、思い出せないだけ。

(そんなこと……ありえるのか?)

ありえない、なんてことはありえない。鍵一は頭を擡げた。

いよいよワケが分からなくなつてきた。

まるで、自分を探しているようだ。

誰よりも自分の事が一番分らないというのに……………。

鍵一はいつも、自分を見失っている。

ここにいるはずなのに、でも、どこにもいないようで、時々、怖
くなってしまふ。

本当の自分は、今の自分とは違うのかも知れない。

そう考えると、自分なんか、探さなくてもいい そう思える。

それで様々なもの……たとえば、スピリットとの関係、陽菜との関係、アドとの関係、友人たちとの関係がすべて壊れてしまうのなら、本当の自分なんて、取り返さなくなつて、構いやしない……。

「鍵一？」

スピリットが鍵一を見た。鍵一が顔を上げると、アドも鍵一を見つめていた。

アドは、やんわりと微笑んでいた。

だが、その瞳にひと欠片だけ、咎める色が宿っている。

（俺は……）

逃げているのだろうか。

いや、逃げているのだろう。

自分と向き合うのが怖いから、変わることが怖いから、逃げているのだ。

一番、逃げてはいけない相手から、ずっと逃げ続けている……。

（仕方ない。………仕方ないんだよ）

鍵一はゆっくり立ち上がる。

無理して笑顔を作り、アドにさよなら、近いうちにまたくるよ、と告げた。

アドは、「いつでもいらっしやい」とだけ言った。

鍵一はわずかな罪悪感を胸に抱いて、頷いた。

スピリットを促し、早足でその場を後にする。

（仕方ないんだ。怖いから……無理だよ。俺には無理だ。そんな勇氣なんて、ないよ。皆との関係が、崩れるかも知れないんだ。そばにいられなくなるかもしれないんだぞ。そんなの、絶対に耐えられない。俺には無理だ）

いつしか罪悪感は、鉛よりもじつとりと重く、胸に蟠っていた。

帰り道、スピリットは思った。

（鍵一、元気がない……）

それは一目で分かった。

彼の背中は憔悴しきつていて、すっかり小さくなっている。いつもの元気なオーラというか、気配がまるで感じられない。笑顔を作っているけれど、かなり無理をしているようだ。

(たぶん、自分のことを考えているんだ……)

鍵一には、ここ九年間以前の記憶がない。

神山鍵一という存在は、神山家に引き取られたところから始まっている。

それが鍵一を不安にさせているのだろう。

彼は時々、小さな子供のように困った顔をする。

誰に向けたわけでもない、不安げな表情を浮かべるのだ。

そして、どこか遠く 目の前にはない、何か……あるいは、どこかを見つめてだんまりしてしまう。

その時は、何を言っても気づいてくれないことが多い。

真綿で首を絞めるように、彼の不安は確実に、そしてゆっくりと彼を蝕んでゆく。

今は大丈夫でも、いつか壊れてしまいそうで……。

スピリットは不安になる。

たくさん心配して、でも、何もしてあげられなくて、もやもやして、自分が嫌になってしまう。

もっと簡単に、彼を元気づけてあげられればいいのに、それもできない。

そして、きつと、してはいけないのだと思う。

鍵一の戦いは、まさしく自分との戦いなのだ。決着は、彼自身でつけなければ意味がない。

(あたしには……見守ることしかできない)

頑張れ、なんて言葉は口にしたくない。

そんなかるい応援なんて、死んでもごめん。

(鍵一、あたしは……)

スピリットは顔を上げて、寂しそうな鍵一の後姿を見つめる。

(あたしは、あんたがどんな答えを出しても、文句は言わないよ)
自分は鍵一の傍にいる。何があっても。
たとえそれが茨の道を歩くことになるのだとしても、自分は、鍵一の傍についている。

もう、彼を一人になんて、させない……。
相変わらず、彼の背中、縮こまっている。

ふらふらと、学校にたどりついてても、鍵一の心は晴れなかった。
アドネルシアの言葉が、鍵一の不安を取り巻いて離さない。

(答えは、あなたの中にある……)
水晶のような声で彼女は言った。

(答えは、俺の中にある……)
重々しい心が、それを繰り返す。

俺は神山鍵一だ。
俺は、神山鍵一か？

そうだ、と言えるかも知れない。でも、そうだとも言い切れない。
(物事は、常にその二つの可能性を備えている……)

自分を信じることでしか、その疑問に答えを出すことはできない。
信用、できるのか？ 鍵一は己に問いかける。

返答は、いつだって同じ。
ノーだ。

(俺だつて知らない答えが……全てを繋げる)
そんなことがありえるのか。今まで、どうしたつて思い出せなかったのに……。

重金属のような溜息が、口からとめどなくこぼれてゆく。
頭をもたげたまま、鍵一はスピリットを伴って中庭を訪れた。
愛用のベンチに座り込んで、時計にちらり、と目をやる。
練習時間までにはまだ時間があった。

一度、寝よう……。

少し仮眠でも取れば、気が晴れるかも知れない。

ベンチに寝そべり、鍵一はスピリットを胸の上に抱きよせた。

「鍵一？」

スピリットが首をかしげて、小さな声で聞く。

「大丈夫……。なんてことないよ」

苦々しく笑って、鍵一は目を閉じた。

眠りに落ちようとする寸前、誰かに呼ばれて、鍵一はがばっと身を起こした。

見ると、校舎の方から輝立が走り込んできているところだった。

「輝立……？」

呆気にとられた鍵一の前で、疾走してきた輝立が足を止めた。肩で息をしている。

「か、神山さん……」

「どうしたの？ 何か、あったのか？」

「あ、あの……桐宮^{きりみや}さん、見ませんでした？」

「桐宮？ それは……誰だっけ？」

「うちのクラスの、学級委員です」

鍵一は、ああ……と息をもらしながら頷いた。しかし、顔が思い出せていない。

「その、桐宮さんがどうしたの？」

「なんて言えばいいか、その……見当たらないんです。ずっと、探しているんですけど」

「見当たらない？ それは、消えた、ってこと？」

「それはちよつと……。見当たらないってだけで……」

「そうか。なるほど……」

鍵一は顔を上げて空を睨みつけた。これも閃光少女の仕業だろうか。

顔を戻して、輝立を見る。

「分かった。俺も探してみるよ」

「ありがとうございます。ほら……雪平さん、っていう人も、行方

が知れないんですよね？ だから、心配になって……」

（それで……探し回っているのか）

いい子だな、と鍵一は思った。

（答えはすぐ傍にある）

（今はただ、気が付いていないだけ……）

ふと、悪い考えがよぎる。人を見たら疑ってかかれ、ではないが……。

（……まさか、な）

そんなはずは、ないだろう。左手も、まるで反応していない。

彼女は違う。

違うはずだ。

輝立は、閃光少女ではない、だろう。なんとなくだが、そんな気がする。

（これが、甘いってことなのかな……？）

輝立が、一礼したあと、息も整えないまま、また校舎の方へと走り去って行った。

ああやって、桐宮を探し回っているのだろう。

「桐宮、つてのがいなくなったのってさ、やっぱ、閃光少女かな？」

「かもな……」

今のところは、何とも言えない。手がかりの一つでもあれば状況は変わるのだろうか。

「情報収集つてわけじゃねえけど、ちょっと校舎周りを一周してみるか？」

「なんかあるかもしれないもんね……」

スピリットは頷いた。

ひょっとしたら左手が、何かの気配を嗅ぎつけてくれるかもしれない。

その可能性を信じることにしよう。鍵一は立ち上がって、ポケット

トに手を突っ込んで歩きだした。

もしかしたら、自分はどうかしてしまったのではないだろうか。
輝立はそう思った。

こうしてクラスメイトを探して走り回っている今も、その違和感が付きまとっている。

ふとした瞬間、自分ではない何か表に浮き上がって、今の自分は、奥底へと引き込まれてしまう……そんな、感覚。

(私は……)

今、桐宮さんを探している。けれども、

(ホントは……どこにいるのか、知っている?)

気が、するのである。

もちろん、心あたりがあるはずもないから、こうして探し回っているのだ。

けれど、それも無駄なのかもしれないと、うっすら思っている。

ここ最近、我を失っていることがある。

白昼夢でも見ているかのように、差し込んでくるうすうすとした頭痛、疲労感……。

まるで、夏の幻に当てられたみたいだ。

気が付いたときには、自分が、意識を保っていた場所とは別の場所にいることがある。

なにか悪いことが起きている……それが輝立には、分かった。

この、風見町に。

この、風見学園に。

そして……私にも。

霧のような不安。それはじつとりとまとわりついて、全てを濡らしてゆく。

輝立は、自分の両の手を見る。

すりむき傷があった。

誰かを殴ったのか、あるいはどこかですりむいてしまっただけか……そんな傷である。

昨日、学園の生徒が一人、病院に搬送される騒ぎが起きた。被害者は、大けがをしているそうだ。

もし……いや、そんなことは、ありえないはずなのだけれど、もし、万が一……この手が誰かを傷つけていたのならば。

(私は、どうすればいいんだろう……)

こんなこと、誰にも言えるはずがない。

馬鹿げているにもほどがある。

仮に、信じてもらえたのだとして……とても、穏便に事が済むとは思えない。

また、いじめられるに決まっている。

身に覚えがないことを責められるなんて、とんでもない話だ。

少なくとも、輝立自身は、まるで、身に覚えがない。

関係があるのだとしたら、ふっと、突然浮かびあがってきているかもしれない、もう一人の輝立……。

(そんなこと……ありえるの?)

私の中に、もう一人いる……。

そんなはずはない。

(そんなはず、ない。だって……そんなはずは、ないもの……)
左胸を抑えて、輝立は顔をゆがめる。

そんなはずはない、と自分に言い聞かせる。何度も、何度も。けれど、言い聞かせるたびに、自分がまるで嘘でできているみたいに思えて、怖くなる。

(私は私……輝立、都。他の誰でもない。輝立都、なんだ……)
はたり、と輝立は足を止めた。

気がつく間もなく、額から冷汗が流れていた。
いつの間にか、息が切れていた。

苦しい。

胸の鼓動が高まる。

どくん、どくんどくんどくん。

ああ、苦しい。息が、できない……。

水に溺れているように、体の自由が利かない。

(私は、都。輝立都……………私は、私は……………)

立っていられなくなり、壁に手を付いたまま、地面にへたり込む。ぶつぶつと、小声が口からこぼれ出てゆく。

それはあまりにも小さな咳きで、彼女の耳には届かない。

信じられないものを見るように、眼は見開いている。

窒息した魚のように、口をばくばくさせる。

(私は)

眠りの淵が、輝立を誘う。

それは、甘い誘惑。

このまま このまま、消えてしまえそうな充実感。

そのゆりかごに囚われながらも、浮き上がってきた問いは、確かな痛みを持って、彼女に突きささっている。

(私は……………誰?)

「あ……………」

不意に、朝生陽菜は声を上げた。

三階の窓から下の方を眺めている彼女の瞳は、幼馴染の姿を映している。

神山鍵一である。

表情はよく見えないが、どこかふらふらとした様子で、スピリットと一緒にとぼとぼ歩いている。

一見、元気がなさそうである。

(何か、あったのかしら……………?)

陽菜は心配になる。

もしも困ったことがあるのなら、ここはひとつ、相談にのってやるだろうか……………。

幸い、今は時間も空いている。

少し鍵一と無駄話でもして、気分転換をしよう。そう決めて、陽菜は急ぎ足で外に出た。

鍵一の向かっているであろう方角へと駆けてゆくと、彼と、彼の愛猫の後姿を見つけることができた。

「鍵一！」

呼びかけると、彼は振り向いて、一瞬だけ驚いた表情をした。

「陽菜……。どうした？」

「そっちこそどうしたの？　しょぼくれた顔してさ」

「俺、そんな顔してる？」

自分の顔を触りながら、鍵一が逆に尋ねてくる。

「つまらない顔に、磨きがかかっているわよ」

「悪かったな。どうせつまらん顔だよ」

眉を顰めながら、鍵一は答えた。それを見て、陽菜が笑みをこぼす。

「冗談だって。カッコいいよ、いつもみたくに」

「嘘って顔に書いてあるぞ」

「なによ。せつかくお世辞言ってあげたんだから、ちょっとは喜びなさいよ」

まあ、ありがとう……と、後頭部を搔きながら、鍵一は浮かない表情をしている。

「で、どうしたの？　なんでそんな元気ないの？」

「いや、たいしたことじゃないよ。こっちのこと。それよりも……」

「それよりも？」

「雪平、ってやつの方は掴めた？」

「それが、さっぱり……」陽菜は首を振った。「一応、家にも連絡を入れてみたんだけど、昨日は、帰ってないんだって」

鍵一は、頷きながら陽菜の話を聞いている。

「学校にも来てないみたいだし……。いったい、どうしたのかしら……」

「なあ、話変わるけど、陽菜はさ、桐宮ってやつを見なかった？」

「桐宮？ C組のクラス委員の？ うーん……………見てないけど…」

…

「顔は知ってる？」

「そりゃ、一応はね。委員会とかで顔合わせてるし」

「そうか……………」

難しい顔をして、鍵一は空に目を向けた。

「桐宮さんがどうかしたの？」

「いや、どうしたってわけじゃなくて、ちょっと見当たらないだけ。

輝立が……………あー、まあ、クラスメイトがさ、探してただけだな……………」

「消えたの？」

「消えたかどうかは、知らないけど……………」

「その可能性は、あるってことね？」

「……………なあ、つかぬこと聞くけど、お前、まさか……………」

視線を険しくした陽菜を見て、鍵一が聞く。陽菜は、みなまで言わずに頷く。

「まるで関係ない、とは言い切れないでしょ？ 常に何パーセント

かは可能性を持っているんだって、鍵一が言ったんじゃない」

「そりゃ、確かに言ったけど……………」

鍵一は困った顔をする。

「ちょっと調べてみる、とか言いだすなよ、頼むから」

「どうして？」

「どうしてって、お前、もしかしたら、マジでヤバい事件かも知れないんだぞ？ そうなったら、危ないどころの話じゃねえぞ。お前だって、どんな目に遭うか……………」

「調査に危険はつきものでしょ？」

「ごはんには味噌汁、みたいに言うなよ。そんな簡単に、お前……………、自分をだな、危険にさらすような真似をするなよ。何かあったらどうすんだ」

「わたしだって、危ないかも知れないってことは分かるよ。でも、

もしこのままほっといて、事態が解決しなかったら、どうするつもり？」

「それは俺らの仕事じゃない。警察とか、そういうやつらの領分だ」

「警察に、どうにかできる話なの？」

「警察がどうにもできないなら、俺らだってどうにもできないだろ」

「だから、手をこまねいているって言うの？」

陽菜は首を横に振った。

「そんなの冗談じゃないわ。後悔するなら、せめて、もうどうにもならないってところまでやってからじゃないと……わたしは納得できない」

「俺だって、お前に何かあったら、心配するぞ。スピリットだって

……」

「同じくらい、わたしも涼美のこと、心配してる……。だから、黙っていられない。じっとしてられないのよ。分かるでしょ？」

「ああ、そりゃ分かるさ。分かるけどな……」

「じゃあ、鍵一は、もしわたしが同じ目に遭ったら……放っておくのか？」

陽菜は鍵一を見上げ、じっと見つめて答えを待った。

鍵一は、重々しいため息をついてから、陽菜に真正面から向き直った。

鋭い視線が、まっすぐに陽菜を射抜く。彼は、今、どこまでも本気の目をしていた。

「放っておくように見えるのか？」

低い声で、鍵一が言った。

「……見えない」

陽菜がそう言うと、もう一度、鍵一は溜息をついた。

「ねえ、鍵一……ちょっとだけ、わたしに調べさせて。危なくなったら、すぐ止めるって、約束するから」

鍵一は数秒間、陽菜をじっと見つめた。

そして、何かをのみこむように息を吸い込んでから、小さな声で

言った。

「約束だぞ。絶対、破るなよ？」

陽菜は、安心したように小さいため息をこぼした。

「ありがとう、鍵一」

そうして、微笑んだ。

あとは、いてもたってもいられない。

陽菜は鍵一に「またあとで」と告げて、情報を集めるために、校舎へと戻った。

陽菜のうしろ姿を見送ってから、鍵一は再度、ため息をもらした。
「説得作戦、功を奏せず、かしら？」
皮肉っぽく、スピリットが呟いた。

「ああ、全くだよ」

腰に手を当てて、鍵一は渋い表情である。

「全くだ……。誰かさんと同じで聞かん坊だから……。参ったよ」

「ホメ言葉として受け取っておくわ」

スピリットはつんと上を向いた。

「で、どうするの？ 陽菜ちゃんは完全に火いついちゃったみたいだし、閃光少女のしっぽは掴めてないし」

「踏んだり蹴ったりだな……。なんでこうなるかねえ」

「あんたがぐずぐずしてるからでしょ？ それに、人が好過ぎ。本当に関わってほしくないなら、嫌われるのを覚悟で突っぱねなさいよ」

「それができりゃあ、こんなに苦労はしてない」

鍵一は、どこか悲しげに顔を歪ませる。

（そう、できれば、苦労はしていない……）

嫌われることが、怖いのか。

そうだ。

嫌われるのは、怖い。他の誰でもない、彼女に嫌われることだけ

が、鍵一は、ただ怖い。

しかしそれは、陽菜が好き、という気持ちからくる恐怖ではないと、自分で理解している。

陽菜のことが、好きなのか？

答えは、イエスだ。

確かに、陽菜のことは、好きだ。

でもそれは、女性として好きだ、という意味ではない。

人間として好き……という言葉が、一番、しっくりくるだろう。九年だ。

もう、九年も、一緒にいる。

記憶をなくす前のことも含めると、もっと長い間になる。

それだけ一緒にいるのに、どうしても、その一線が越えられない。その気持ちがないわけではない。

彼女を　朝生陽菜を、自分のものにしてしまいたいという欲望は、不意に浮かび上がってくる。

けれど、鍵一の中の何かが、それに歯止めをかける。

触れてはいけない。

壊してはいけない。

つかないけれど、離れもしない。

鍵一にとって、陽菜は「守りたい人」であって、「守らなければならぬ人」だ。

己の願望と、義務が、入り混じった存在。

いつからそうなったのだろうか……鍵一には分からない。

きっと、高嶺の花なのだろう。

すごく身近な、高嶺の花。

迂闊に触れてはならない神々しさを持っている……。

(きつと俺は……陽菜の優しさが、怖いんだ……)

神隠しに遭ったという、得体の知れない存在の傍にいて、その存在を許容し続けている、彼女の優しさが……。

その優しさが、怖い。

その優しさが、なくなってしまうのも、怖い。
朝生陽菜という存在が、神山鍵一という存在を、固定している。
だから、失うわけにはいかない……そう思うのだろう。

「……鍵一」

「ん……？」

「どうするつもり？」

「もう、やるっきゃない。こうなった以上、陽菜を少しでも、危険な目に遭わせるわけにはいかない。絶対にな」

鍵一の低い声に、決意の色が宿っていた。

「かたつぱしから駆けずりまわってみよう。何か見つかるまで、ずっとだ」

「すぐに見つかれば、いいんだけどね……」

全くだ、と言おうとして、鍵一は口を噤んだ。

得体のしれない不安が足底から一気に脳天へと突き抜け、それは体を逆流して左手に集中する。

脈動は、無い。

しかし……。

「な、んだ……？」

鍵一は、がくがく震えながら、己の左手を見る。
まるで鍵一の体から断絶されたように、左手の感覚がなくなっている。

そして、それはまさに一瞬の出来事だった。

どくん、とただ一度、心臓が高鳴ったその瞬間

左手の感覚が舞い戻ると同時に、骨を軋ませるような激痛が、左手を通して、鍵一の体全体を踏破した。

あまりの激痛に、悲鳴すらあげられない。

自分の体を抱きながら、一步、二歩、後ろへ下がる。

「鍵一！？」

スピリットの声が、ひどく遠い。

激痛。

白と、黒が、繰り返し、明滅し、鼓動は、さらに、高鳴って、

(何かが……俺の、内側から……)

内側から、鍵一を叩いている。

どくん……。

どくん……。

どくん……。

回を増すことに、それは強くなる。

鍵一という殻を破って、外に出たがっている。

それは、

記憶？

喪つたはずの、

記憶？

(やめる……)

鍵一は、歯を食いしばる。

(やめてくれ……！)

崩壊しかけた自我を、必死で、繋ぎ止める。

(嫌だ……！)

見開いた瞳、その、視界が、

地面を映しているはずの、その視界が、

赤く滲む。

血のように暗い赤。

周りには、見たこともない木々。

生命力を失い、枯れ果ててしまった褐色の木々。

(見たくない……！)

山道が、どこまでも広がっている。

地獄の淵のように、仄暗い、山道。

始まりがどこで、終わりがどこなのか、分からない道。

(見たくない！)

(やめてくれ！)

(俺は 俺は、見たくない！)

(そんなもの、見たくない！)

孤独。

疲労。

激痛。

絶望。

死。

死。

死。

死？

(嫌だ！)

(俺は)

「俺は、まだ……………」

鍵一の口が、大きく開いた。そして、次の言葉を発そうとしたその時、

すべての痛みが、

瞬時に消えた。

いや、

すべてではない。

左手だけは、確かな熱とともに、甘い激痛を留めている。

呼吸することを思い出し、鍵一は貪るように息を吸う。

そして、吐き出す。ゆっくりりと、全てを。

鍵一は、その場に座り込んだ。スピリットが、すぐに寄ってくる。

「俺は……………」

鍵一は、まだ呼吸を整えることができない。

「どれくらい、あぁなってた？」

「一分くらいよ」

スピリットが間髪入れずに答える。

「何があつたの？」

「思い出しかけた」

「何を？」

「昔を」

「……どう、だった？」

「死ぬかと思った」

鍵一の瞳は、まだ険しい。

「でも、思い出せなかった」

（思い出せなかった？）

（思い出したくなかった、ではなく？）

顔を歪ませて、鍵一は左手を右手で掴んでいる。

まだ痛みがあり、それにとっても熱い。

「反応してるの？」

「そうらしい」

「じゃあ……」

「ああ、いるぞ。間違いなく。今、この近くに……閃光少女が」

「行けるの？」

「行けるさ」

鍵一は立ち上がり、スピリットを促す。

「行くっきゃない」

たとえ、地獄を見ることになっても、

（もう、あと戻りはできない）

目を覚ますと、どこまでも透きとおった液体に包まれていた。海月のように、その中を漂っている。ぷかり、ぷかりと。

（私は……）

輝立都は、薄らいだ意識の中で、じっとりとした眠気を感じていた。

（私は誰？）

その質問には、誰も答えてくれない。

ああ……私は、

私は孤独だ。

自分が、誰なのかもわからない。

こんな、見たこともない場所で、一人ぼっちで、いつまでも漂っていなければならぬのか。

考えるだけで、深い寂しさに心が震える。

(孤独……?)

(一人ぼっち……?)

(本当に……)

「本当に？」

え？ と、都は顔を上げた。

誰？

今、答えたのは誰？

「誰？ あなたこそ、誰？」

声は、冷たく語りかける。

(私は、私)

「あなたは、あなた？ そう……。じゃあ、あなたは誰？」

(私は、都。輝立都……)

「あなたは、都？」

(そう、私は、都)

「それじゃ、どうして、あなたは都なの？」

(え……?)

「誰が、決めたの？ あなたが輝立都だって」

(それは……だって、でも、私……)

「ほら、あなたは答えられない。だから、あなたは都じゃない」

(そんなはずない！ だって、だって私は、輝立……)

「いいえ、あなたは都じゃない。あなたは、輝立都じゃないのよ」

(じゃあ、誰が、誰が都だって言うの?)

「これからは、私があなたになる。もうすぐ、この私が、輝立都になる」

(そんな！ だったら、私は？ 私はどうなるの?)

「あなたは誰でもない。だから、あなたは存在しない」

(存在しない？ 消えるってこと……？)

「そう。あなたは消えてしまう」

(止めて！ 私、まだ、消えたくない！)

「もう、遅いよ。だって、あなたはもう………」

(嫌！ 消えたくない！ 死にたくない！)

(私、まだ生きていたい！ やめて！ 私を盗らないで！)

「あなたはもう、どこにもいない」

冷徹な声。

必死で手を伸ばしても、もう、届かない。

都の意識は、無に沈んだ。

(目に見えるものだけが正しいわけじゃない……)

(でも……)

(目に見えないものは、正しいの……？)

朝生陽菜は、フェンスに手をかけて、空を睨んでいた。

何も分からなかった。

学校を、端から端まで駆け回って、いろんな人に話を聞いて

けれども、何も分からなかった。

何も掴むことができなかった。

涼美は消えた。そして恐らく、C組の桐宮もだ。

神隠し。

幾人かは、その言葉を口にした。

便利な言葉だ、と思う。不可解な失踪は、これ一つで片付けるこ

とができるからだ。

神隠しだなんて、信じられない。

そして、神隠しじゃないなんて、信じられない。

全く真逆の感情が二つ、胸で揺らめいている……。何を信じればいいのだろう。陽菜には分からない。

（鍵一、あなたなら……どうする？ あなたなら、何を信じるの？）

そんな風に考えて、すぐに思いつく。親友が返すであろう言葉を。「自分の目で見た答えだけは信じるね。ある程度は、だけど」

きつと、そんな風に言うのだと思う。

しかも、苦笑交じりだ。

彼は曖昧に答えるのが得意だ。

ちよつと考えても、その意味をすぐに理解することはできない。分かることと言えば、自分のことでも安易には信用しないということだけ。

自分を全て、無条件で信用しないというのは、どついつ気持ちなのだろう。

（きつとわたしには、絶対に、分からないだろう……）

自分を信じないなんて、考えたこともない。いつだって、自分という存在だけは、無条件で信じてきたのだから。

無条件に……そして、無意識に。

それが普通なんだと思う。それこそが普通なんだと思う。

良くも悪くも、鍵一は 陽菜の幼馴染は、普通ではない。

（普通じゃ、ないんだ……）

考えて、背中に寒気が走った。

かけがえのない親友である彼を、わたしは そんな風に思っている……そう思うと、途端に、自分が許せなくなる。

自分の肩を抱いて、陽菜は身震いした。肌寒くなったわけではない。

ただ、不安になっただけだ。

ほんの少しだけ、距離を感じていた幼馴染が、また、さらに遠ざかったような気がして……。

わたしは、あいつに追いつけるのだろうか……。

その答えは、誰も知らない。

もう分からない。何もかも分からない。

(わたしは、どうしたらいいの……?)

空を見上げる。

いつの間にか、曇っていた。

まるで、今にも泣きだしそう。

もう一度フェンスに手をかけて、ため息を落としたとき

陽菜は、物音を聞いた。

振り返る。

すると、扉を開けた神山鍵一が、豆鉄砲を食らった鳩のような顔をして、自分を呆然と眺めていた。

足元にはスピリットも一緒だ。

鍵一が、間の抜けた声で呟くのを、陽菜は確かに聞いた。

「こいつは……どういうことだ?」

神山鍵一は、ぽかん、という表現がよく似合う表情で、立ちすくむ幼馴染を眺めていた。

「どういう、ことだ……?」

同じ言葉を、思いがけず呟いてしまう。

左手は、相も変わらずに熱い。強く反応し続けている。

なのに、どうだ。

感覚に導かれてここまで来て、目の当たりにしたのは、驚いた幼馴染の表情である。

そんな、馬鹿な……。鍵一は困惑して、唇を噛みしめそうになる。

まさか、この幼馴染が 朝生陽菜が、閃光少女だというのが。

(いや、そんなはずはない……)

心が、即座に否定する。

(ありえない……。陽菜のはずがない)

陽菜が、閃光少女であるはずがない。あるはずが、ないのだ。
足元の愛猫に目配せする。彼女も、その大きな瞳に困惑の色を浮かべていた。

「鍵……………」

陽菜が不安そうな顔をして、フェンスにかけていた手を胸にもってゆく。

「どうしたの？」

（どうしたの？）

鍵一は、頭が真っ白になってゆくのを感じた。

どうしたの、とはこっちが問いたい。

どうということなのか、是非とも教えてもらいたい限りである。

「いや……………」

少し、頭痛がする。鍵一は頭に手を当てて、首を振った。

「気分、悪いの？」

陽菜が駆け寄ってくる。鍵一は顔を上げて、無理に笑った。

「大丈夫。何でもない」

嘘だ。それはまるっきり、嘘だ。

「そう、なの……………」

ああ……………と返事をする。それも嘘だ。

（こいつが 陽菜が、閃光少女？）

馬鹿馬鹿しい。

そんなこと、あるはずがない。

だって、こんなにも……………ずっと、近くにいたのに。

近くにいるのに。

近くに、感じるのに……………。

……………近くに、感じる？

本当に、感じている？

彼女を？

間違いなく？

そう、断言できる？

答えは……。

(できない)

あまりにも明白。

忌まわしいくらいに、明白。

信じたいのに、でも、あと一歩のところか　薄い皮一枚が、信じられない。

信じることが、できない。

どんなに親しくても、やはり、他人は他人　そんな風に、思っているのか？

いつから俺は、そんな冷たいことを思えるようになった？

まるで、機械のように……。

ぞわりと、怖気が背筋を走った。

機械のように……、俺は変わったのか？

自分でも気がつかないうちに、そういう考えを、平気でできるくらいに？

自分でも知らないうちに、機械みたいに冷たい、別の自分が、生まれて……。

(別の……?)

考えて、何かがのどに突き刺さるような違和感を覚えた。

頭が、冴えてゆくと同時に、アドの　彼女の声が、脳裏に蘇る。

「そうね……今回は、ちょっと複雑かな。単体で見るとね、本当に小さな事件なの。でもね、それが別のもう一つと絡まっているせいで、話をややこしくしているの」

「別のもう一つ」と　そういう表現を、アドは使った。

それはつまり、今、この学園を襲っている事件には、二つの事象が絡まっているということ。

神隠しと、傷害事件。その根源にある事象の一つは、おそらく、閃光少女。

そして、まだ杳として知れない、もう一つの事象……。
左手の熱は、まだ、冷めていない。

(まさか……、まさか、俺は……)

その事実を理解すると同時に、冷汗が、額から滲みだしてきた。

(閃光少女を、追っていたつもりで……全く別のものを追っていた?)

冷めない熱と鼓動。動悸。そして、脳内を駆け巡る電流。

左手は、灼熱。

それは、反応の証。

こいつは、閃光少女に反応していたのではない。

ふとした瞬間に、浮き出てくるもう一つの脅威に、反応していたのだ。

それを急に感じ取りだしたのは、たぶん、ここ数日の間にその力が、隠す間もなく膨れ上がってきたから。

それには、きっと、閃光少女が関わっている。

そして 鍵一にも。

夢や、幻覚にも見た、地獄のような光景。

枯れ果てた木々、死んだ山道、暗闇、疲労、孤独と絶望、死への恐怖……。

あれは、確かに鍵一のものだ。鍵一以外の、誰のものでもない。

(助けて!)

呼吸が、加速。

(助けて! 助けて! 助けて!)

「鍵一!?!」

目の前の彼女さえも、認識することができないくらいに。

(死にたくない! 俺は、俺はまだ!)

その瞬間、鍵一は、全てを思い出した。

この世の終焉を見たような表情で、空を見上げて、呟く。

「くると……」

「くると……?」

陽菜が、声を上げる。

鍵一には、それが聞こえなかった。

ただ、気が付いたときには、左手とは比べ物にならない灼熱の痛みが、左わき腹を襲っているだけだった。

「なん、だ……？」

顔を、陽菜へと引き戻す。

彼女の顔には、驚愕の色。

足元に目を向けると、スピリットの姿がなかった。

スピリット、どこへ行った？

辺りを見回そうとして、それができなかった。

どうしてだろう、酷く……不安で、寒くて、けれど、思考は透きとおるくらいに鮮明。

体を、自由に動かすことができないことを、即座に理解。

脇腹に熱。

視線を落とす。

柄。

それはまるで、ナイフの柄。

いや、それは間違いなく、ナイフの柄。

どうして、こんなものが、俺に？

その答えは、分からない。

冷たい刀身は、ただ冷たく、脇腹に突き刺さっている。

熱、熱、熱。

そして、深紅。

傷口から染み出た鮮血が、白いシャツを紅く鮮やかに染めてゆく。

忌まわしいまでに、紅く。

鍵一は、顔を歪ませた。

そして、ナイフに手をかけた。

柄を、強く握りしめる。激痛に意識が飛びかける。

滲みだす脂汗。

苦鳴。

意識せずに、苦しみの声がもれる。

目の前で、陽菜が腰を抜かして、地面にへたり込んだ。

彼女も、呼吸をすることを忘れていているように、ときれときれに声をもらす。

鍵一は、歯を喰いしばって、ナイフを　引き抜いた！

絶叫。

まさに、喉が張り裂けんばかりの、獣のごとき咆哮。

熱、寒気、激痛、そして、脱力。

たたらを踏んで、鍵一は振り返る。

そこには　輝立都の、嘲笑があつた。

どうして、輝立が？

……そうだ、彼女こそが、閃光少女。

だから、俺に、こんな、忌まわしいナイフを……。

鍵一はナイフを、取り落とした。

拳を握り締めて、都へ振りかぶる。

するりと、彼女は回避。

空を切った拳に振り回されて、一歩、二歩、三歩と、前へよろめく。

傷口を握り締めて、振り向く。

呼吸が乱れている。調節は　できやしない。

輝立が、にい、と嗤って、へたり込んでいる陽菜の顔に、指を伸ばす。

陽菜に、触るな！

鍵一は掠れた声で叫んだ。

輝立は言った。

どうして？　そんなに、この女が大事？

鍵一は答える。

ああ、大事さ。俺の命なんかより、よっぽど大切だ。死んでも守らなきゃならない人なんだ。そして、お前、スピリットをどうした？

鍵一は、そう尋ねた。

彼女がスピリットをどうにかしたのだという、確信があった。

彼女は、嘲笑をそのままに、冷たく答えた。

ひよっとしたら　　今頃、死んでるかもね。

どくん。

心臓が、高鳴る。

よくも。

よくもよくもよくも。

都が、そのしなやかな指で陽菜の顎を掴んで、上を向かせた。

陽菜は恐怖のあまり、滂沱していた。

都が言う。

あのクソ猫も、このクソ女も、そんなに大事なの？　自分の命を

投げ打ってまで守るほど、大事？

鍵一は歯ぎしりする。

スピリットを、陽菜を、クソ呼ばわりするこの女を　　いや、彼

女に取りついたこの精霊を、いまにもぶち殺してやりたい。

もう一度、陽菜を、スピリットを、クソだと言ってみる……お前

を、ぶち殺してやる！

都の口端が、さらにつり上がる。

ぶち殺す？　ぶち殺すですって？　貴方に何ができるの？　そん

な、立っているのもやっとな貴方が！

……結局、貴方も、同じなのね。口では何とでも言えるけれど、

何事も、成すことはできない！

都の言葉が、心に突き刺さる。

そうだ、その通りだ。

俺には、何もできない。

鍵一を支えていた怒りの感情が、どこかへ、抜けてゆく。

残るのは、絶望という、終焉の兆し。

そんなに死にたいなら、いいわ。殺してあげる。この女とも

ども、徹底的に！

そして、取り出される大型のナイフ。

今の鍵一は、己に訪れるであろう死を、明確にイメージできた。迫りくる都。

銀光。

突き出されたナイフがすぐ傍まで来ていた。

俺は　俺は、何も、守れない……………？

動け。

動け動け、俺の体。

奇跡よ起これ。

そして、この、目の前の敵を　その存在を、完全に抹殺してやれ！

そして、その背後に潜む、あの存在も。

呼吸さえ凍りつく、刹那の静謐。

奇跡は、起きなかった。

驚くほど呆気なく、都の繰り出したナイフの一撃は、鍵一の左胸に吸い込まれた。

とん、という軽い衝撃。

鍵一は目を見開いて、こぼ、と息をもらした。

鮮血が、口から一筋、あふれ出て、流れてゆく。

震えながら、鍵一は、都の顔を見た。

彼女は、嗤っていた。

悲しそうに、嗤っていた。

水晶のように煌めく、美しい大粒の涙をこぼしながら、嗤っていた。

全ての音が遠ざかってゆく。ゆっくりと、都が鍵一から離れた。ナイフを引き抜かれる。

鍵一は、思いがけず、一步、踏み出した。

そして、流れるように膝をつき、倒れた。

薄れてゆく意識の中で、アスファルトを流れてゆく自分の血が、どこか、醜さを秘めた美しさを放っていた。

(俺は……………)

あの時もそうだった。

今も、そうだ。

死にたくない。

俺は、まだ 死にたくない。

その感情だけが、浮かび上がって止まらない。

けれども、もう、終わりだ。何もかも。

結局、俺は、陽菜を守ることができなかった。

スピリットもだ。

俺は誰も守れずに、死にたくない、という感情を胸に抱いたまま、こうして間抜けに、そして呆気なく死んでゆくのだ。

この眠気に身を任せれば、きつと、もう、戻ってくることはできないだろう。

抗うことなんて、とつくの昔に止めている。

ああ、俺は、逃げたんだ。

曖昧な、俺という存在から。

本当の自分を知ることせず、逃げたのだ。

考えることから、逃げた。自分を知ることを恐れて、生きて、それを追求してゆくことを諦めて、俺は……。

(俺は、死ぬ……?)

俺は、死ぬ。今度こそ、死ぬ。

ごめんな、陽菜。

ごめんな、スピリット。

ごめんな、アドネルシア。

ごめんなさい、叔父さん。

ごめんなさい、叔母さん。

皆、あんなにも、俺を助けてくれたのに……俺は、

俺は、もう……。

(もう、駄目だ……)

鍵一は、本当に「諦める」ということがどういふことなのかを、初めて知った。

そして、眠りに落ちるように、やがてゆっくりと目を閉じた。
鍵一の意識は、死を迎えた海月のように、暗黒の海へ溶けて、消えていく。

朦朧とした意識の中、スピリットは、鍵一のことを考えていた。
体が、酷く痛い……。

ここは、どこだろう。

気が付いたとき、地面に体を叩きつけられていた。

閃光少女の攻撃を受けたことは、きつと、間違いないだろう。

首だけを動かしてみると、猫の擬態が解けていた。

小さな手。人間年齢で言うと、十四歳の少女の体。

いつもは、呼吸をするように、自由に操れるのに、今は、まるで
言うことを聞いてくれない。

起き上がることもできない。

(鍵一……)

鍵一が危ない。

それは分かっていた。

教えてあげなくちゃ……。

そう思う反面、もしかしたら、もう、遅いのかも知れない、とい
う感情もあった。

胸を貫くような、空虚な気持ちがある。

それは、ずっと小さい頃から大事にしていたものをなくしてしま
ったような感覚。

意識は、相変わらず朦朧としている。

視界が、白く滲みだす。

頬が、熱い……。

それは、痛みからくる熱だけじゃない。

もっと熱くて、激しいもののせいだ。

スピリットは、歯を食いしばった。

息がつまりそうになって、何度もせき込んだ。
小さな拳を、握り締めようとして、けれど、それができない……。
こんなに悔しくて、悔しくて、閃光少女をぶちのめしたくてたま
らないのに、あたしは、立ちあがることすらできない。

くじけそうな時、いつも傍に鍵一がいた。

彼がいたから、あたしは、諦めずに立ち上がることができた。

彼がいたから、弱音なんてまるで吐かなかった。

彼がいたから、あたしは、あたしでいられた。

あたしと、あいつは、二人でソウルスピリット。

けれど、もう、あたしは、ただのスピリットだ。

何の力もない、無力な、精霊でも人間でもない、中途半端な存在。

あたしを好きでいさせてくれた、彼はきつと……。もう、いない。

こぼれおちた涙は、地面を静かに叩いた。

その小さな音だけが、スピリットを、正気に繋ぎとめていた。

(奇跡なんて……)

奇跡なんて起きない。

奇跡を、起こすことなんて、あたしには……。できない。

(できっこないんだ……。あたし一人じゃ)

あたしは、一人じゃ何もできない。

そんなこと、ずっと昔から分かっていたことだ。

それを今、改めて、思い知らされているだけ。

甘やかな絶望と諦めが、ぐずぐずになってしまった心に、酷く沁
みた。

すぐ目の前に、深紅の血だまりができていた。

その中心で、神山鍵一が、変わり果てた姿で、横たわっていた。

ぴくりとも動かない。

初雪のように白かった髪は、自らの血で、紅に染まっていた。

「けん、いち……」

立ちあがることも、できない。
駆け寄ることもできない。

朝生陽菜は、ただ、鈍色の絶望に染まった表情で、鍵一のなれの果てを見つめることしかできなかった。

涙と鼻水で、何がなんだか、もう分からぬ。

嘘だ、と思った。けれど、目の前に広がる光景は、どこまでも残酷で、冷たい事実だった。

鍵一は、間違いなく、死んでいた。

そして、その傍には、ナイフを握り締めた輝立都の姿。

手の中のナイフは、彼の血雫を、今も鮮やかに滴らせている……。
都は、泣きだしそうな空を、泣きだしそうな表情で仰いでいた。

信じていたもの全てから裏切られたような、寂しい笑みを、口元に浮かべている……。

ぽつ、ぽつと　雨が、冷たい雨が降り出した。

それは、決壊したダムのように、苛烈さを増してゆく。

雨の音は、耳ざわりなほど大きい。

陽菜の冷え切った体を、雨が、さらに冷ましてゆく。

陰鬱な雨音の響く中、気が付いたように都が顔を下げて、陽菜に視線を向けた。

初めて正面から見ると、都の瞳には、親に捨てられた子供のような憔悴した光がある……。

「ねえ、陽菜さん……」

「え……？」

「あなたは　何かになりたいって、思ったことある？　他の何を犠牲にしても、なりたいたいのものが、あなたにはある……？」

陽菜は、答えなかった。答えられなかった。

「きつと、ないんでしょうね、あなたには……。だって、鍵一君と話してるときのあなた、あんなに幸せそうだったもの。羨ましいなあ……」

それは、本当に心の底から、羨ましいと思っっているような声色だ

った。

「私にはあるのよ、陽菜さん……。私はね、人間になりたいの」

「ニンゲン……?」

「そう、人間。私は、人間になるためだったら、何でもするわ。人をさらうし、傷つけもする。そして……」

都は、そつと目を伏せるように、鍵一だったものへ、眼をやる。

「鍵一君を……殺したりもする」

どくん……。陽菜は、心音が高鳴るのを感じた。

そして、都を いや、都の中にいる、底知れない存在に対して、先ほどとは、まるで比べ物にならない恐怖を抱いていた。

彼女の言っていることが、まるで理解できない。

常軌を逸した狂気を前に、陽菜はあまりにも無力だった。

彼女の言うことを、呆然と聞くことしかできない。

「どうして……?」

それだけが、辛うじて、乾いた喉から絞り出された。

「どうして?」

即座に、都が返す。その声は、どこまでも無邪気だった。

「どうして、そこまでできないのか……私の方が、むしろ聞きたい。何かになるってことは、本当は、それくらいの代償を払わなきゃいけないんじゃないの?」

代償?

それくらいの代償?

「その代償を払ってでも、なりたいものが私にはある。だから、私はそれになるためなら、どんな犠牲も厭わないし、手段も問わない。それって、当り前のことでしょ?」

「そんな、そんなこと……!」

「あなたには、絶対に分らない」

都は、冷たく言い放った。悲しそうな笑顔を、そのままに。

「あなたは、そこまでの覚悟をもって、何かになりたいと思ったことがない。だから、私の言うことを、理解できない」

理解できるはずがない。そんなの、狂っているとしか、陽菜には思えない。

「たとえ傍からは、狂っているとしか思えなくても……私にとっては、それが正常なの。それが、当り前のことなのよ」
都が顔を歪めた。

泣いているのだろうか。

雨に濡れたその姿は、凄絶なまでに美しく思えた。

苦しくて、苦しくて　それでも、決して引き返せないところまで、彼女は来ているのだ。

その凄まじい覚悟に、陽菜は戦慄を覚える。

「私だって……どうして、こんなに冷酷なことができるのか、分からない……分からないのよ。胸が痛くて、苦しい。悲しい。助けてほしい……。なのに、誰も助けてくれない。だったら、自分のこの手で目的を、実現させるしかない。それが、茨の道を歩くことになるのだとしても。でも本当はそんなことしたくない、けれど、しなくちゃいけないくて、私……」

都の言動が、不意に　変わった。

陽菜は、生唾を飲み込み、そして、思った。

彼女の中の都は、消えていない。

狂気に支配された精神の中に、元の、体の持ち主　輝立都、その人の意識が、まだ僅かに残留しているのだ。

それが、彼女の錯乱しかけた言動を生んでいる。

バグに侵されたCPUのように、彼女が完璧に、自らを支配できないのは　鍵一を、その手にかけてしまった罪悪感からだ。

輝立都は、鍵一のことを好きだったに違いない。

彼女は、本当は、鍵一を殺したくなかったのだ。

けれど、結果的に、彼女は鍵一をその手にかけた。

そんな自分を、輝立都は絶対に赦せるはずがない。

その自らを憎悪する気持ちが、彼女に変調をきたしているのだ。

都が目を見開いた。恐怖と困惑に彩られている瞳は、即座に険し

く細められる。

「止める……！　これはもう、私の体だ、私のものだ！　いまさら、干渉してくるな！」

ナイフを取り落として、爪を突き立てるように、都は耳に手を当てる。

無駄だ、と陽菜は思った。彼女の内側から語りかけるその声は、耳を塞いだところで途切れるはずがない。

「私……私は、殺したくなかった！　殺したくなかったのよ！　だって、こんなにも、あの人が好きだったのに、でも、私は殺した、殺してしまった。仕方なかったのよ。私は、人間になりたかったから、その為には、どんなことでもする。でも、神山君を、私は、殺してしまった。赦せない。私は赦さない。私という存在を、私は絶対に赦せない！」

拮抗、している……？

陽菜は後ずさりながら思う。

今、彼女は戦っている。

自分自身と戦っているのだ。

彼女の中の輝立都が、鍵一を手にかけてたことで急激に浮上して、表に出ている彼女と、激しく戦っている。

輝立都という一つの人格の器の中で、二人は戦っているのだ。

二人は、感情を共有している。

鍵一を殺した表の彼女も、だから本当は、鍵一のことを好きだった。

殺したくなかった。けれど殺してしまった。

それを、本当の都は赦せない。

本当の都がそれを赦すことができないのなら、表の彼女も、自分を赦すことができない。

なぜなら、表の彼女も、間違いなく輝立都だから。

異なる意識と意識が混じり合うという、文字通り、己を見失うような　途方もない戦いなのだ。

都の右手が、制御を無視したような動きで、地面のナイフを掴んだ。

「止める！」

都が吠える。

右手はその命令を聞かず、ナイフの柄を握り締めている。

手の中で、ナイフが反転。

逆手に握ったナイフを、ぎりぎりを持ちあげている。

陽菜は、あつと声を上げた。

彼女は、突き刺すつもりだ。

そのナイフを自らの腹部に。

左手が、右手の手首を掴んで、動きを止めた。

制御のきかない右手を都は睨んでいる。

「冗談じゃない……！ 私が死ねば、それで終わりなのよ。あなたは私なんだから。こんなの正気じゃないわ！」

都の口元が、別の意識に操られているように、歪んだ。嘲笑だ。

「何と比べて正気なのか分からない意識なんて、関係ない。私は、ただ、私が赦せない。そう思っているだけ。その感情に、つき従っているだけよ。それが正気じゃないと言うのなら、ええ、きつと正気じゃないでしょうね」

凄い覚悟だ 陽菜は思った。

それは、表の彼女の、「人間になるためなら、どんなことでもする」という、常軌を逸した覚悟と同じものだ。

本当の都は、自分を断罪するためならば、死ぬことすら厭わない
そういう覚悟を持っているのだ。

「哀れな」

その時、陽菜は耳元に乾いた声を聞いた。

突然のことに、振り返れない。

その声は、暖かみを微塵も感じさせない冷厳さを秘めていた。

冷めた声 その表現が最も相応しい、霧のような声だ。

声を出した人物は、陽菜の隣に立った。

今の陽菜からは、足しか見えない。
そろそろと、見上げる。

陽菜は、声を出すこともできずに表情を凍らせた。
「自我を無くしたモノとは、人間であれ精霊であれ、哀れに見えるものだ」

そう言っつて、そいつは陽菜を見下ろして、淡々と訊いた。

「お前も、そうは思わないか？」

声も 間違いなく、あいつだった。
忘れるわけもない。

さらさらした、黒炭のような色の髪、そして、黒水晶のように透きとおった瞳。

本来、そこに宿っているはずの、優しい光はまるで存在していない。

笑顔を忘れた表情は、まるで人形そのものだ。

「けん、い、ち……？」

陽菜の口から、呆然とした声もれる。
だって、そんなはずはない。

鍵一は、手が届くほど近いところで、あんなに血を流して、死んでいるというのに……目の前の人物は、どうしたって、神山鍵一以外の、何ものでもない。

神隠しに遭う前の、神山鍵一……それが、成長した姿、そのままなのだ。

二の口がつけず、陽菜は口をぱくぱくさせる。

「けんいち？ 違うな。我は四元王^{ケルト}。誇り高き聖霊の王にして、>四元くを統べる者。そう……神隠し事件の黒幕、と言った方が分かりやすいか」

陽菜は思わず、息をのみ込んだ。

心臓が跳ね上がる。

こいつが……この、目の前にいる、鍵一の姿を借りた四元王が、全ての糸を引いていたのだ。

陽菜の返事を待たずに、四元王は視線を、都へと戻す。そして、すつと、足を進めた。

都の、ナイフを握る右手にそつと手をかける。都が、はつと顔を上げた。

「四元王　っ」

語尾は、吐き出した息に消えた。

「そうしていても、埒があかないだろう。手を貸してやる」

都の右手は　握られたナイフの刀身は、呆れるほどすんなり、彼女の腹部に突き刺さっていた。

じんわりと、血が滲みだす。

「そん、な　話が、ちが……あんたを、蘇らせたなら、私を、人間に、するって……」

「確かに、素質はあるかもしれん。だが、残留した意識も支配できず、己を完璧に制御できないようでは、いずれ己の逆逆を受けて死ぬだけだ。今ここで死ぬのと、大して差はあるまい。心おきなく、死ね」

言葉の終わりとともに、四元王はナイフを捻った。

都が痙攣して、口から血の泡を吐く。

「痛い　し、死にたくない、まだ、死にたく……な………」
ずるずると、四元王の体を掴もうとして、できなくて、滑り落ちた都はゆっくりと倒れた。

その大きな瞳から、ひと筋、血の涙がこぼれてゆく。

血の滴るナイフを、興味をなくしたように投げ捨てて、四元王は陽菜へと向き直った。

苦しみ、呻きながら死を迎えつつある都には、見向きもしない。

陽菜はもう、立つ気力すら残っていない。

ただ、わなわなと震えることしかできないでいる。

「さて　この学園の人間は、すべて消した。残るはお前だけだ」
すべて、消した。その言葉に陽菜が委縮する。

「安心しろ。殺してはいない。この二人以外は。だが、いずれは死

ぬ。この四元王を完全に復活させるための生贄としてな」

神隠しだ 辛うじて、それだけを陽菜は考えることができた。そして、最後が自分だ。

それも、不思議に思うくらい分かった。

近づいてくる。四元王が いや、死が。死、そのものが、ゆっくり近づいてくる。

「ひ、いや……！ こない、れ………っ！」

恐怖と、涙と鼻水で、もう陽菜は呂律が回っていない。

後ずさりするが、力が入らないので、数センチも進めない。

死が近づいてくる方が、遙かに速い。

冷めきった死が、もう、目の前まで来ていた。死は、陽菜を静かに見下す。

「死が、怖いか」

陽菜は頷く。何度も、何度も。

「我には分からない。死を恐れる感情が。 いや、分からなかった、という方が正しいか。今ならば、分かる気がする。喪失への、恐怖が……。しかし、分かったところで、どうなることでもない。悲願成就の為、全力を尽くす。それだけだ」

四元王の手が、幼馴染の手が、陽菜の細い首を掴んだ。

気管が閉塞し、呼吸が困難になった陽菜を、四元王は軽々と持ちあげる。

陽菜はじたばたと暴れるが、暴れるほどに息を消耗し、余計苦しくなる。

意識が遠のき始める。

「感じる。お前の絶望を。お前の恐怖を。お前の死を。そして死を前にして、それでも生きようとする意思……その極上の意思は、我の糧となり、我の一部として、生き続ける。安心して、冥土へ旅立つがいい」

首を掴む手に、力がこもる。

陽菜は絶え絶えに息をもらし、体を痙攣させ、それでも小さく抵

抗を試みる。

死への、精一杯の抗い。

しかしそれも、終わりつつある。

生きたいと渴望しているのに、叶えることはできない絶望感……。

(けん、いち……)

朦朧とした意識の中で、陽菜は、鍵一の名を呼んだ。

彼の言葉が、脳裏に蘇る。

死んでも守らなきゃならない、大切な人なんだ。

鍵一はそう思ってくれた。

自分を、女性として好きでいてくれたのか　それは分からない

けれど、命よりも大切な存在だと、思ってくれていた。

それだけが、嬉しく思えた。

もうじき、わたしの意識は消失するだろう。

それは、もう既に確定している未来。秒刻みで、わたしは、その時を迎えつつある。

死という終焉を迎える前に、鍵一の気持ちを、一片でも知ることができた　それだけで、幸せだ。

ねえ、鍵一。

あと少しだけ　あと、ほんの一瞬……わたしの意識が消えるその前に、信じていいかな？

あなたを、あなたが起こしてくれる、奇跡を。

「たす、けて……けん、いちい……っ！」

陽菜の口から、それだけが声となり、絞り出された。

今にも消え入りそうな命の灯　それを体現しているような、か細い声だった。

しかし、

奇跡を起こすには、

それだけで十分だった。

死に瀕した陽菜も、四元王も、そして世界も、力強く脈打つ命の音を、確かに聞いた。

どくん　という、心臓の音。命の音。命を刻む、希望の音を。
四元王の手から、力が抜けた。

呼吸を取り戻すと同時に、陽菜は地面に身を叩きつけられ、呻いた。

喉を押さえ、咳きこみながら呼吸を貪る。

ようやく正常な意識を取り戻して陽菜が顔を上げた時、目の前の四元王は後ずさりし、顔を歪ませていた。

「ばかな……そんな、ばかな……！」

驚愕の声が、その口からもれている。

苦悶の表情で胸を押さえた四元王が振り返った。

その後ろで、神山鍵一が　死んだはずの彼が、起きあがっていた。

鍵一……！

陽菜は呆然として、呟いた。

そうだ、鍵一だ。

鍵一が立っている。

自分の足で、しっかりと。

だが、見開いた眼には、まだ光が宿っていない。

彼はただ、立ちあがっただけだ。

まだ、戻ってきていない。

陽菜にはそれが分かった。

ああ、鍵一。

陽菜は胸で手を組んだ。

お願い、早く、早く戻ってきて。

じゃないと、取り返しがつかなくなる。

だから、お願い！

祈りは届かず、未だ鍵一は目覚めない。

四元王が、彼へと迫る。

たすけて、けんいち。

鍵一は、甘いまどろみの中で、確かにその声を聞いた。忘れるはずもない、大切な人の声。

その、切なる願い。

目覚めるには十分なほどの力を秘めた、魔法の言葉。

陽菜の叫び。

それを聞いたとき、鍵一は何かが強く己の内を叩くのを感じた。

終わりを迎えたはずの、命の鼓動。

小波のように穏やかなそれは、刻々と大きさを増し、押しでは引いてを繰り返す。

喪いかけた意識が、引き戻される。

俺は、死んだ。はずだ。

なのに、まだ消えていない。

自分の体を見る。手を見る。

確かに存在する。

頬を触る。

やはり存在する。

俺は、まだ生きている。

いや……生きているが、これは、俺の体じゃない。

俺はまだ意識の海を漂っている。

これは本体じゃない。

戻らなきゃ。

早く、戻らなきゃならない。

鍵一は周囲を見回す。

ベルベットを散りばめたような景色。

ここを、鍵一は知っている気がした。

前にも一度だけ、来たことがある。

それは、九年も昔……ちょうど、神隠しに遭っている最中だ。

四元王の魔の手から、逃げていたあの時。

足を踏み外して、崖から落ちて、全身に強い痛みを感じた後、気

がついたら、俺はこの場所にいた。

ここは二度目だ。

あの時は、誰かいた。

俺じゃない誰かが。

男だった。

背が高く、色の白い男だ。

針金みたいに細い体をした若い男。

声はレースのカーテンみたいにさらさらしていた。

目はまるで石炭だ。

命が灯っていない瞳。

黒い硝子玉だって、あの目よりはよっぽど綺麗に思える。

口元に、薄気味の悪い笑みを絶えず浮かべていた。

俺は、ひと目でそいつが嫌いだ、そいつを好きになれないと思っ
た。

いるのだろうか……あの男が。

またカーテンのようなさらさらした声で、俺に、わけのわからな
いことを言うのだろうか。

鍵一は覚悟を決めて、叫んだ。

「出てこい！ いるんだろう？ あの時のように！」

やや間があつて、深淵が答えた。

『いかにも……』

「何がいかにも、だ。きざつたらしい言いかたしやがって。とつと
と姿を見せる」

耳ざわりな嘲笑。変わらない。あの時と同じだ。

『フム 私は君に、ずいぶんと嫌われているようだな』

「ああ、あんたみたいな奴は大嫌いだ。何もかも、見透かしたよう
な言いかたをする奴は」

『それが、私の本質だ。あの時もそう言った。そしてこれが二度目
になる』

ベルベットの空間から、ぬらりと、それは現れた。

針金みたいな体の男。

いけすかない嘲笑を口元にたくわえ、目は相変わらず生氣を宿していない。

『おはよう、鍵一君。そして、久方ぶりだね』

「あんたに名前を呼ばれるなんざ、気色悪い……」

鍵一は男を睨みつけている。

『言わずもがな、君がここを訪れたのは二度目だ。一度目は九年前、君が神隠しに遭っている最中だ』

「生憎、昔話に花を咲かせる時間なんてない。早く俺を元に戻せ。一度目と同じように」

『残念だが、一度目と今回は、わけが違う。あの時の君は命があった。君は生きながらにしてここを訪れたのだ。だが、今回の君は、死してここに来た。不可解にも、尽きたはずの命の灯が再び燃え始めてはいるが……』

「あいつを助けるためなら、俺は何度でも生き返るさ。それが俺だ。神山鍵一だ」

『そこが、私には分からない』

男は鍵一を指さして、呟く。

『全ての行為には理由がある。生き返るということも 特別な例ではあるが 例外なく理由を持つ。しかし、代償は大きい。生き返るといのはね、尽きたはずの命が生きて、元の器に返るといことだ。これは、とても大変なことなのだよ。相当の理由がなければ、それを為すことはできない』

「ごちゃごちゃと回りくどい言いかたしやがって……。要は何が言いたいんだ」

『朝生陽菜だ』

男は、はつきりと答えた。

『他にもいるだろう。だが今のところ、君の中で大きいのが彼女の存在だ。私にはね、彼女が……君が生き返るだけの理由になるようには、とても思えない。彼女の、何が君をそうさせるんだい？ ま

さか、好いた惚れたの話だとは言わないだろうね』

「……………違う」

鍵一は、己の心の内を反芻するようにして、ゆっくり答えた。
違うのだ。

そんな生易しいものじゃない。

陽菜に対する鍵一の気持ち それは、一種の呪いだ。

自分でも、はっきり分かっている。

俺は全てを忘れていた。

そのことで、陽菜を傷つけた。

それなのに、彼女は俺の傍にいてくれた。

俺の親友でいてくれた。

それがどんなに大変なことなのか、俺は誰よりも知っている。

俺のせいで、どんなことを陰で言われていたのか分からない。

俺の前では、決しておくびにも出さなかったが、もしかしたらいじめられていたのかもしれない。

それでも、彼女は平気な顔をして、優しい笑顔で、俺の傍に付き添っていてくれた。

陽菜は好きだ。それは間違いない。

けれど、それは人間として、だ。

彼女を女性として好きになることは、俺にはできない。

俺は怖い。

その思いを抱くことで、彼女との関係が変わってしまうことが、だからどうしても、彼女を女性として、好きだという感情を抱くことができない。

その気持ちを代償にして、俺は、彼女を守ると誓った。

必要とあらば、この命を投げ打ってでも、彼女を厄災から救ってみせる。

そう思ったのが、帰ってきてから一年後、今からちょうど八年前のことだ。

その誓いは今も変わらない。

呪いだ。

それを呪いと言わずに、何とさえいいだろう。

だが、この呪いのおかげで、鍵一は今も己を保っていられるのだ。彼女を好きになりたいのに、なれない。

だってそれは、自分を失うことだから。

「呪いだよ……。これは呪いだ」

『そうだ。それは呪いに他ならない。あの時の君は、彼女の傍へ戻るために、生き返ることを望んだ。それは好いた惚れたの感情

そう、もっと空々しい言いかたをすれば、愛の力くともいうものだったのに、今の君は違う。君は呪いによって生き返ることを望んでいる。皮肉なものだね。愛しいはずなのに、愛しいと思っではない。彼女を愛しいと思うことは、己の拒否、すなわち、彼女が愛しいくというその感情をも否定することになる。そう、呪いだよ。笑えるくらいに残酷な呪いだ。それでも君は、生き返ることを望むのかね？』

「それが、俺の存在する理由なんだ。そうしなければ、俺は俺じゃなくなっちゃう」

『君が、望んでいることくであり、また、くしなければならぬことくでもある、か。一つだけ予言しておくよ。その呪いは、間違はなく、いつか君自身を壊すだろう。』

そうそう　君ももう、いいかげん、気付いていると思うが、君はもはや人間ではない。人間ではありえない。精霊執行官だからという、そういうことを抜きにして、君は人間ではないのだ。君が相棒の精霊と、その半身を分け合っていることも、抜きにして。この世界に私が見えるということが、その証拠だ。私はね、君たちが言うところの神　精霊執行官という、君の役割に近いところで言えは、^{ディヴァイン}聖霊神くなのだよ。その私をここに見るといいうことが、どういうことか、よく考えてみるといい』

鍵一は鼻を鳴らして、男を一層、睨みつける。

「……………はん、そういうことか。ずいぶん、酔狂なことをするん

だ、聖霊神とやらは。この俺に取り憑いて、何を狙ってやがるんだ」

『何も。他意はない。ただ、あの場所で、君は私を求めた。神という存在を求めた。その願いを、私は叶えただけだ。君が望むことを、私は叶える。どんなことだって、私は叶えてあげよう。ただし私も取り憑いた身だ。君が滅ぶことは私も滅ぶことを意味する。だから忠告はするし、必要とあらば、手助けもする。だが、それは最優先ではない。まず君の願望ありきだ。その次に、私の意思がくる。君がここに来たのは、私の意思だ。君は滅びかかっていた。願望を抱けるような状態ではなかった。だから、私がここに呼んだ。そして私は、君の願望を聞き届けるために姿を表した。君の>生き返りたいくという願望、それは叶えよう。信用できないだろうが、神の名において約束する。だが、生き返ること、君がまた滅びへの一歩を踏み出すことを、私は無視することができない。だからこうして忠告しているんだ。君は、私が話さなくとも、いずれ自分が人間でないことを完璧に悟るだろう。そしてそれは、君の呪いをより一層強めることになる』

「言われなくても、分かってる」

そう、分かっている。他の誰よりも、そのことは分かっている。

「じゃあ、どうしろって言うんだ」

『簡単だよ。変わればいいんだ、君がね』

「……本当に、簡単に言ってくれるな」

『だが、まぎれもない事実だ。呪いに囚われないように、君が変わるだけでいい。それだけで、全てがよい方へと向かう。そういうものさ。世の中なんて、人間なんて』

「……分かったような口を聞くのは、神の特権か？ あんたの言うことは一理ある。でも、やっぱ、俺はあんたが嫌いだ」

『気に障ったか……。これは失礼』

悪びれた様子もなく、男は微笑んでいる。

鍵一は拳を握り締めて、考える。

たびたび、そう思っていた。俺が変われば、きっとよくなる。
変わることを怖がっているのは、何もできないのだ。変わらなければ……。

これは、機会だ。

二度と訪れるか分からない機会だ。

今までに変われる機会はいくらでもあった。

けれど、できなかった。怖かったからだ。

陽菜の優しさが消え去ること、今までの関係が崩れること。

それをいいわけにして、呪いにして、一人で苦しんでいた。

いや、苦しんでいるふりをしていた。それは陽菜も同じだ。

そうだ……、そして あいつもだ。

鍵一は思い出す。

誰よりも、陽菜よりも、自分の近くにいる存在のことを。

スピリットという名を持つ、精霊のことを。

陽菜は好きだ。

女性として、人間として。

今は、陽菜を そういうことを抜きにして、ただ、守りたい。

今までは違う、何のしがらみもない付き合いを彼女としたい。

そして彼女と同じくらい、愛猫も大切な存在だ。

それを、鍵一はやっと思い出した。

陽菜への呪いに焼き尽くされて、気がつかなかった。

半身を分け合ってまで、近くにいてくれた存在を。

あいつと俺で、ソウルスピリット。

今までそう言ってきたじゃないか。

やっと、その意味が理解できた。

そのとおりだったんだ。

あいつと俺は、二人で一人なんだ。

どうして今まで気がつかなかったのか、不思議なくらいだ。

「そう……君はそっちを選んだか。いや、失礼、選んだという言い
かたはよくないな。ただしくは、気付いた、だ。やっとな。君の気

持ちは正しい。いつだって、一番大切なものは近くにありすぎて、逆に見えないものだ。さて……そう言えば、時間が、差し迫っているんだっただね。ああ、安心したまえ。たとえここで千年に匹敵する時を過ごしたとしても、戻ってみればほんの一瞬だ。君の生き返りたいという願望、叶えよう。この道を行きたまえ』

男は、光を灯した指先で、鍵一の後ろを指さす。

振り返ると、ベルベットの続く空間に、ひと筋の光道が現われていた。

『また、困ったときにはここにきたまえ。ささやかながら、協力は惜しまないよ』

「できれば、あんたとは二度と面を合わせたくないな」

『そうか。つれないな、君は』

男の言葉を、背に聞きながら、鍵一はもう、光の道を駆け出している。

振り返りはしない。もう、あと戻りはできない。あと戻りなんてしない。

ただ、前を向いて走り抜けるだけ……！

もう一度、強い衝撃が自身を叩いたとき、鍵一はその体に意識を取り戻していた。

かっと目を見開き、顔を上げて前を見据える。

四元王。

あの時奪われた、過去の俺。

四元王が腕を一振りするよりも、鍵一の放った正拳突きが四元王の顔面に突き刺さる方が、遙かに速かった。

くぐもった呼吸を残して、四元王が弾き飛ばされる。

鍵一はそれを追撃。体勢を立て直す前に、膝蹴りを顔に叩き込むのけ反った四元王に、その徹底的に痛めつけた顔面に駄目押しの一ひじ打ちを落とす。

あまりの威力に、アスファルトへ叩きつけられた四元王が跳ね上がった。

鍵一は三步分飛びのいて、構える。

四元王は即座に飛び起きて、鼻血を拭う。

口元に、苦虫をかみつぶしたような歪みが浮いている。

「おのれ……！」

反撃に出ようとした四元王の、その無防備な背中に何者かが蹴撃。つんのめって倒れる四元王を飛び越えて、一人の少女が鮮やかに回転しつつ、鍵一の隣へと降り立つ。

「スピリット……」

それは紛れもなく、最高の相棒、スピリット・エルフィール・ミッドマンだった。

「遅かったわね。待ち侘びたわよ」

「わりい。ちよつと、あの世まで小旅行してたもんでね」

「目は、醒めたわね？」

「もちろん。最高の気分さ」

スピリットはニツと笑って、眼尻の涙を拭った。

鍵一は、後で千回は土下座して謝ろうと思った。

彼が生きていることを諦めた瞬間を、彼女は感覚ですでに知っている。

これは抹殺ものだ。千回では足りない。

万回は謝らなければならぬかも知れない。

覚悟しておこう……。

油断なく構える二人の前で、四元王が浮遊するようにゆっくりと起き上がる。

「おのれ、おのれおのれおのれっ！」

憎悪を吐き出しながら、四元王は二人を睥睨する。

しかしこのままでは分が悪いと思ったのか、その身を紅蓮の炎に包んで姿を消した。

「逃げた！」

「逃がさないさ」

左手の反応は、まだ死んでいない。
奴の居場所は手に取るように分かる。
すぐにでも追って、倒さなければならぬ。

しかしその前にやる必要がある。
息をつく間もなく、鍵一は腰を抜かしている陽菜を置いて、倒れ
伏す輝立都へと駆け寄った。

抱き起こしながら、傷口を見る。
酷い。

これは、普通にいけば助からない。
傷を治す特殊な能力なんて、鍵一は持ち合わせていない。
だが、ひとつだけ、方法がある。

「どう？」

スピリットが、都を見つめながら尋ねる。

「だめだ。契約させるしかない」

「彼女はともかくとして、都ちゃんは彼女を受け入れるかしらね…」

「賭けるさ。もう、それしかない」

鍵一は脈打つ左手を傷口にそつと添える。

こぼれ落ちてゆく命を優しく塞ぎ止める。

「ソウルスピリットの名の下に、命ずる。かの身に宿りし精霊よ、
盟約の儀に従い、その持てる力の全てを、宿主の血肉とせよ」

力強い言霊の下、左手を通して、鍵一の精霊の力が彼女に注ぎ込
まれる。

傷口から、力が浸透してゆく。

ひゅーうー、と都が細く息を吸い込んだ。

そして次の瞬間、力強い脈動を取り戻すと同時に血を吐きだした。
せき込みながら、懸命に呼吸をして、輝立都は生命活動を再開し
た。

苦しそくに、息を吸い込んで、吐き出すのを繰り返す。
戻った……。

鍵一はそれを確信した。

都の腹部の傷は、すでに塞がりつつある。

もうこれで、命の心配はない。

「……どうやら、繋がったみたいね」

「そうだな、ひとまずよかった」

刺激しないように彼女をそつと横たわらせ、鍵一は息をついた。

ひとまずは、これでいい。

しかし、これから先、彼女はもう普通の女の子ではいられなくなる。

そうしなければ助けられなかったとはいえ、心が痛んだ。

彼女が困ったときには、無条件で力を貸す。

それが、彼女を精霊使いにした鍵一の、責任だ。

安息の息を吐いて立ち上がった時、脇腹と左胸に刺すような痛みを感じた。

触ってみると、血は固まっているが、痛覚は残留している。

野郎……、生き返らせるなら、きっちり治しとけてんだ。

心の中で舌打ちして、鍵一はスピリットの頭にぼん、と手をおき、陽菜に向き直った。

彼女は、瞳を潤ませて鍵一をじっと見つめていた。

「よう、陽菜……」

声をかけて、鍵一は陽菜に駆け寄り、ギュツと抱きしめた。そして、耳元で囁く。

「お待たせ……」

その一言を聞いた瞬間、陽菜は声を上げて泣いた。握った拳で、自分を抱きしめている鍵一の背中をどんと叩いた。

「何がお待たせよ！ ばか！ ほんとに……ほんとに、怖かったんだから！」

「……ごめん」

「謝ったって、絶対赦さない……！ 赦さない……赦さないから！」

叩くのをやめて、陽菜は鍵一にしがみ付く。

しがみ付いて、大泣きした。

やっと親に再会できた迷子の子供のように、泣いて、泣いて、泣き続けている。

「陽菜」

鍵一はそつと陽菜の肩を抱いて、彼女から身を離れた。真正面から、彼女を見つめる。

「俺、もう行かなきゃ……。あいつを、倒さなきゃいけない」

「戻ってくる？ 今度は絶対、無事に戻ってきてくれる？」

「ああ」

鍵一は間髪を入れずに答えた。

「絶対、戻ってくる。約束するよ。無事に帰ってくる。帰ってきたら……話すよ、全部」

「……うん、分かった。じゃあ、待ってる。わたし、待ってるから……」

頷いた陽菜に頷き返して、鍵一はそつと陽菜から離れた。

そしてスピリットに目くばせして、一息にフェンスを飛び越える。

「け、鍵一っ!？」

陽菜の吃驚した声を背で聞きながら、鍵一は木を足場にしつつ、器用に跳躍して着地。

スピリットが後に続く。汚泥を跳ね飛ばし、二人は走る。

左手の熱が高まる。近い。

「来るわ」

相棒の凜とした声を聞いて、鍵一は「ああ」と頷いた。

殺気。

背後。

二人は振り返らずに前方へと跳躍。鮮やかに前転して、飛来した火球を回避する。

昇華した雨の蒸気が立ち上る中、鍵一は、スピリットは鋭い目つきで敵を見据えた。

いた。

四元王だ。

鍵一から奪った、過去の彼の姿で。

その表情には極大の憎悪。

そして、思わず笑いだしたくなるくらいに強烈な圧力。

突き上がってくる恐怖に、鍵一は身を震わせていた。

かつて、四元王に殺されかけた　そのトラウマが蘇る。

冷や汗が吹き出す。

閃光少女とのやり取りで被ったダメージは、まだ鍵一に残っている。

呼吸が乱れる。

左胸に手をやり、鍵一は肩で息をする。

手加減など、相手はしてくれない。

当然ながら、殺す気で来るだろう。

この満身創痍の状態でも、スピリットがいるとはいえ、果たして勝てるかどうか……。

いや。鍵一は、恐怖を振り払う。

やらなければならぬのだ。

勝たなければならぬ。

必ず勝って、そして、生きて帰る。

(そう、約束したんだもんな……)

「鍵一、いけるわね？」

「当たり前前だろ。いくしかねえんだ」

いい返事よ。

言って、スピリットが閃光に包まれた。

彼女の柔らかな光が、鍵一の両こぶしを包み込むグローブと化す。

使い魔を持つ精霊執行官のみが発動を可能とする、一心同体の戦

闘態勢。

これこそが精霊執行官、ソウルスピリット本来の姿だ。

「殺してやる　今一度、この手で！」

四元王が、殺意の言葉を吐く。鍵一は、不敵に嘲笑。

「今度は殺されてやるわけにはいかないね！」

地面を力強く踏み締め、鍵一が加速。

人間の反応速度を遙かに上回る速度で四元王に肉薄する。

左の拳を、弓に番えた矢のように引き絞り、標的に目を走らせる。

狙いは心臓。

(南無三！)

祈ると同時、引き絞った拳を発射。

並みの精霊ならば一発で消し飛ばす一撃を、鍵一は容赦なく放った。

四元王は動かない。

動けない……？ 奴へと迫る己の拳を捉えながら、そう考える。

否。そうではなかった。

四元王の嘲笑。

しまった！

そう思った時には、既に手遅れだ。

ばかり 異様な音が鳴る。

迸る火花。電撃の蛇光が、四元王から解き放たれる。

それは鍵一へと集束。左の拳に着弾。

直後、全身を貫いた激痛に、鍵一は絶叫を上げる。

無論、それだけでは済まない。

凄まじい電撃の生み出す衝撃が、鍵一を後方へ軽々と弾き飛ばす。

大木へ激突、それをへし折つてなお勢いは止まらない。

二つ目の大木をへし折つたところで停止。

体からは白煙が上がり、服は焦げ、手の先から足の先まで痙攣が止まらない。

「ぐう……っ！」

なんて、強力。すぐさま立ち上がることも、鍵一はできない。

顔を上げて、かすんだ視界で四元王を捉える。そこには、ただ、嘲笑のみがあった。

苦痛のシグナルを無視して、鍵一は根性で起き上がる。無様に膝をつき、大きく息をもらす。

だが、視線だけは四元王からはずさない。まだ、心は負けていないのだ。

息を吸い込んで、鍵一はまたも疾走。愚直なまでに四元王へと突っ込んでゆく。

四元王も、鍵一の方へと加速。両者が二度目の肉薄。

跳躍と同時に鍵一の放った飛び蹴りを、四元王はひらりと躲す。

即座に反転し、四元王が反撃。炎を纏う正拳突きを放つ。

屈んで、鍵一はそれを回避し、下側から拳を突き上げる。

しかし、それは四元王を捉えない。

のけぞらせた身を引きもどしながら放たれた裏拳を、鍵一はもろに浴びた。

思わず息を詰まらせ、眼を見開く。

攻撃は終わらない。

一瞬の間もおかない連続攻撃。

数えられるだけで十二発、凄まじく重い打撃を受けた鍵一は、煮えたぎった胃液が逆流してくるのを、本能で察知。

さらに、衝撃。

足刀を腹部に叩き込まれ、突き放された鍵一が、またも背中から大地に着地する。

四元王が宙へ青白い閃光を展開。鋭い氷柱を空中に幾つも生成する。

それは四元王の指揮の元、激しく嘔吐する鍵一へ霰のように降り注ぐ！

(まづい！)

次の瞬間、鍵一は己の拳を力いっぱい地に叩きつけ、土砂を大量に弾き上げた。

四元王の視界から、鍵一の姿が消失する。

敵が自分を見失ったその隙に、地面を転がって、鍵一は近くの木

へ姿を隠している。

「まずいぞ、スピリット君……」

右肩に刺さっていた氷柱を引き抜きながら、鍵一は呻いた。全てを回避することは叶わず、肩に一発もらってしまったのだ。

「あいつ、強い」

「弱音吐く暇があつたら、さっさともう一回仕掛けなさいよ！」

「仕掛けた結果がこの様だぞ。無茶言つなよ！」

「なるほど 真っ向からは自殺行為、ってわけね」

「ああ……。こりゃあもう、切り札使つしかねえか……」

だが、その切り札は、体力の消耗が激しい。

今の満身創痍な鍵一では、スピリットの力を借りても、一発、放つことができるかどうか……。

冷たく降り注ぐ雨が、体を冷やす。

残り少ない体力は、どんどん削られてゆくだけだ。

「一発、だな」

「ええ。一発で決めるしかない……。しくつたら、それで終わりね」

鍵一は、静かに拳を握った。

一撃にかける。

はずしたら、あとはない。

深く深呼吸をして、気持ちを固める。

拳から、スピリットの決意が鍵一へ、流れ込んでくる。

迷うことはない。

今はもう、一人ではないのだ。

それに、必ず生きて帰ると約束した。

こんなところで死んでしまつわけにはいかない。

絶対に、勝つ。

勝つてみせる。

それだけを考え、神経を極限まで研ぎ澄ませる。

氷柱の砲撃が止まないなか、鍵一とスピリットは、呼吸、鼓動、そして心までも、ひとつに合わせてゆく。

「ソウルスピリットが解き放つ」
囁くような声で、詠唱。

「紅蓮の炎よ　その猛りし灼熱の牙を我が左手に宿し、全てを滅せ」

左手の、痣が軋む。

ざわめいている。

確かに宿る必滅の焰に、慄いている。

体が震えだす。

その中で、鍵一は錯綜しそうになる意識を必死で繋ぎとめる。

大丈夫　あたしがついてるから。

スピリットの優しい声。頷く。小さく、だが、力強く頷く。

そうだ、いつだって二人でやってきた。

俺たちにはできないことはない。

二人揃えば、天下無敵だ。

体の震えが、止まった。

迷いは全て断ち切った。

あとは動くだけ。

勝負は一瞬。

そう。

一瞬で、ケリをつける。

不意に、鍵一の呼吸が変わった。

刹那、

鍵一は、木の陰から飛び出した。

その身を、氷柱の雨に晒したのである。

四元王が、わずかに眉を上げた。

砲撃は止まない。

一発くらいなら、たいしたことはない、しかし、連続して当たったならば別だ。

その氷柱が、鍵一めがけて、次々と降り注ぐ。

鍵一は、にやりと笑った。瞬間、

鋭い氷槍が、鍵一を貫いた。

否。それは鍵一ではなかった。

「残像だと!?!」

四元王が叫ぶ。

そう、残像である。

鍵一の本体は、すでにそこにはない。

特殊な呼吸法によつて、身体能力を爆発的に上昇させた今の彼は、残像を生じさせる速度での機動が可能。

五つの、鍵一の影がそれぞれ、四元王へ迫つてゆく。

「小賢しい真似を……!」

忌々しげに呟き、四元王はその身から電光を迸らせる。

十匹の雷蛇が、鎌首をもたげて影を見据えた。

迫る敵の前に、舌舐めずりをするように、火花を放っている。

「消し飛ぶがいい!」

四元王が、腕を振り下ろすと同時、解き放たれた雷蛇が拡散するように展開。

五人全ての鍵一を射程に捉える。その一匹一匹が、まさに死神。

凄まじい電流は、五つの影、全てを消し飛ばした。

そのどれもが残像。

四元王が目を見開く。

本物の鍵一は、四元王の背後。

それに気づき、振り返る四元王。

だがもう遅い。

捉えた。

それを、鍵一は確信する。

はずすわけにはいかない。

チャンスはこの一度きりだ。

見敵、必殺。

「ソウルブレイカー!」

限界まで引き絞られていた拳が、放たれる!

それは四元王へ命中。宿されていた灼熱の牙が爆裂する。
凄まじい衝撃。苦悶の声を上げながら、鍵一は、己の拳を
振り抜いた。 振

四元王の半身を吹き飛ばして、鍵一が大地へ着地。
振り向いたところで、大きく息を吐き出す。

(決まった、か?)

半身を失った四元王が、後ろへ傾いてゆく。
勝った。

安堵の笑みが、鍵一からもれる。
しかし。

安心した鍵一の耳を叩いたのは、四元王の高笑いだった。
茫然とする、鍵一。

その前で、四元王が我が身を引き起こし、残酷な笑みで鍵一を見
下している。

「見事だ、神山鍵一……」

言葉を失う鍵一へ、地の底から響くような声が浴びせられる。

「だが、この程度で我は滅せぬ」

言い放ち、四元王が幽然とした光に包まれる。
すると、どうだ。

周囲の木々が、草が、みるみる枯れ始めたではないか。

土はやせ衰え、色を失ってゆく。

それに合わせて、消滅したはずの四元王の半身が、再生してゆく
。

「う、嘘だろ……?」

鍵一が、乾いた笑いを口にしながら呟いた。

立っていることもできなくなり、がくりと膝をついてしまう。

「んなことできるなんて、聞いてねえよ……!」

「鍵一、もう……あたし……」

苦しそうなスピリットの声に、鍵一は頷く。

抵抗する気持ちはあるのに、体がそれに追いついてこない。

四元王の冷笑が響き渡る。

鍵一は、唇を噛みしめた。
負けられない。

この戦いだけは負けられない。

死ぬわけにはいかない。

分かっているのに、体が動かない。

精も根も尽き果てている。

苦痛にまみれた表情で、鍵一は四元王を見上げた。

敵の顔が、狂喜に歪む。

「それだ　その表情を見たかった。忌々しい貴様の、その表情を
！」

煮え立つマグマのような高笑いの後、四元王は、一切の表情を消した。

「遊びは終わりだ。今度こそ、貴様に　引導を渡してやる」

四元王の翳した掌が、燐光を放ち始める。

必滅の業火が、そこへ集束してゆく。

(まずい、あれは……)

自分を消し飛ばすには十分すぎる。

食らえば、ひとたまりもない。

死への恐怖が、湧きあがってくる。

前に一度、鍵一は四元王に殺されかけた。

その時の記憶　畏怖の感情が、体の底からふつつつとわき上がってくる。

全身の震えは、体力が尽きたことだけが、理由ではない。

「こいつには、敵わない」　そんな諦めの兆しが、いつしか、表へ現れるほどに膨れ上がっていた。

鍵一が、スピリットが、呻くような喘ぎをもらす。

(俺たちは、ここまでなのか……?)

実力の差は明白だ。格が違いすぎる。

今の二人では、逆立ちしたところで、四元王には勝てない。

(せめて、あと、一撃　あと一撃、切り札が使えれば……)
あるいは、どうにかなるかも知れない。
司令塔である頭部さえ潰してしまえば、再生なんて真似は絶対に
できないはずだ……。

だが、その一撃を放つ力が残っていない。
心はともかく体の方が限界で、膝をついているこの体勢を維持す
るだけで精いっぱいだ。

本当ならば倒れてしまいたい。
でも、できない。

何故なら、それは完全なる敗北と、確実なる死を意味するからだ。
死の間際まで、絶対に、諦めはしない。

たとえ、勝てないということが分かっているのだとしても。

『今度は絶対、無事に戻ってきてくれる　？』

陽菜の言葉が、脳裏に蘇る。

そうさ。

無事に、帰るよ。必ず。

その為には、何をしなければならぬのか。

簡単だ。

目の前の敵を、倒せばいい。

この命、全てを賭けて、どんな手を使ってでも、勝つ。

そして、その上で必ず生き残ってみせる。

(なんだ　考えてみりゃ、簡単な、理屈だな……)

尽きたはずの気力が、わずかだが、湧きあがってくるのを感じた。
スピリットの驚いたような、心の声が聞こえる。

それに、鍵一は答える。「まだ終わっちゃいない」と。

凄まじい破壊の力が、四元王の掌へ、集束を完了しつつある。

それを前にして、先ほどまで感じていた恐怖が、いつの間にか薄
れてしまっていた。

今、湧きあがる感情はただ一つ。

「こいつを、必ず倒す」という、強い決意だ。

再び立ち上がる鍵一を見て、四元王が頬を痙攣させる。

憎悪と、困惑と　そして、恐怖。

何度叩きのめしてもその度に立ち上がるといふ、まるで理解できない行動への戦慄が、その顔に隠しようもなく浮かび上がっている。

「何故……！」

四元王が憎悪の声をもらす。鍵一は顔を、苦しそくに歪めながらも、不敵に笑う。

「人間には……たとえ、どんなリスク背負い込むことになっても……やらなきゃならない時があんのさ」

今が、その時だ。

ただ　それだけのこと。

それだけのことで、人間はいくらでも、強くなれる。

(とはいえ……、さすがに、厳しいな……)

あと一発、死に物狂いで切り札を放つとして……問題は、奴に確実に、それをぶち当てる体力が、鍵一には残っていないということだ。

雨と疲労とで、鍵一の体はもはやボロボロだ。

小細工を使わずに、直で突っ込み、切り札を叩き込むことしか、恐らくできないだろう。

限界なんて、とつくの昔に超えてしまっているのだから。

もちろん、四元王がそれを、すんなりと食らってくれるはずもない。

(強がり言ってみただけど、俺には、ここが限界なのかな……?)

思わず弱音がこぼれてしまう。いや、と鍵一はすぐさま首を振る。死の間際までは、絶対に、諦めて堪えるものか……!

鍵一は構えて、即座に意識を集中させる。左手に、ありったけの力を込めてゆく。

しかし、四元王の方が、わずかに速い。

(　くそ！　速く……速く！)

考えるほど、息が切れて意識が乱れてゆく。

(俺は、ここで……いや、俺たちは、ここで終わるわけにはいかな
いんだ！)

ついに、四元王の掌へ、破滅の力が 集束を、終えた。

(あと、あと少しだけ……！)

俺に、力があれば。

「終わりだ、神山鍵一……！」

四元王からの、死の宣告。そして、掌の火球が

(終わる………？)

思わず、目を見開く鍵一。

もう、ここまでなのか……？

刹那、

四元王が、不意に苦悶の声を上げた。

右手が突然跳ね上がり、同時に放たれた豪火球は軌道を上へと変

え、虚空を焼き尽くしてゆく。

「っ!？」

今、何が起こった……？

一瞬、茫然となる鍵一へ、宙から声が浴びせられる。

「神山君っ！」

それは、輝立都の声だった。

都は、鮮やかな宙返りの後、地面に着地。

即座に跳躍し、その姿を虚空へとかき消す。

またも、四元王が呻いた。

都に神速の蹴りを見舞われ、身を折って反吐をはく。

「閃光、少女………？」

スピリットと鍵一が、同時に呟いた。

そう、あれはまさしく 閃光少女、そのものだ。

「諦めないで、神山君！ 私も 一緒に戦う！ だから、この人

を………！」

都の、強い声。

諦めないで、という言葉が、鍵一とスピリットに、しみわたって

行く。

「……すまない！」

叫び、鍵一は再度構えた。

呼吸を整え、心を穏やかに。意識を、集中させる。

「決めるわよ、鍵一……今度こそ！」

「ああ、絶対に、決めて見せる！」

左の拳へと、持てる力、全てを集結させてゆく。

(風よ……光よ……大地よ……！この地に生きとし生ける全てのものよ……！どうか、俺に俺達に、力を……！)

鍵一の叫びが、スピリットの叫びが、世界へしみ込んでゆく。

その叫びに呼応して、大地から、風から、光から 生きとし生ける全ての力が、鍵一へと集まって行く。

左手の痣が、地獄の痛みを発する。

それは、鍵一にも抑えきれない力が集束しつつある証。

骨に食い込むような激痛が、ひっきりなしに襲いかかる。

(負けて……たまるか！)

歯を食いしばり、激痛に耐える。

そうだ。

こんなことで、負けてなんていられない。

「紅蓮の炎よ……！」

二人の力強い詠唱が響き渡る。

先ほどとは、比べものにならない破壊の力 聖なる炎が、左手へと収束してゆく。

それに気がつかない四元王ではないが、輝立都の攻撃に晒される彼に、鍵一を襲撃する暇は与えられない。

そして、逆に都の方に仕掛けようとしても、超高速で動き回る彼女を捉えることはほぼ、不可能だ。

歯ぎしりをし、四元王は深く息を吐く。

そして、周囲へ火花を迸らせる。それは、雷が解き放たれる前兆。直接補足することができないのなら、雷撃を周囲へ解き放ち、は

じぎ飛ばしてしまえばいいと考えたのだ。
都がそれを察知する。

しかし、攻撃の手を緩めない。

絶対に鍵一へと仕掛けさせるわけにはいかないという、確固たる意志がそこにはあった。

鍵一が唸るように咆哮する。

収束する力の強大さと、全身を貫くような激痛に翻弄されながら、それでも負けまいとする強い決意を秘めて。

歯を食いしばり、鍵一は顔を上げた。

己が両の目で敵の姿を、確実に捉える。

四元王と、鍵一の視線が、激しくぶつかり合う。

次で、決まる。

あまりにも明らかな事実を、二人と一人は、肌で感じ取る。

(あのときは、ここまで来ることが、できなかった……)
それを鍵一は覚えている。

(……取り戻すんだ。今こそ、全てを！)

奴に奪われてしまった、大切なものを。

必ず、取り戻す。

「……鍵一」

スピリットの、囁くような声。

鍵一は頷く。

「ああ……。行こう」

ただ、それだけを答えた。

聖なる炎は、その荒々しい力とは裏腹に 静かに、収束を終えた。
た。

行こう。

全てを取り戻すために。

そして、新たな未来を切り開くために。

鍵一は、ゆっくりと息を吐き出した。

この一撃で、全てが、終わる。

負けることは考えない。

もう、前に進むことしか、できないのだから。

今更、後戻りはできない。

今更、後戻りをする気もない。

すべきことはただ一つ。

持てる全ての力を込めて　この一撃を、奴へと叩き込む。

それだけだ。

それだけのことだ。

なんだ、簡単だな……。

鍵一の口へ、微かな微笑みが浮かぶ。

そして、

水面を発つ鳥のように、

鍵一は鮮やかに飛び出した。

進む稲妻。

雷を浴び、弾き飛ばされた都が悲鳴を上げる。

四元王へと迫る鍵一は、一瞬だけ、彼女へと視線を向けた。

彼女は、苦痛に顔を歪めながらも、微かに笑っていた。

視線を、前方へと戻す。

四元王。

あのときの、自分。

拳に、破滅の炎を宿している。

鍵一が肉薄してくるのに合わせて、四元王が、拳を放った。

同じように、鍵一も、限界まで引き絞った拳を打ち出している。

拳と拳が、ぶつかり合う。

凄まじい衝撃が、びりびりと身体を揺らした。

何故だろう……。心が、ひどく穏やかだ。

まさしく、命を削るような死闘の真っ直中にいるというのに……。

答えを探そうとして、

すぐに、思い当たった。

ああ……。そうか。

信じているのだ。

負けるはずがない、と。

陽菜との約束が、自分を、強くした。

都の決意が、自分を、強くした。

そして スピリットの存在が、自分を、強くした。

負ける要素は、どこにもない。

ほら……。あとほんの少し、力を込めるだけ。

四元王の顔に、憎悪と、苦痛と　ひと匙の恐怖。

どうして、そこまでできるのかと言わんばかりの、表情。

……。人間だからさ。

鍵一は、そう思った。

「返してもらおうぞ」

そして、静かに呟き、

ほんの少しだけ……。拳に力を込めた。

それだけで十分だった。

鍵一の拳が、四元王の拳を押し返す。

そのまま、勢いは止まることなく、

敵の拳をはじき飛ばして、鍵一は己が拳を奴へ真正面から叩き込

んだ。

聖なる炎が、四元王の顔面へ突き刺さる。

苦鳴。

僅かに、四元王が息をもらす。

それを、果たしてその耳で聞いたのか

鍵一は咆哮した。

全てを踏破するような轟きが木霊する。

そして 火柱が、上がった。

あらゆる物を包み込み、それは、天高く立ち上る。

聖なる炎が空を焼き尽くし、空を覆う雨雲を吹き飛ばしてゆく。

火柱の中で、それでも鍵一は、眼前を見据えていた。

四元王が驚愕と苦悶に顔を歪ませている。

小さく口を開いた四元王が、

「ここまで、か……」

と呟く声を、鍵一はその耳で、確かに聞いた。

次の瞬間、四元王が眩い閃光を発すると同時に、鍵一は意識を失った。

冷たい。

何だろう……？

混濁した意識の中で、鍵一はふと思った。

なんだか、顔が冷たい。

雨だろうか。分らない。

身体の、節々が痛い。

肉体の感覚はあるのだが、僅かに手を動かすのが精一杯で、拳を

握ることもできない。

何かが聞こえる。

でも、遠い。

遠くて、音がぼやけている。

誰だろう。

何を言っているのか、まるで分からない。

痛い。

頬を叩かれた。

何をするんだ。

もう少しくらいゆっくりさせてくれても良いだろう……。

鍵一はそう思った。

気だるくて、目を開くことも億劫だ。

また頬を叩かれた。もう一度。さらに、もう一度。

分かったよ。

起きりやいいんだろ、起きりや……。

鍵一は、うすうすと両の瞼を開いた。

眩しい。

強い光が視界を灼く。

目を細めて耐えていると、ぼやけた世界が、徐々に形を取り戻してゆく。

そして、先ほどからうつすらと聞こえる声も、鮮明になってゆく。

鍵一が、完全に目を開くと、目の前にいた二人が、そろって嬉しそうにため息をついた。

「やっと起きたわね、鍵一」

スピリットの声。目尻を拭っている。

「良かった……。このまま、起きないんじゃないかって思いました……。」

これは輝立の声だ。

彼女は、泣いていることを隠そうともししていない。

鍵一は狐につままれたように呆然とした後、顔だけを動かして、周囲を確認する。

「どうなっただんだ？」

「……………」

スピリットが、口を嚙む。輝立も同様。鍵一は押し黙って、二人の動きを待った。

やがてスピリットが、誇らしげな表情を浮かべて、こう答えた。

「終わったわよ。全部ね」

それを聞いて、鍵一は安らかな表情で目を伏せ、

「そうか……………」

小さく呟いた。

全てが終わった。その事実を、鍵一はゆっくりと噛みしめる。いつの間にか、雨は止んでいた。

（終わったんだな……。何もかも）

一瞬だけ、嬉しそうで、そして少しだけ寂しそうな微笑を、鍵一は浮かべた。

再び目を開いた鍵一は、都とスピリットに、手を貸してくれと言った。

限界を超えて暴れ回ったせいで、身体はガタガタだ。

とても、一人で立つことはできそうにない。

二人は何も言わずに、そっと手を差しのばした。

残った僅かばかりの力で、鍵一はその手を握りしめる。

身体を引き起こしてもらい、都に肩を借りる。

スピリットは小柄すぎて肩を貸すことはできない。

唇をとがらせるスピリットの頭に、鍵一はぽんと手を置いた。都の微笑が聞こえる。

「それにしても、こっぴどくやられたわね、今度も」

「そうだな……。できれば、二度とごめんだよ、こういうのは」

軽口を叩きながら、鍵一は、見事に晴れ上がった空を見上げた。

（何にせよ、こうして生き残れたわけだ）

陽菜との約束は、確かに果たしたことになる。

本当に、かろうじて、だけれども。

この姿を見られたら、きっとまた、泣かせることになるんだろうな……。

そんなことを思いながらも、今はただ……、

（生きて帰れた嬉しさを噛みしめてみよう）

空は蒼。

心の中も、同じように晴れやかだ。

身体はガタガタだけれども、なんとか、今もこうして生きている。

終章

終章

四元王により、神隠しに遭った風見学園生徒は全員、無事に帰還したようで、翌日、何事もなかったように、学園は活気を取り戻していた。

神隠しに遭っていたことを、彼らは覚えていない様子だ。

へし折れた大木や、えぐれた地面　激闘の爪痕に、疑問の声が上がったが、文化祭を行うことにさしたる問題はなし、と判断されたらしく、大きな問題にはならなかったようだ。

そのようなわけで……。

今日も学園は、文化祭準備で賑わっている。

鍵一は、いつも使っている中庭のベンチに深々と腰掛け、一息ついていた。

膝の上では、スピリットが大あくびをかいている。

「平和、つてのはいいねえ、やっぱり」

「そうねえ……」

ついて出る言葉も、暢気そのものだ。

すぎずきと痛む身体に、鍵一は小さく呻く。

精霊執行官の治癒力は普通の人間よりも強いため、前日は立つこともできないほど傷つき疲労しきった肉体は、今や、鈍い疼痛を残すのみだ。

一晩寝て、だいぶ回復した身体を引きずって、こうして登校した鍵一だったが、当初の心配は無駄に終わったようで、安心していた。てつきり、大騒ぎになるかと気をもんでいたのだが、杞憂だったらしい。

ことの真相を知っている都と陽菜も、鍵一と同じように沈黙を守

っている。

あの、四元王事件は常識を外れた世界での出来事なので、誰かに話したところで、小さな混乱を招くか、笑い飛ばされるかするだけだ。それを、二人も理解しているのだろう。

深々と息を吐いて、鍵一はそつと目を閉じる。

今回、都と陽菜には本当に悪いことをしてしまった。

今まで似たような事件はあった。

これほど大がかりではなく、本当に小さな、誰も気づかないような事件を、鍵一は人知れず解決することができた。

しかし、今度の事件では、本来関わらせるはずの無かった二人を巻き込んでしまった。

陽菜もそうだが、特に、都。彼女には、>契約<、そして>憑依共生<という形で宿っている。

鍵一とスピリットのように、互いの半身を分けたような存在になったのだ。

半人半精霊となった彼女に残された道はと言うと、閃光少女

フラッシュ・レイアを精霊執行官によって、その身体から引き離され、死を迎えるか、あるいは、鍵一らと同じように、精霊執行官として生きるか、しかない。

精霊執行官は、日常と非日常の境界に立つ者。

普段は日常に溶け込み、事件あらば、否応なく非日常へと飛び込んでゆかねばならない、呪われた存在だ。

もう彼女は、普通の人間としての道を、歩むことはできない。

彼女の道には、ただ、茨が広がるのみだ。

普通の女子高生として、その青春を心の底から、謳歌することは、できないのである。

(この、ソウルスピリットともあろうものが……)

こんな大失態を演じてしまうとは。

鍵一は、己の不甲斐なさに、唇を噛みしめる。二度と、同じ愚は犯さない。

絶対に……。

そう自分に言い聞かせて、顔を上げた。
緩やかに吹くそよ風が心地良い。

晴れ上がった日差しが、少しだけ、暑い。

もうすぐ、夏だ。

目眩を覚えるような夏。

今年は、どんな幻を見ることやら……。

それよりも、まずは目の前の文化祭を乗り越えることが、先か。

膝上のスピリットの頭にぽんと手を置いて、ちよっど行ってくると呟いた。

スピリットは、再度欠伸をかましてから、はいはい、と面倒臭そうに鍵一の膝をおり、ベンチの上で丸くなった。

鍵一は立ち上がり、校舎へと足を運ぶ。

一年C組の教室へと、鍵一は向かっていた。

自分のクラスの教室。

文化祭準備期間中で、ここを訪れるのは、ホームルームの時間を除いて、久しぶりのことである。

少し頼りなさそうだけれど、それでも凜とした態度でクラスメイトに指示を飛ばす、輝立都の姿がそこにあっただ。

昨日のことで、彼女は変わったのかも知れない……。

そんなことを思いつつ、鍵一は都に声をかけた。

クラスメイトに一言告げてから、都が近づいてくる。

少し、時間もらっていいかな？

そう訪ねると、都はええ、と頷いた。

場所を、図書館に移した。

相変わらず、伽藍としている。

ページをめくる音が、静かに響く。

鍵一は、都を伴って、図書室のベランダに出た。

ここなら、あまり話を聞かれる心配はない。

図書室のかび臭さから解放され、ふう、とため息を落とした。

鍵一と都は、そろって手すりに肘をかけて、景色を眺めた。

緩やかに連なってゆく山道と、それを覆い隠すように茂った木々。上の方には、アドネルシアが宿るご神木を、微かに見ることができきる。

「…………、良い風ですね」

風に髪をなびかせて、都は呟いた。

そうだな、と返しながら、鍵一に視線を向ける。

そよ風を受けながら、目を僅かに細めて、風見が丘を見つめる都。その表情には、どこか、一回り成長したような清々しさがある。

思わず、鍵一は言葉を失った。

ここに来るまで、どんな風に謝ったら良いだろう。それだけをずっと考えていたのに、いざ、彼女を前にし、そんな表情を目にした瞬間、頭の中が真っ白になってしまった。

それでも何か言おうとして、鍵一が口を開いたとき、不意に都が胸を張って、強く息を吸い込んだ。

まるで、決意を固めるかのよう。

「ありがとう、鍵一君」

鍵一へと向きなおり、都はそう言った。

「へ…………？」

と、素っ頓狂な声を漏らす鍵一。

突然の感謝の言葉と、自分のことを鍵一と呼んだ彼女に不意を突かれたせいだ。

恨まれることはあっても、感謝されるようなことをした覚えはない。

疑問符を周りに浮かべたような顔つきになる鍵一へ、都が、どこか恥ずかしそうに苦笑してみせた。

「あの…………う、ううん…………えっと、なんて言えばいいのか…………その…………」

眉を寄せて、なんとか、鍵一は言葉を探す。そんな彼へ、都は、「私のことは、気にしないでください」

言い切った。鍵一は、またも言葉を失った。

「鍵一君　優しいから、きつと、気にしてるんだろうな、って思
つて……でも、気に病む必要なんて、ないですよ。だって、鍵一君
は、どんな形であれ……私を、助けてくれたんですもの。すごく、
感謝してます」

「いや……でも、君の身体は、もう……」

「うん……。でも、それは私が選んだ道だから……」

ゆっくりと息を吐き出し、都は己の胸へ手を置いて、目をそつと
閉じた。

「後で、すごく後悔することになるかも知れない。けれど、それで
も生きたいと思っただんです。まだ、少しだけ違和感はあるけれど……
それは、ゆっくり時間をかけて、折り合いをつけていけば大丈夫
かな……。って、今は思ってます。この子も私であることに、変わり
はありませんから」

今までの私にさよならしたと思えばいい　　都は、静かに言った。
「だから、鍵一君も気にしないで……。ええと……。ほら、あんまり
悩んでると、頭皮が薄くなるって言いますし」

そして、都はどこか悪戯っぽく微笑んだ。

「そりゃあ怖い」

自分の頭に手をやりながら、鍵一は苦笑いを浮かべる。

ふと、都が腕時計に目をやって、小さく声を上げる。

「あ！　そろそろ戻らなきゃ……」

それじゃあ、また　　都は、一礼してから、校舎内へと戻ってい
った。

困っているような、寂しがっているような……そんな曖昧な表情
で、鍵一はため息をついた。

こんな場合、なんとさえいはいいのだろう。

まるで、一人だけ置いていかれてしまったような……、そんな寂

寥感が残っている。

どうやら、鍵一が思っているよりも遙かに、輝立都は強い女性であるようだ。

俺にも、あんな風に割り切れる日が来るものだろうか……。
心の中で呟きながら、鍵一もその場を後にする。

バンドの練習は、まだない。

時間をつぶすため、鍵一は屋上へと足を運んでいた。

昨日、鍵一の流した血は、雨で綺麗さっぱり流されてしまったらしく、アスファルトには、血のシミひとつも存在しなかった。

本当に俺は、ここで一度死んでしまったのだろうか……疑わしくなるくらい、ここには何も残っていなかった。

ズボンのポケットに手をつ込み、鍵一は目を細めた。

黙したまま、そよ風になぶられながら、自分が果てたとおぼしき場所を眺めている。

しばらくそうしていると、不意に後ろから声をかけられた。

振り向いてみると、朝生陽菜の姿が、そこにあった。

「よう、鍵一」

相変わらず、男勝りな口調である。

「ああ……」

鍵一は低い声で応えた。

「ここにいてと思ったわ」

言いながら、陽菜がゆっくりと歩み寄り、歩幅五歩分ほど残したところで足を止めた。

少しの距離を隔てて、陽菜と鍵一が対峙する。

長くつややかな髪をなびかせる陽菜の、その凜とした立ち姿に、

鍵一は僅かに息を飲んだ。

しかし、顔には出さない。

穏やかな沈黙が、二人の間をゆっくりと流れてゆく……。

ややあつてから、鍵一は、口を開いた。

「何から言い出せばいいの……うん、でも、まずは……」
「ごめん、かな」

数瞬だけ、視線を泳がせた鍵一は、やがて意を決するように、小さく息を吸い込む。

「俺さ……普通の人間じゃないんだ。信じられないかも知れないけど……でも」

「鍵一」

まくし立てようとする鍵一の言葉を、陽菜が遮った。

「信じるよ……」。鍵一の言うこと。鍵一が、これから言おうとすること、全部。だって、嘘つかないもんね、鍵一は……。特に、こんなときは」

少しだけ寂しそうな表情で、陽菜は続ける。

「じつを言うとな、うすうす、気づいてはいたんだ……。わたしに言えない秘密、あるんだろうな……。って。でも、言えないなら言えないで別にいいやって思ってた。いや、思ってる、かな。だって、口にするのもつらいから、秘密にしてるんだもんね。軽々しく言えるような秘密なら、それは秘密なんて言わないもの」

陽菜、と言おうとして、鍵一は言えなかった。

心の中を、あらゆる言葉が駆け抜けてゆく。

しかしそのどれもが、声になって外へ出て行かない。

「だからわたし、もうなにも聞かないって決めた。鍵一の辛い顔、見たくないし……。そこまでして、秘密を知りたいなんて思わない。どんな秘密を抱えていても、鍵一は鍵一だもんね。何が変わるってわけじゃないし。昨日のは、今まで知らなかった鍵一の一面を見てしまっただけ。ただ……。それだけの話」

言い切つて、陽菜は笑った。いつもの、太陽のような笑み。

見る人に元気を分け与える、素敵な笑顔。

憂鬱なんて吹き飛ばしてしまえ　　そう言わんばかりに輝いている。

「さてと、わたしはそろそろ仕事に戻ろうかな」

ぐぐつと、大きく伸びをして、欠伸をもらす陽菜。
きびすを返して、扉の方へと歩いて行く。

扉を開いて、一步、校舎の中へ踏み込んでから、彼女は振り向く。
「そうそう、今日は家にお邪魔するからね。夕飯、よろしく！」

言い放って、陽菜は扉の向こうに消えていった。

残された鍵一は、首筋を力なく搔いてから、

「……了解」

ため息を交えつつ、呟いた。

空を見上げる。

青々とした空。

終わりがない空。

鍵一の顔には、苦笑が一つ。

(やれやれ……)

どうにも、自分の周りにいる女性は思いのほか、強い人ばかりらしい……。

自分だけが不安になっておたおたしていたような、そんな気分である。

今回の一件で、陽菜も都も変わったようだ。

一回り大きくなったというか、芯がしっかりしたというか……。

成長、という表現が一番びったりくるかもしれない。

(俺は……どうなんだろう)

鍵一は考える。

果たして、四元王をこの手で倒した今、あのとき失った時を取り戻した今、何かが変わったのだろうか。

髪は相変わらず真っ白だし、目も翡翠色と、外見的には全く変わりがなかったように、内面の方も、何かしらの変化はなかったのだろうか……？

鍵一には、分からない。

いや、一つだけ、自信を持つて言えることがある。

心の中に浮かぶのは、相棒の屈託のない笑顔。

今ならきつと、相棒の気持ちに正直に伝えられるくらいには、素直になれているだろう。

どこか嬉しそうなため息をこぼして、鍵一は屋上を後にした。

ゆったりとした足取りで、鍵一は中庭へと舞い戻ってきた。

愛用のベンチで、スピリットが丸くなっている。

鍵一が近づくと、スピリットは僅かに顔を上げ、小さな声でおかえりと呟いた。

ただいまと、これまた小さく答えて、鍵一はベンチに腰を下ろした。

スピリットを抱き上げて、ベンチに仰向けで寝転がり、彼女を自分の腹の上に乗せる。

気持ちの良いそよ風が、白雪のような髪を優しく揺らす。

鍵一は目を閉じて、深く息を吐いた。スピリットが胸の上へと移動する。

「ねえ、鍵一」

「ん……？」

「なにしてたの？」

「ちよつと話してた。陽菜や、輝立と」

「どんな話？」

「……まあ、いろいろ、かな。ほとんど聞かされたカンジだけど」

「どうだった？」

「……なんつうか、女の人ってのは強いんだな、って思った」

「ふうん……？」

「……」

「……ねえ」

「うん……？」

「あんたはさ、陽菜ちゃんと、輝立さん……だったけ？ どっちが好

「きなの？」

「なんだよ、いきなり」

「いいから、答えなさいよ」

「なんで」

「なんでもよ」

「……………そうさなあ」

「うん」

「お前だよ」

「……………」

「……………」

「それ、本気？」

「嘘だと思うか？」

「……………うん」

「……………、良い風だな」

「そうね」

「……………」

「……………あたしも、鍵一が好きだよ」

「……………そうかい」

「……………うん」

春が終わり、夏の陽気が顔を出してくる頃。

ベンチの上には、嬉しそうに頬を染めた、二人の姿があった。

S o u l S p i r

it? 閃光少女? 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136u/>

Soul Spirit?閃光少女?

2011年7月6日03時12分発行